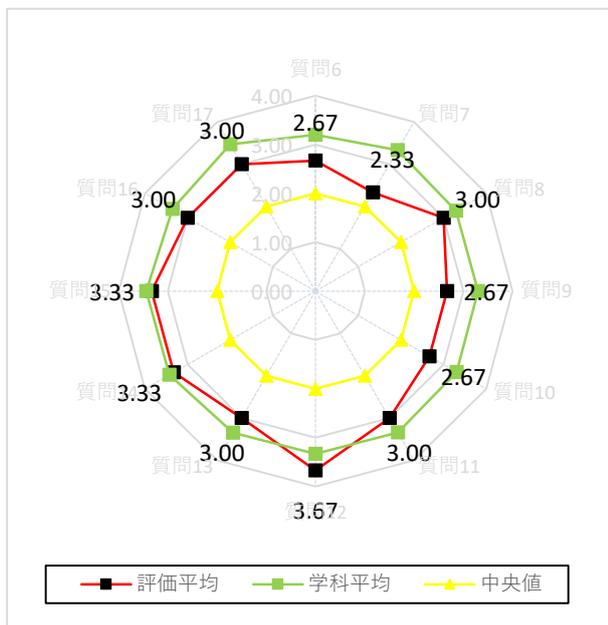
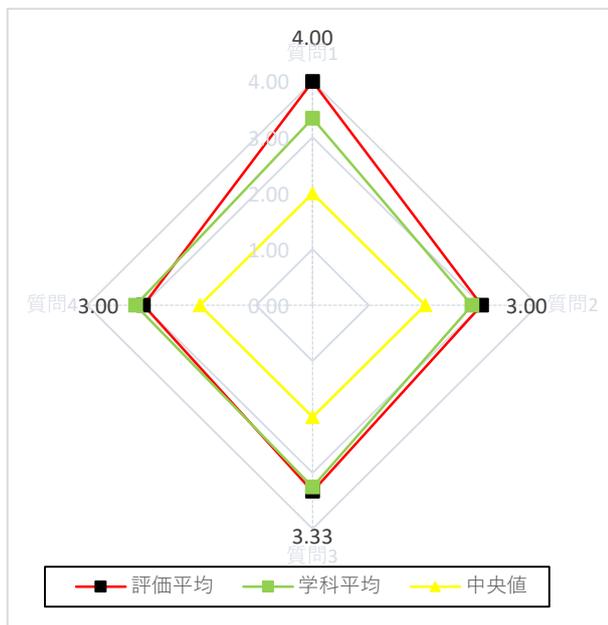


学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

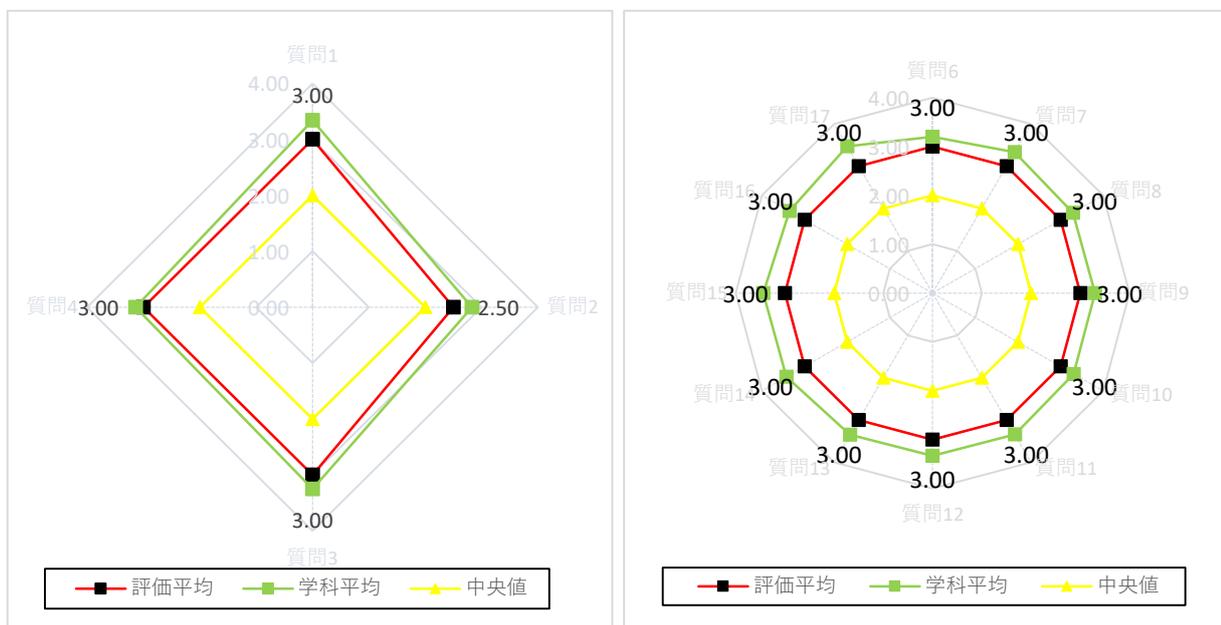
教員自身が、授業の内容把握が十分でなかったことが、質問6～10の低評価につながったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の反省を活かして、次年度からは内容の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

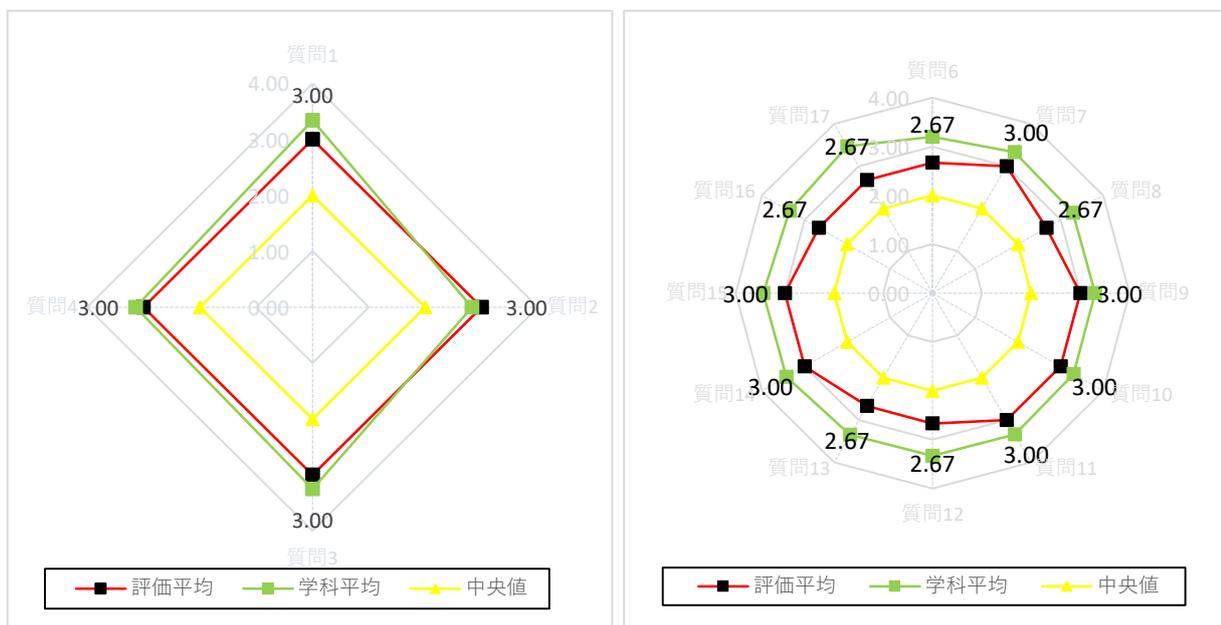
学生は入学後の初めてのゼミ方式の授業であり、高校までとは違う部分について戸惑う点がみられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

ゼミにおける資料の改善を考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

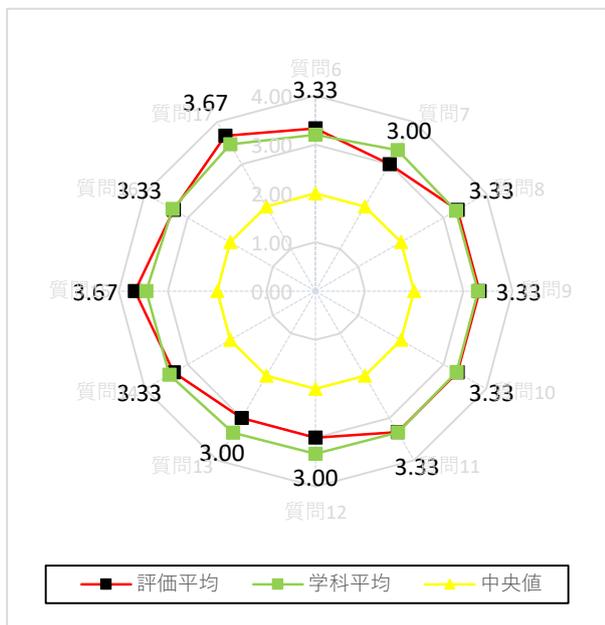
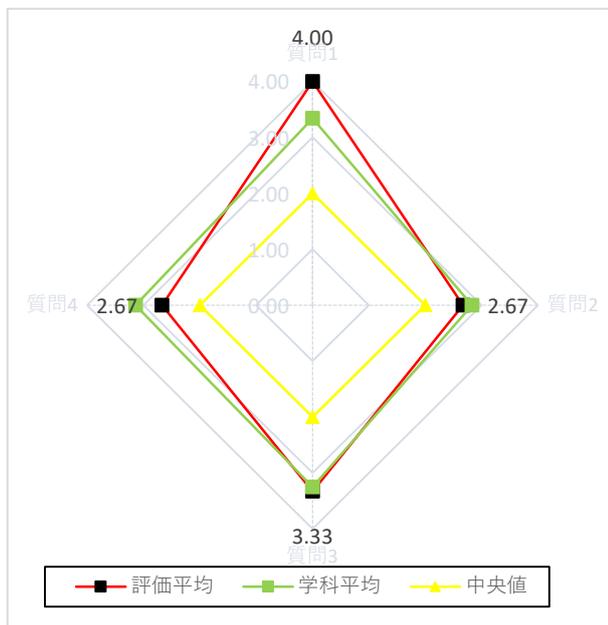
全ての項目で学科平均を下回っている。自分自身が基礎演習の内容を熟知していなかったのではないかと考える。また、学生とのコミュニケーション（ポータルサイトの活用）は取れていたように思っていたが、評価の結果（数字）としては期待値が出ていないように思う。この点に関しては十分な理解ができなかった。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は「あすなろう」の授業内容が大きく変更される。ゼミ別の活動においては、「主体的で対話的な学び」ができるような教師としての関わりを十分にとっていくとともに、常に、自身の課題をもって学びを進めていく学生を育てていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

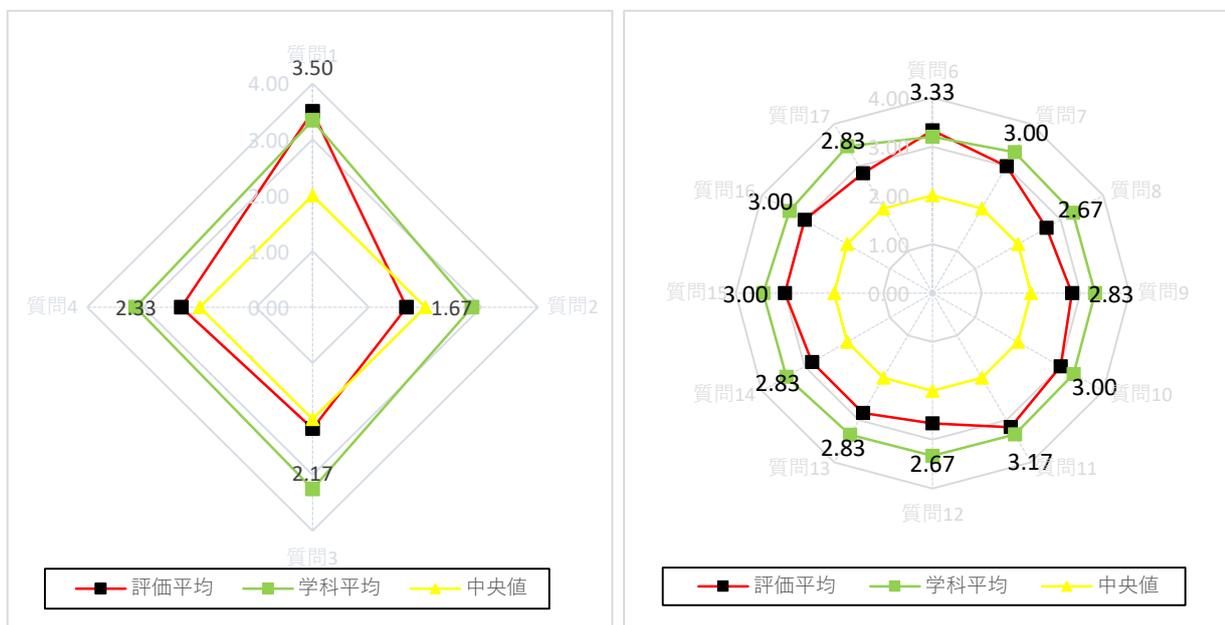
回答者少数であるため記述を割愛する。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答者少数であるため記述を割愛する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

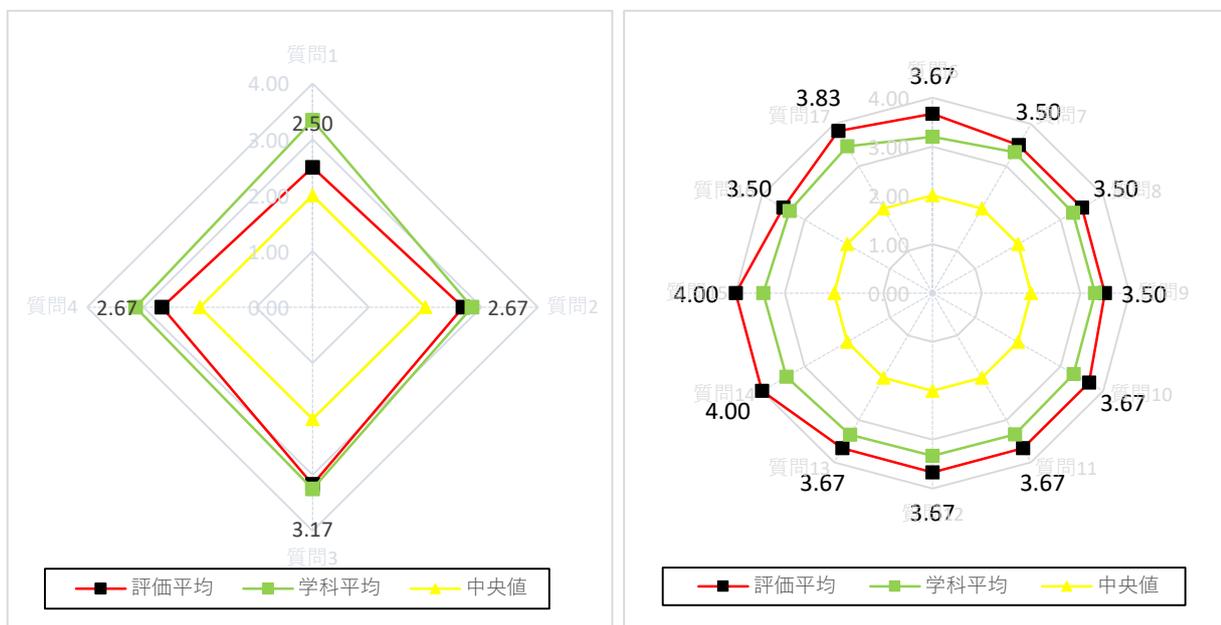
学生の授業評価は、ほとんどの項目で、学科平均に比べて大幅に低い。ゼミ活動よりも、学科全体での授業が多いが、十分、期待に応える内容でなかったということであろう。学生の期待値をきちんとつかむ必要がある。なお、この評価形式は、演習科目には適さない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は科目の内容が、かなり変わるので、学生が授業に参加しているという意識をきちんと持つことができるように工夫することが必要だと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

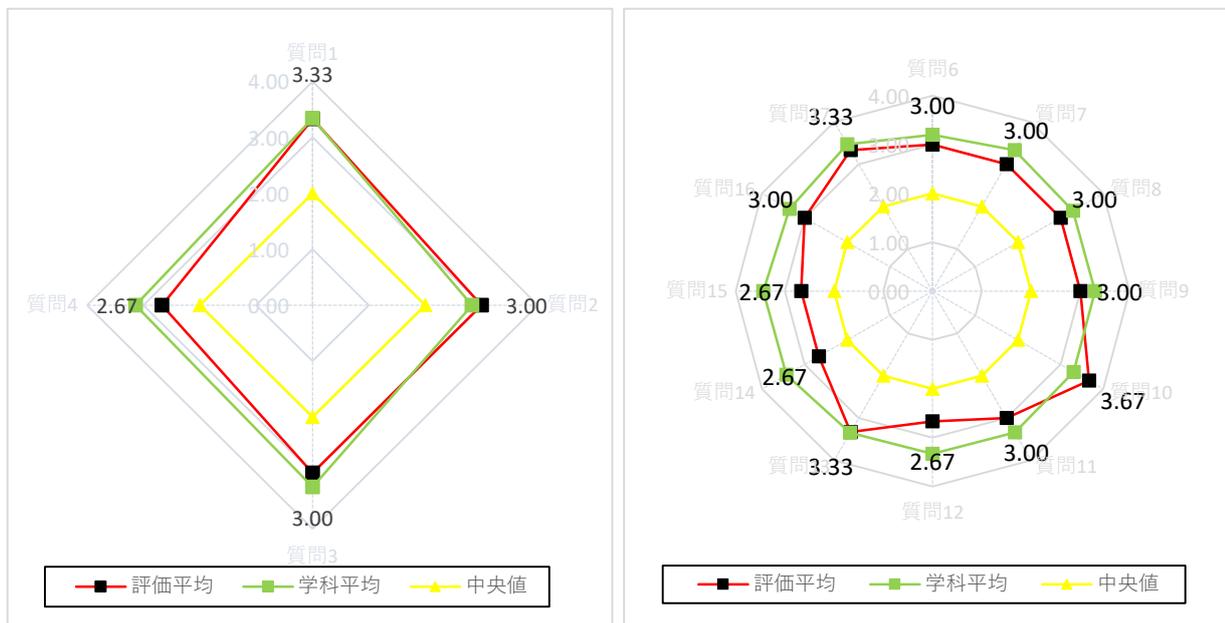
出席率が低い。出席を促す言葉がけが必要である。全体的には高評価である。

(3) 次年度に向けての取り組み

継続して精進したい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「基礎演習あすなろう」については、年間計画において全体で行われるもの、ゼミごとに行われるものに大別される。さらに全体の中で進められたものであっても、それを踏まえてゼミに持ち帰ってさらに一人ひとりが活発に意見し、メンバーで考えるという討論の機会が設けられており、より発展したものになるよう方向づけがなされている。

また、大学入学と同時に自らの生活をポートフォリオを通じて振り返ったり、大学生活の中で必要不可欠なマナーの点などを見直す機会にもなっている。

今回8名という少人数であったにもかかわらず、一人ひとりの意識が薄く、何度働きかけてもポートフォリオの作成ができない学生や、そもそも大学の授業の出席状況が悪い学生がおり、退学者も出ている。今一度あすなろう精神の再確認が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

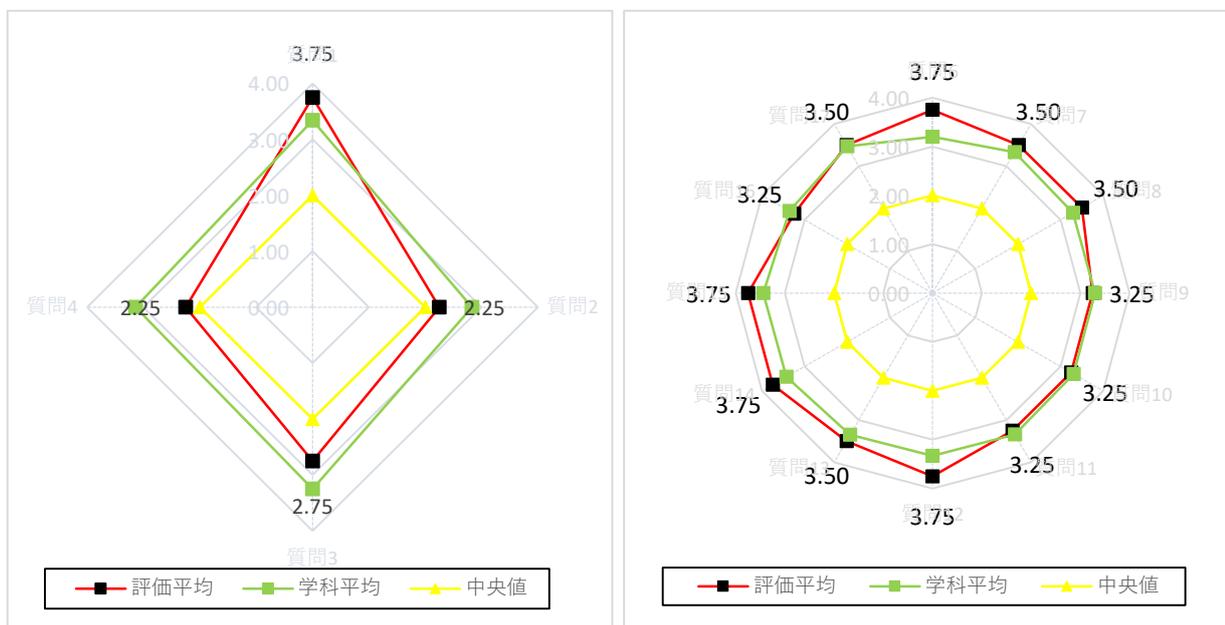
次年度においては、今回の反省点を踏まえ、一人ひとりの学生に対し、より目配り・配慮をしながら学生生活をサポートできるよう、ゼミの時間を大切にに取り組んでいきたいと考える。

そのためには、ポートフォリオ作成の徹底、それをもとにした早期の面談など工夫して進めていきたい。

また、年間計画に基づく到達目標の明確化についても、一人ひとりの学生が十分理解できるよう工夫して臨みたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まず、回答率をみると、8名中4名の回答で半数の回答であったことから授業評価実施について学生への周知徹底が不足していた点を反省する。

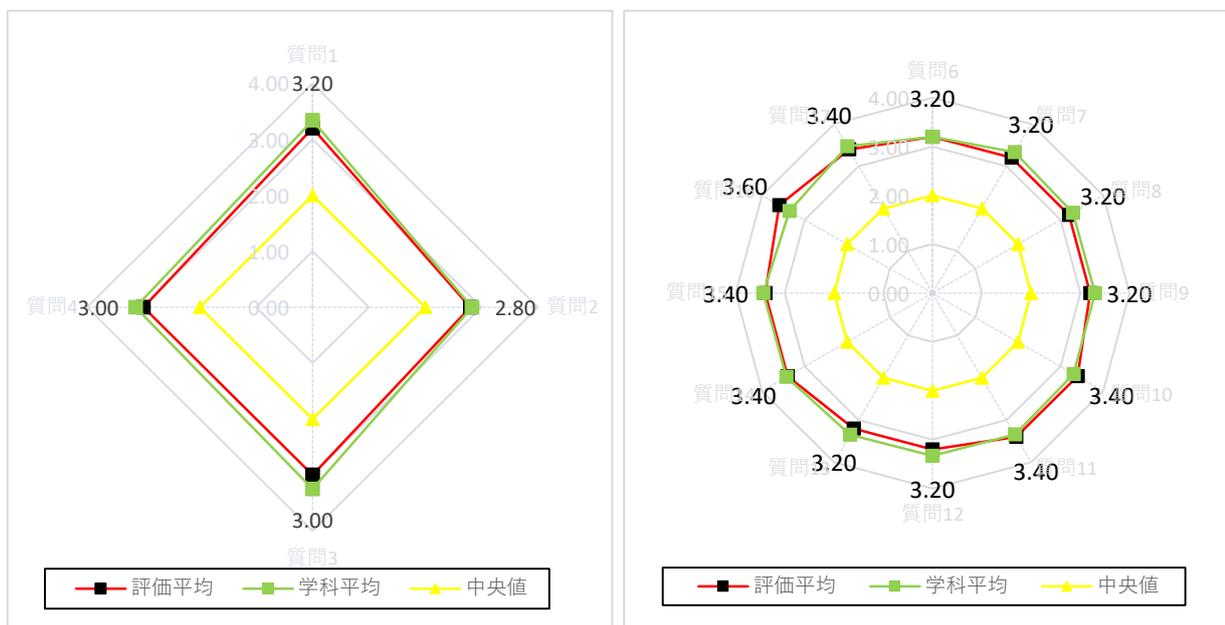
そのうえで、この度の授業評価実施学生について分析すると、①学生自身の参加態度の総合自己評価は2.50、②授業の総合評価は3.25であり、学科平均値を下回る結果となった。授業中の自己理解と工夫及び努力が必要であったことの意識が窺えた。一方、教員の誠実さ、公平や熱心さは高評価であった。しいて言うならば、双方向のやりとりをさらに充実されてもよかったかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

双方向のやり取りを強化し、学生自身の学びが深まるように進めていきたい。また、授業終了後に行う授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高め、100%の回答を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	18名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

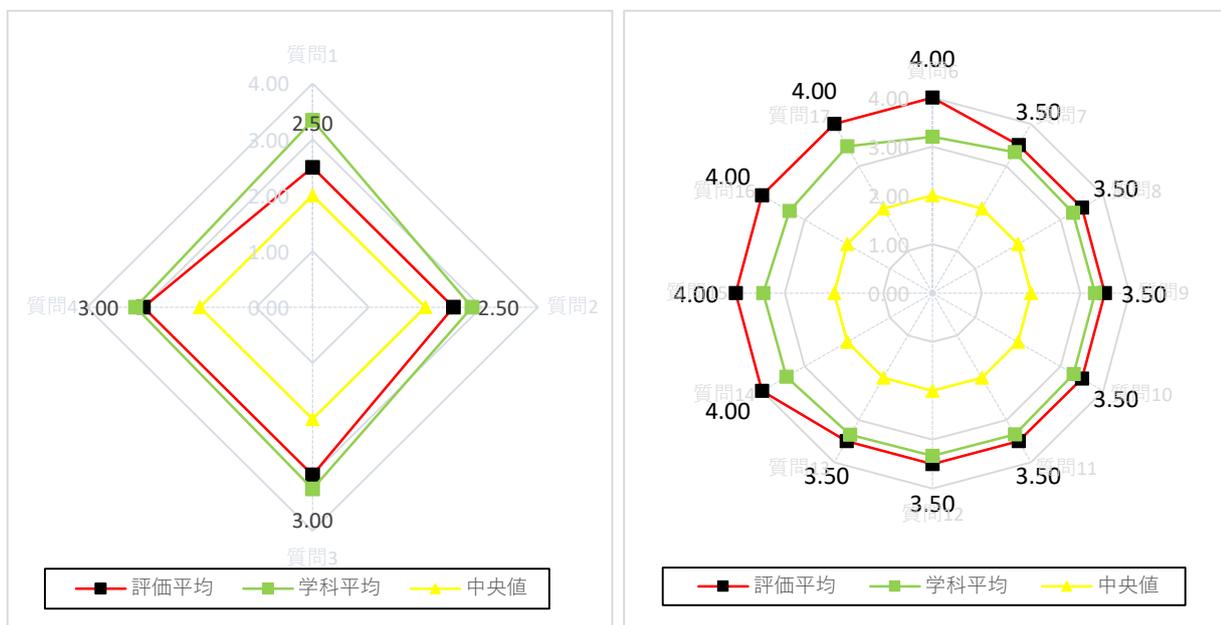
概ね、学科平均とほぼ同様であった。質問16「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」が、学科平均（3.36）を上回り3.6と高評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

質問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか。」，質問13「授業の進む速さは適切でしたか。」が、若干、学科平均を下回ったので、次年度は改善を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の授業態度に関する自己評価では、7名中1名の欠席数が多かったため、全体の数値が下がった。他の学生たちはほぼ欠席なしに参加していた。

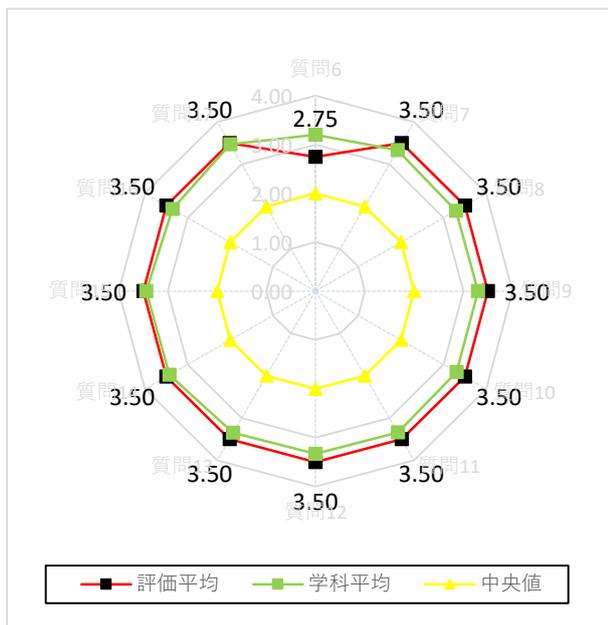
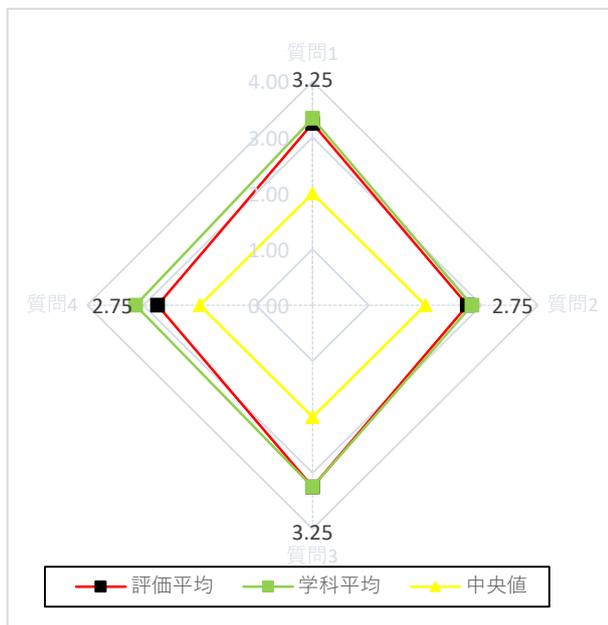
授業への評価については、シラバス、学生の質問への対応、公平さ、双方向的やりとり、熱心な指導の5項目で満点の4点評価であった。他の項目も学科平均を上回っている。実際のゼミでも、和気藹々で協力しており、初年次ゼミとして満足のいく内容だったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

本演習は、大学での学び、大学生活への導入として、重要な意義を持っている。一人ひとりの学生の気持ちを大切にゼミ運営を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

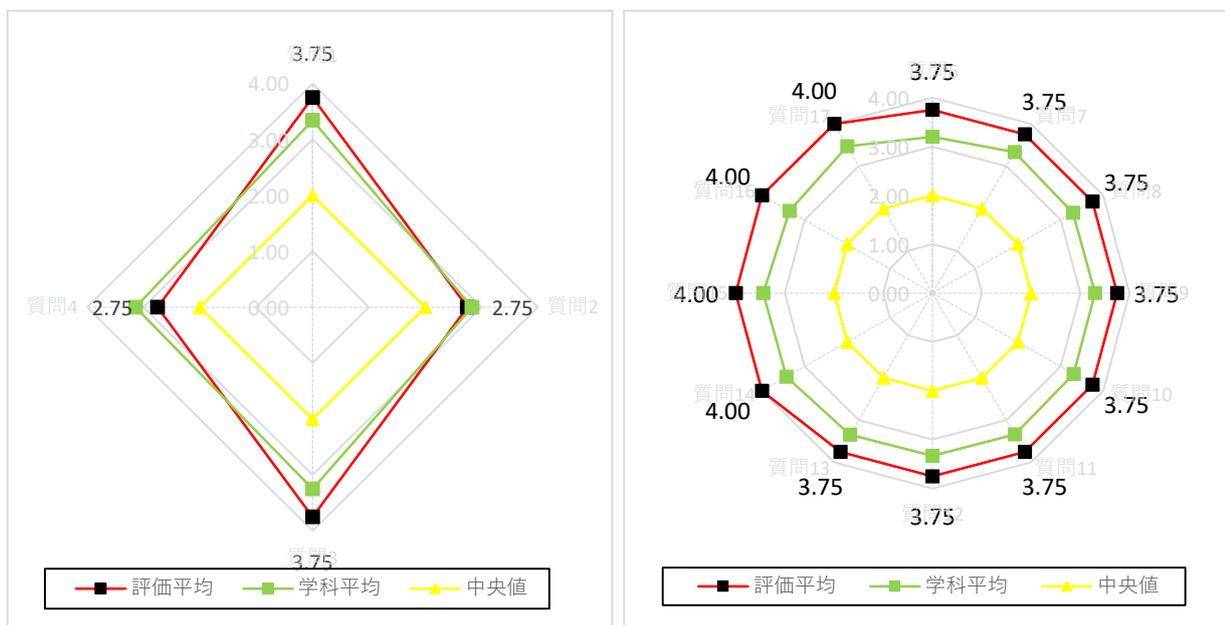
問6のみ評価が低い。これについては、全体でも、ゼミ別でも十分な説明・取り扱いをしなかったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

上記の考察・反省をもとに、次年度は時間をきちんと取って説明・取り扱いをしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		基礎演習あすなろう	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

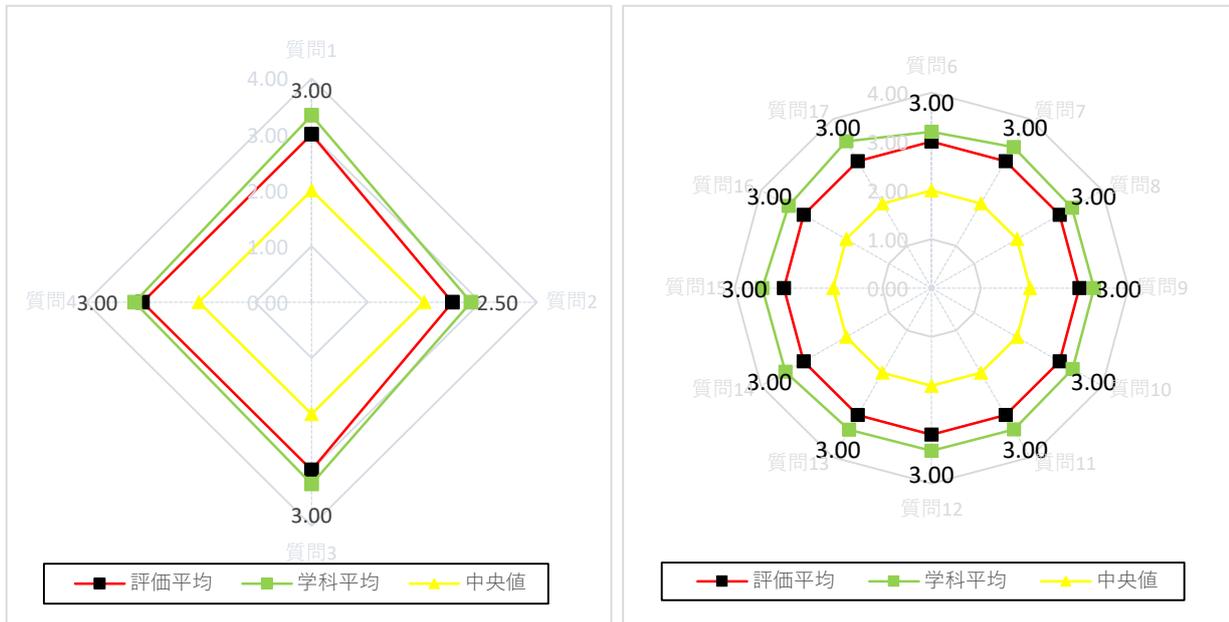
前期の授業開始当初より、学生たちの出席状況や受講態度は良好であった。授業で取り扱う諸課題に対しては、熱心に取り組む姿が見受けられた。但し、質問4の「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか」という項目については、学生たちの自己評価は低いという結果であった。この点への指導は、次年度に向けて強化していきたいと思う。質問項目6から17については、いずれも評価は良好で、全体的なバランスも良い。学生たちの自己評価から、少人数による係り続けることの重要性を痛感している。

(3) 次年度に向けての取り組み

学習に対する学生の自己評価を上げることができるよう、指導を強化していこうと思っている。次年度は、特に、個々の学生が自ら工夫しながら学ぶ姿勢をもって課題に取り組むことができるよう、この点に特化して細やかな指導助言を行うことを継続的にしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

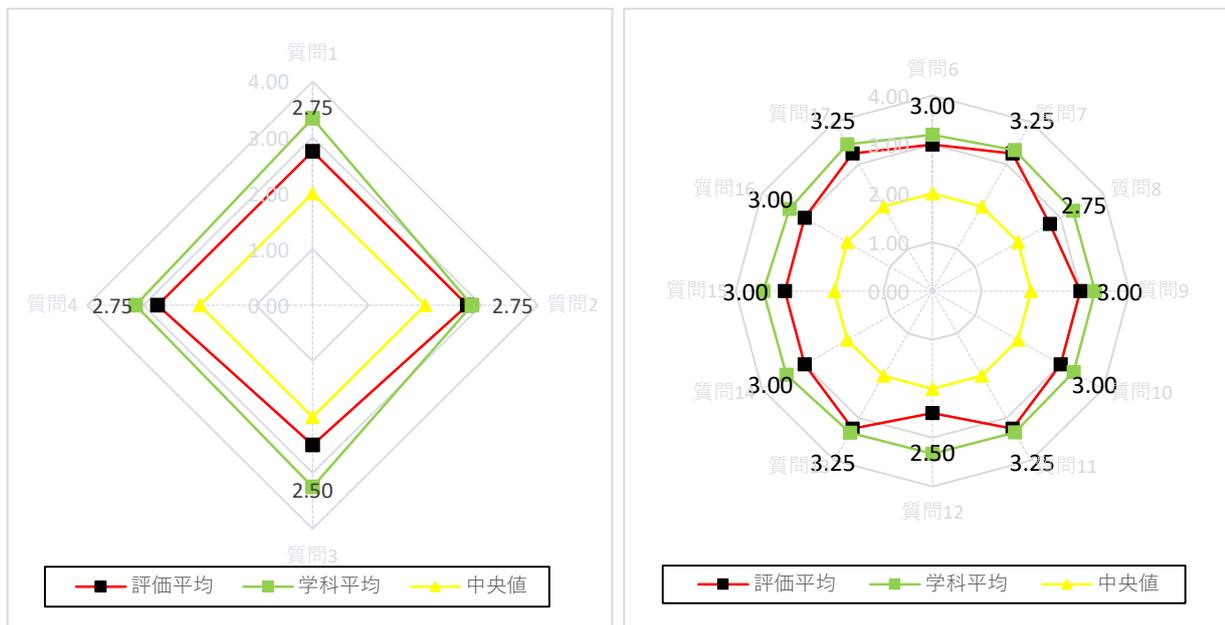
学生は入学後の初めてのゼミ方式の授業であり、高校までとは違う部分について戸惑う点がみられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

ゼミ時の資料の改善を考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

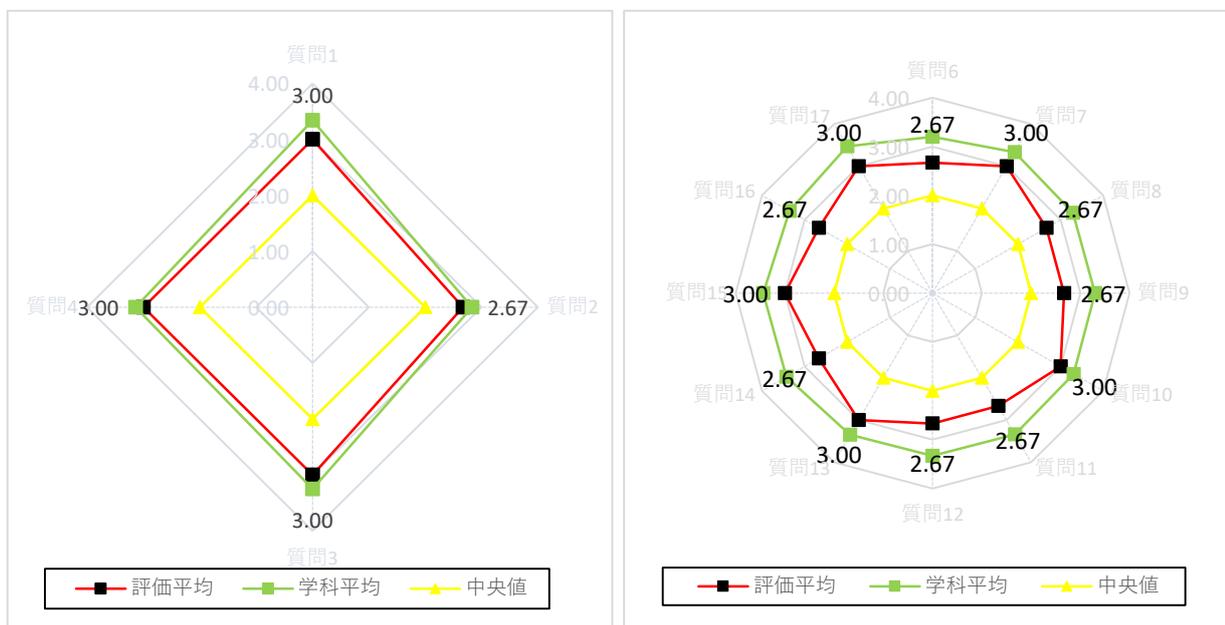
基礎演習あすなろうより、評価は上がっている。PPTを作成して発表するなど、取組内容が明確だったことが授業参加の実感を持つものとなったのであろう。なお、この評価形式は、演習科目には適さない。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、体験活動の方にもう少し重点が移るので、学生の参加意識を高める方向で授業を充実させるように努める。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

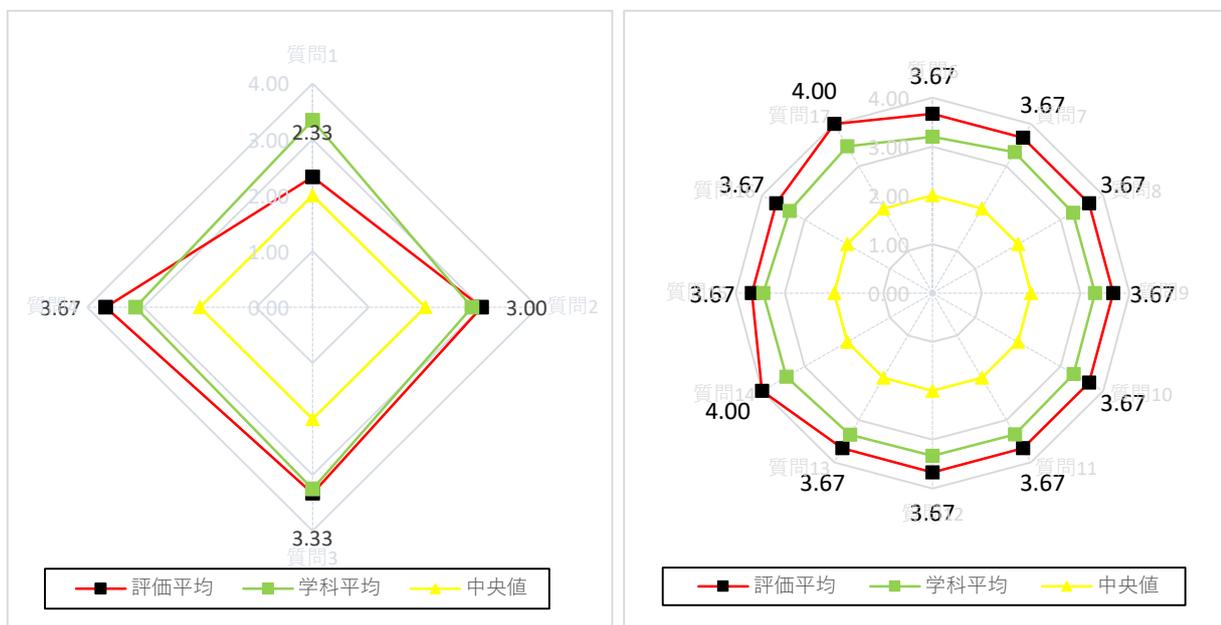
全ての項目において学科平均を下回っている。本科目（評価）は「体験」ゆえ、ゼミ担当としてどのように受け取ればよいのか疑問に思う。教員個人としての評価だけではないように思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は「あすなろう」の内容が変更される。全体学習とゼミ別の学習を関連させながら、大学の学びの基礎づくりとしてのゼミ学習を計画的に進めていきたい。その際、学生の実態の確かな把握と、課題意識の醸成に力点を置いた展開でありたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「あすなろう体験 I」については、キャリア講座、社会人基礎力講座等さまざまな学部講師による講座が組み込まれ、社会において必要な力を再確認する機会になっており、学生にとって非常に有益である。また、年間を通して多種多様なボランティアを選択し、参加している。このボランティア活動において、社会人基礎力や一歩踏み出す力を養うための実践が行われており、一つひとつを確認しながら学習し、成長する姿が見られる。

また、授業の最後の部分で行われるボランティア体験の報告会に向けて各自がプレゼンテーションスライドを作成し、発表し合い、共有し検討することによってお互いに学び合う機会となっている。

授業評価については概ね学科平均より高い評価となっているが、ボランティア応募が遅かったり、中にはポイントが不足して再履修となっている学生もいることは反省すべき点である。

(3) 次年度に向けての取り組み

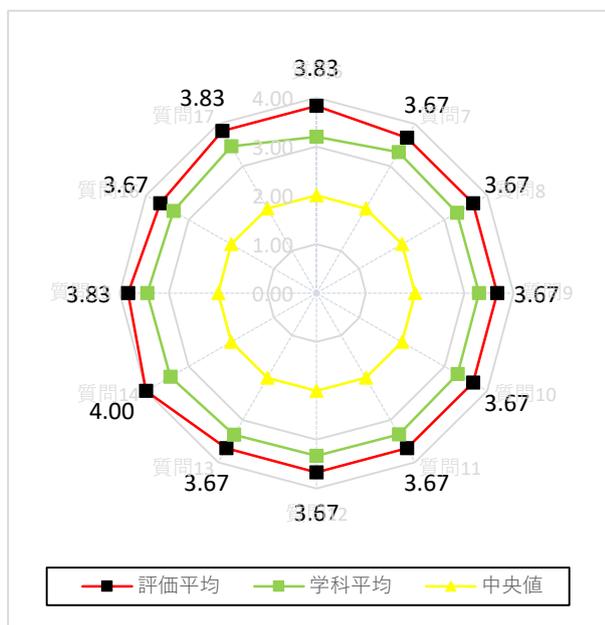
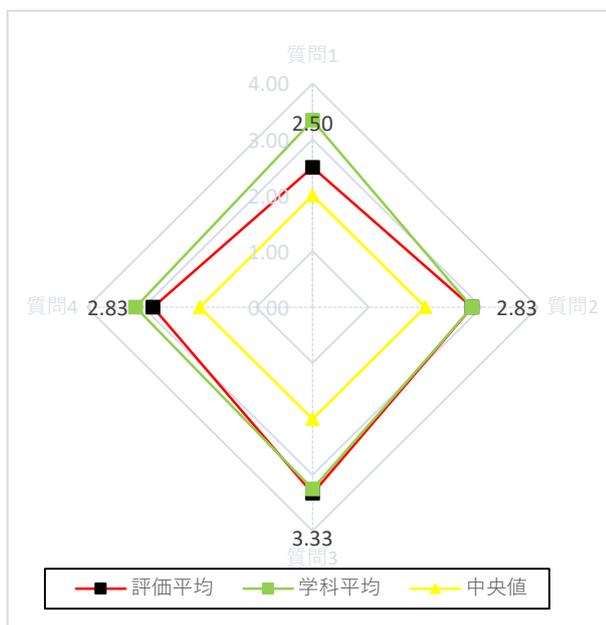
次年度についても、学生が社会人基礎力や一歩踏み出す力をしっかりと獲得し、キャリアアップする上でさまざまな力を発揮することができるよう、外部講師の講話やボランティア活動等の体験ができるようサポートしていきたいと考える。

年間計画に基づく到達目標の明確化についても、一人ひとりの学生が十分理解できるよう工夫して臨みたい。

ボランティア活動の応募については、遅れている学生に対して早い段階で指導できるよう努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

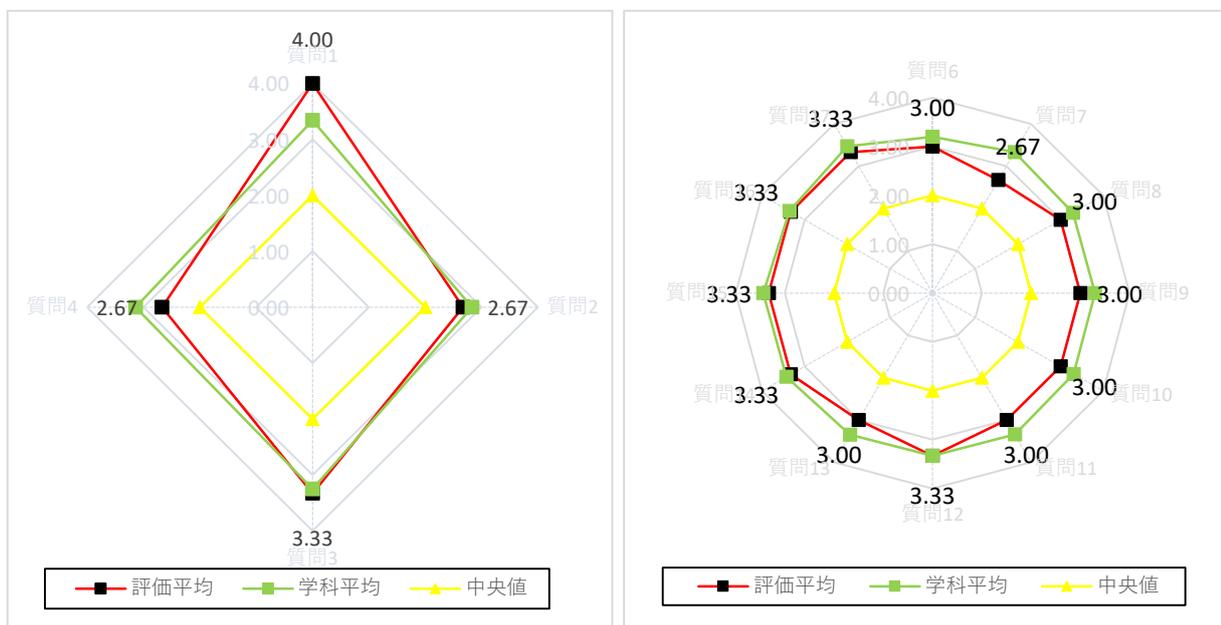
出席率がやや低いため出席を促す言葉がけが必要である。全体的に高評価である

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き精進したい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

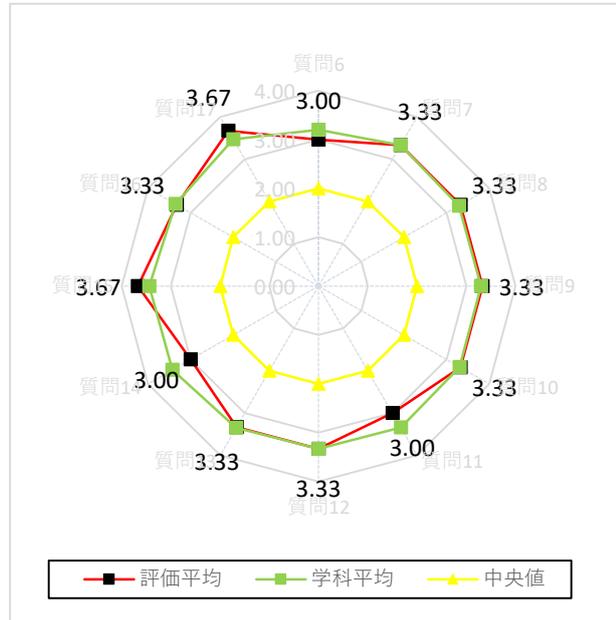
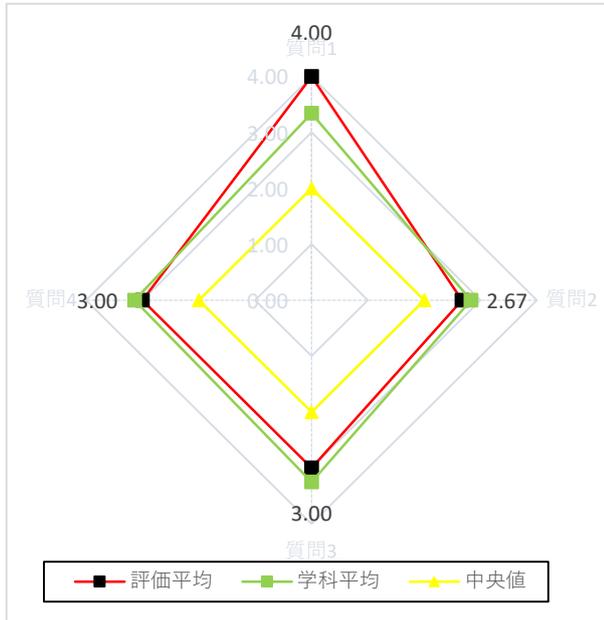
教員自身が、授業の内容把握が十分でなかったことが、質問6～10の低評価につながったと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の反省を活かして、次年度からは内容の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	6名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

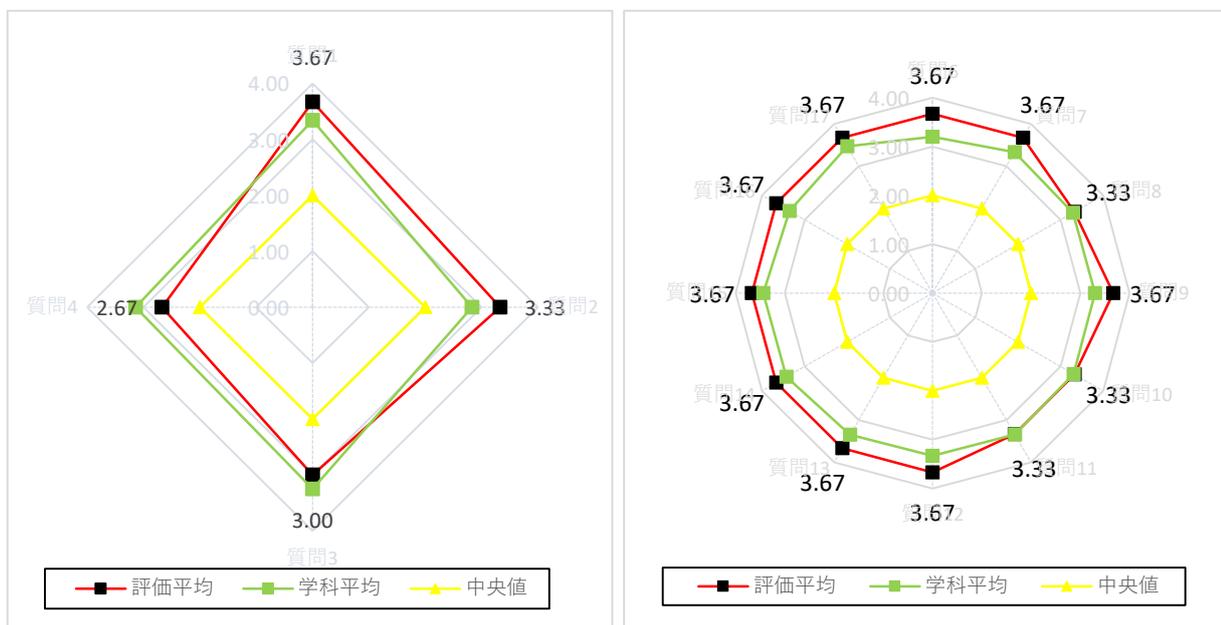
回答者少数であるため記述を割愛する。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答者少数であるため記述を割愛する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

まず、回答率をみると、8名中3名の回答であったことから授業評価実施について学生への周知徹底が不足していた点を反省する。

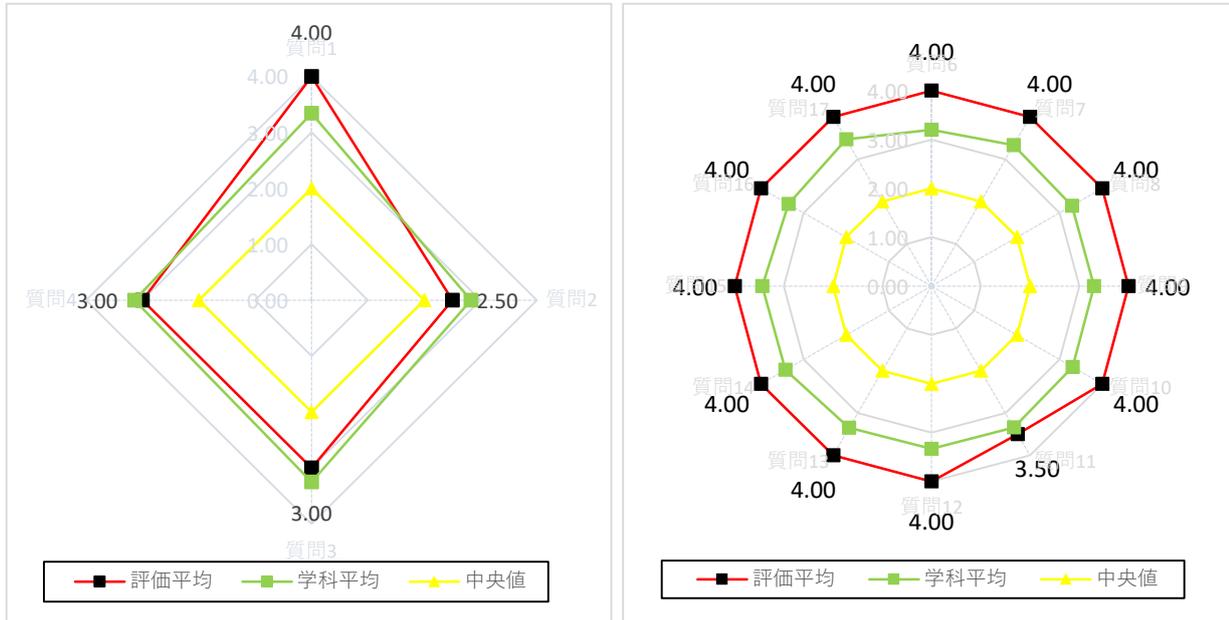
そのうえで、この度の授業評価実施学生について分析すると、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.00、②授業の総合評価は3.33であり、学科平均値をやや下回る結果となった。「基礎演習あすなろう」と同様に、授業中の自己理解と工夫及び努力が必要であったことの意識が窺えた。一方、授業の内容、方法、教員の対応については3.60前後で評価としては高かった。学生の体験活動がより充実したものになるための事前事後指導を充実させた結果ともいえるだろう。

(3) 次年度に向けての取り組み

体験活動の事前事後指導のさらなる充実をはかり、学生自身の学びが深まるように進めていきたい。また、授業終了後に行う授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高め、100%の回答を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

受講態度に関する学生の自己評価は、ほぼ学科平均に近い。

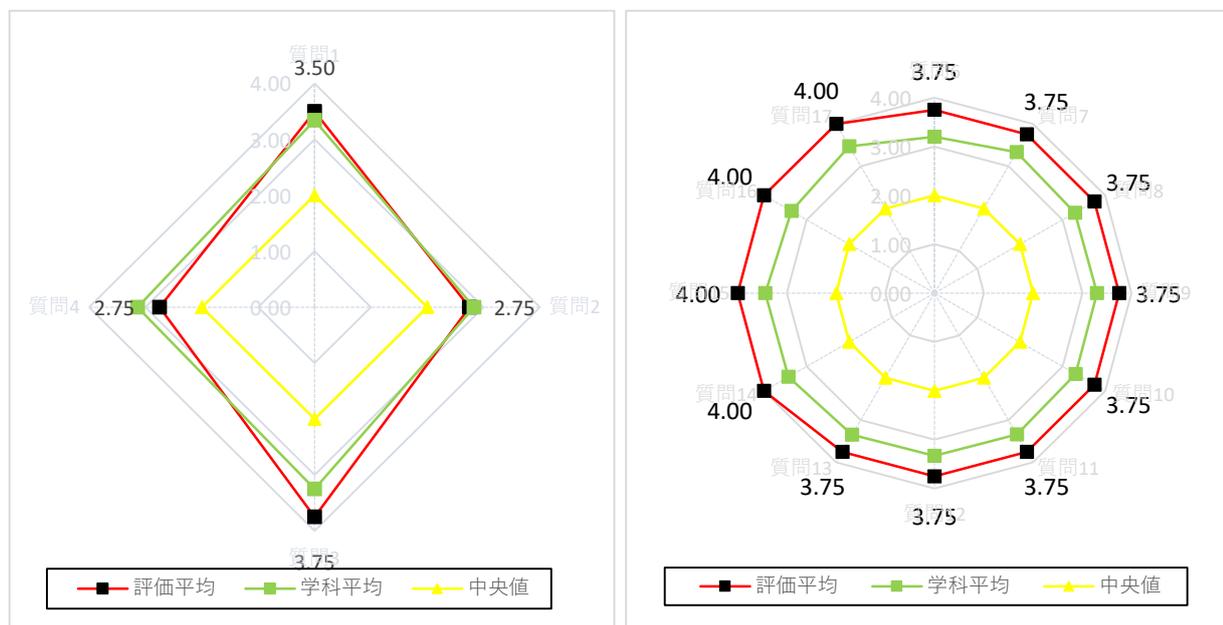
授業に対する評価では、12項目中11項目が満点の4点評価であった。地域でのボランティア体験を中心に、ゼミで話し合い、プレゼンテーションをするという本科目に対する学生の満足度は極めて高い。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、本年度の成果を踏まえて、学生の気持ちに寄り添ったきめ細かな指導をしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

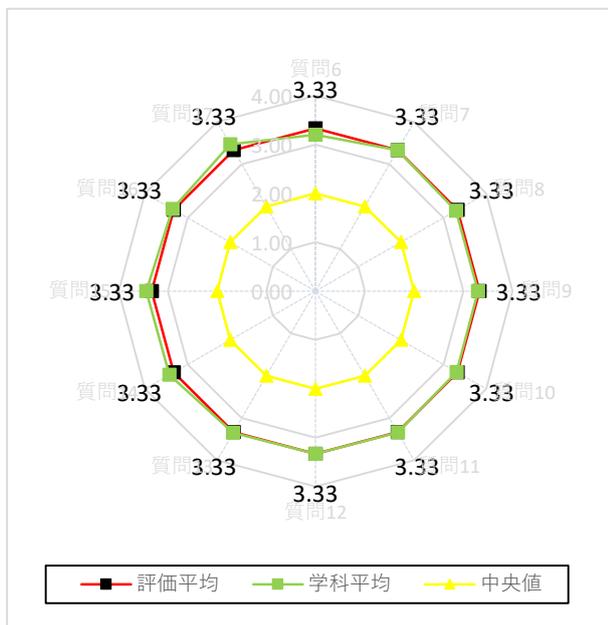
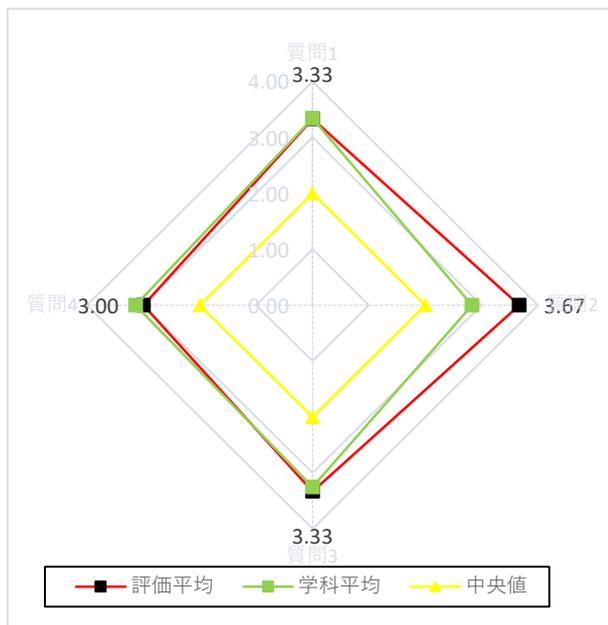
この授業では、学内での授業に加え、学外でのボランティア活動にも取り組んでいく。学外でのボランティア活動体験後のゼミ別の授業時には、学生たちはボランティア活動を通して地域の方との交流体験や次回に活かすための反省等を報告していた。それらの発言の中で、地域に向いて行うボランティア活動は、自分で工夫して取り組むというよりも、現地で指示されたことに対応する場面が多く、自分の判断で動く場面は限られていたようであった。このことが、質問項目4の自己評価の数値に反映された可能性があると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生たちのレポートからは、学外で取り組むボランティア活動を通して、社会人基礎力に関する多くの気づきを得ることができていたことが伝わってきた。また、地域での諸活動は、佐賀県外出身者のみならず、県内出身の学生にとっても、佐賀を知り、佐賀の魅力に触れることができる機会となっていた。一方で、慣れない土地での活動や初対面の方との交流は、気を遣うことも多く、学生によっては精神的な負担感に繋がっているケースも見受けられた。そのような学生も、ボランティア活動経験を重ねていくことによって、結果的には貴重な経験であったとプラス評価をするようになっていった。通年で開講している授業であることから、次年度も個々の学生に応じた精神的なサポートを行っていく必要があると考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

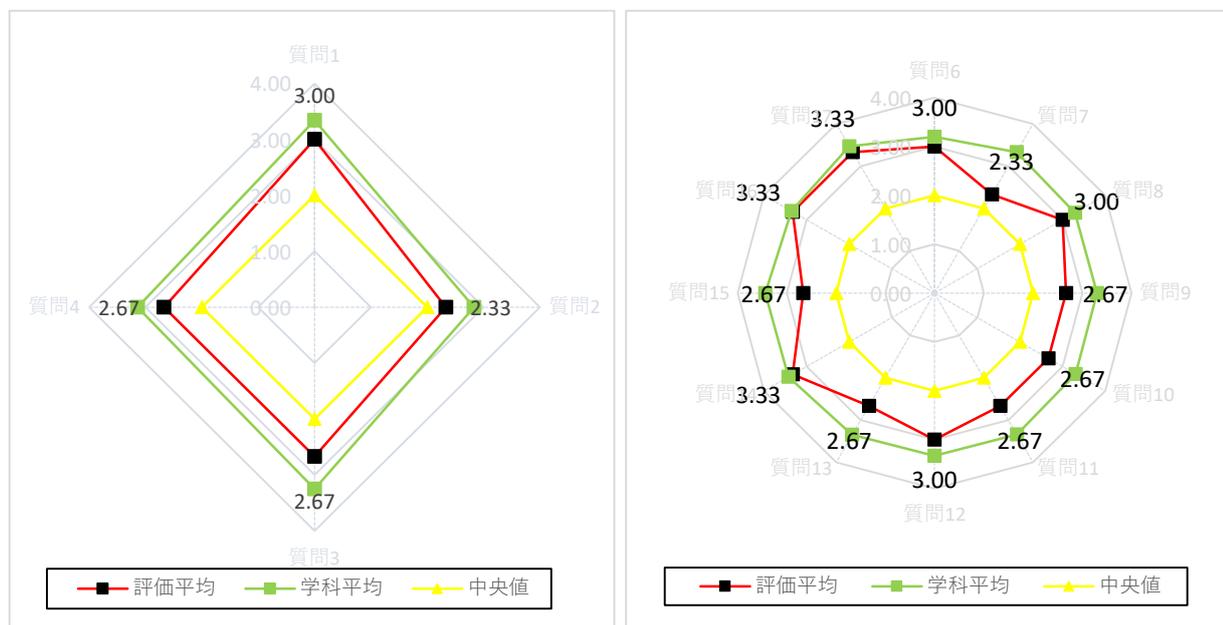
ほぼ学科平均と同じ評価であるが、その理由としては学年全体での授業が多いからではないかと考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

上記の考察より、ゼミ別の授業をもう少し増やしてはどうかと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		あすなろう体験 I (基礎)	18名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

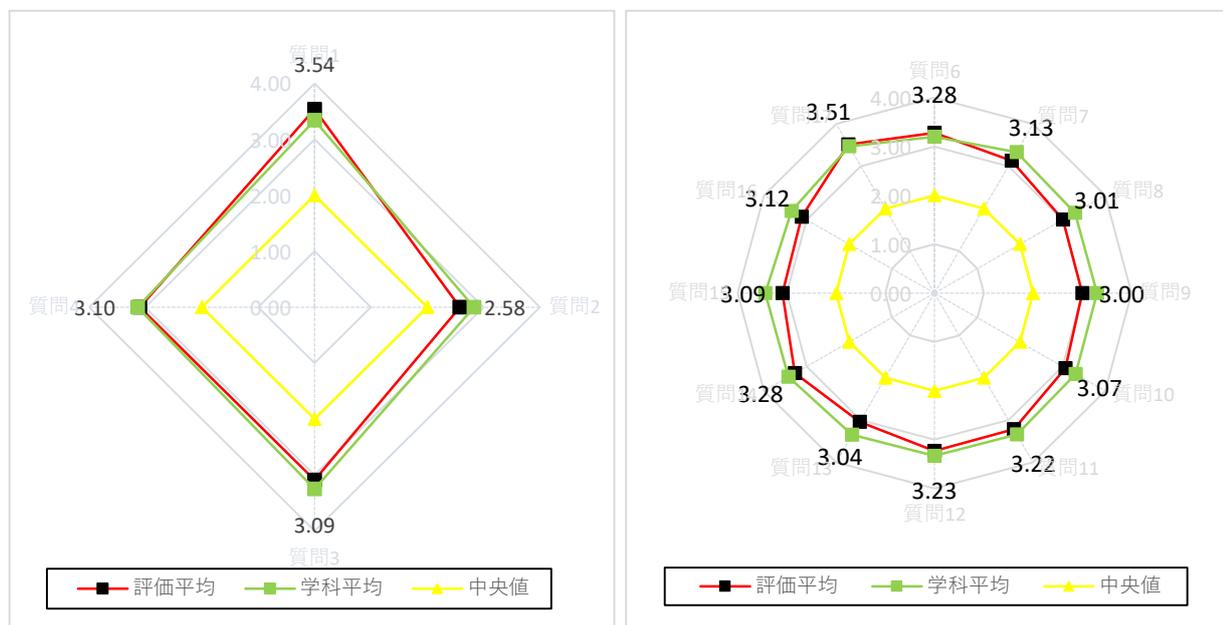
「基礎演習あすなろう I」と比べ、学生評価が、著しく低くなっており、評価自体の信頼性に問題があると思われる。人数も「18名」と実際に担当していた人数を大幅に上回っており、データ自体に問題があると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

「質問15 公平に学生に対応しましたか。」が、特に低いのは問題である。しかしながら心当たりは無く、「基礎演習あすなろう I」でも「公平に対応している」との評価を得ているので、データ自体の信頼性に問題があると思われる。次年度は、高評価を得られるように努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		文学と言語	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

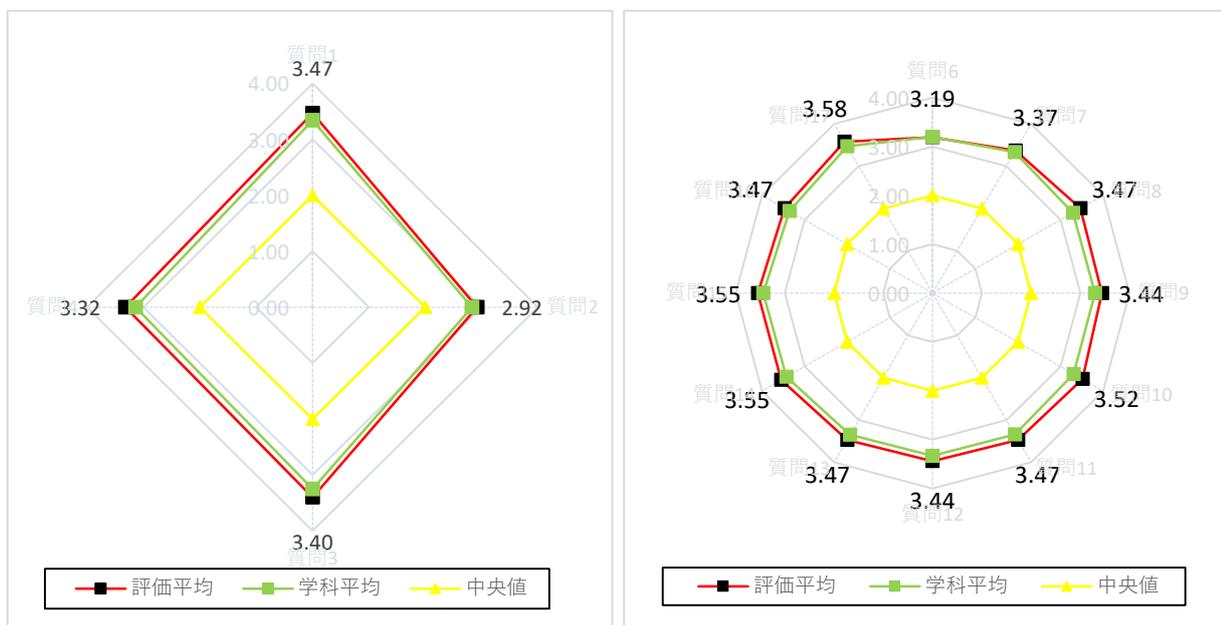
学科平均を下回る項目が多く見られた。この中で重要な項目は「授業の進度」であろう。進度が早いと理解が難しくなり、学生とのやり取りも浅くなるからである。資料は豊富に準備していたが、それらを十分に生かせなかったのではないかと省察している。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は二年目になるので、授業の基本である「学習者の実態を確実に把握する」とともに、「教えることと考えさせること」をしっかりと区別したメリハリのある授業を展開していく。要は、自分自身がじっくりと構えて、焦らず、慌てず、教えることを精選すること。このことを忘れず実践していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語会話 I	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

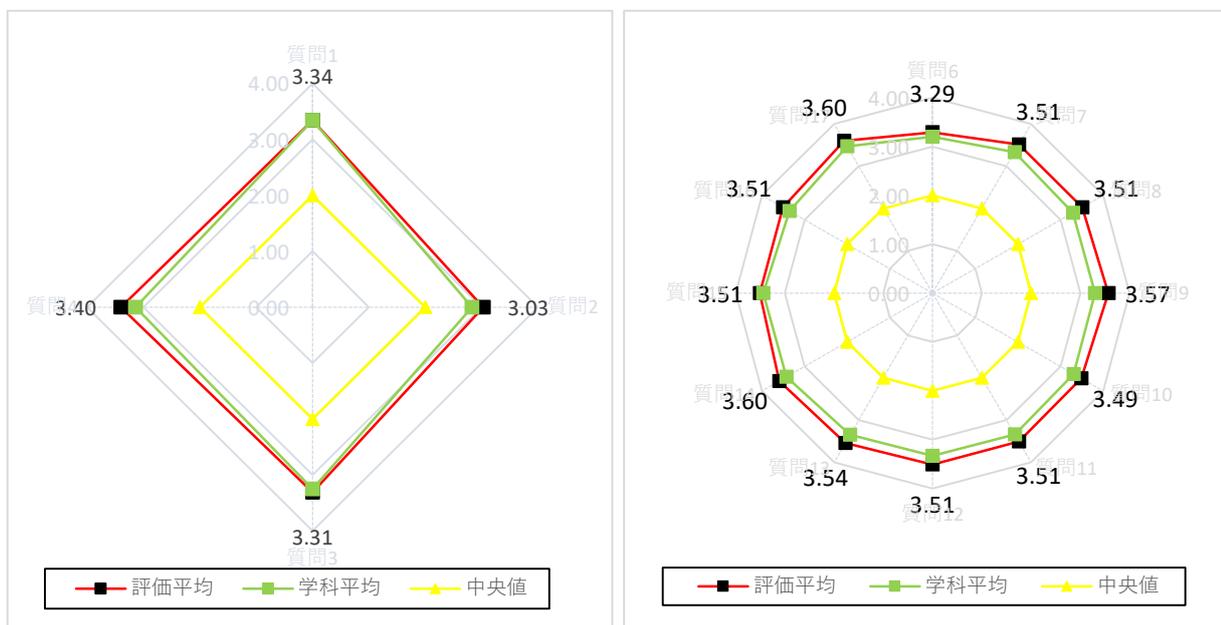
いい結果だと思います。オンライン教材を使って2年目で学生の評価が高いと思います。

(3) 次年度に向けての取り組み

この科目は次年度ありませんので、取り組みありません。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		英語会話Ⅱ	95名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

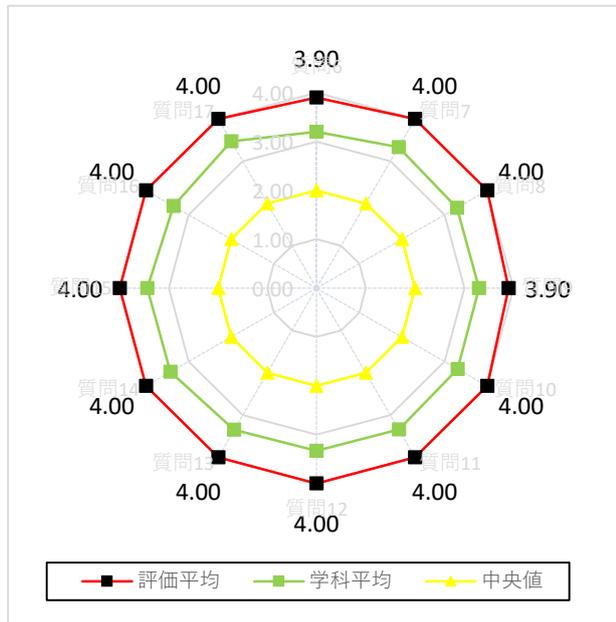
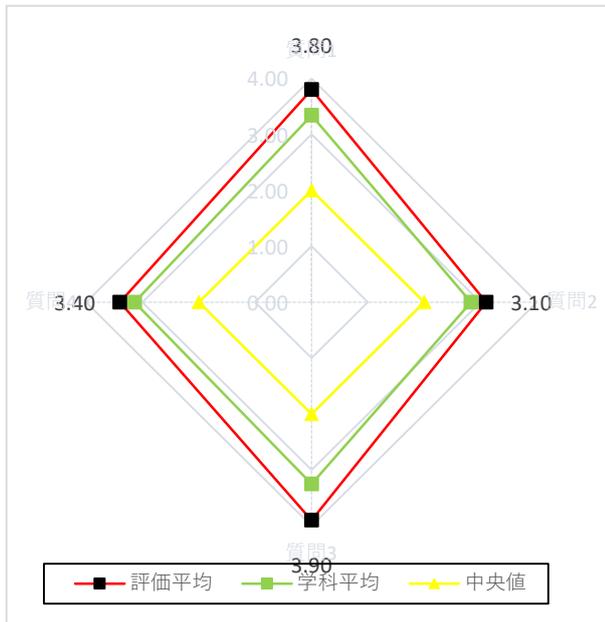
とてもいい結果と評価だと思います。オンライン教材を使って2年目です。

(3) 次年度に向けての取り組み

この科目は次年度ありませんので、取り組みありません。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		ウェルネス・スポーツ	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

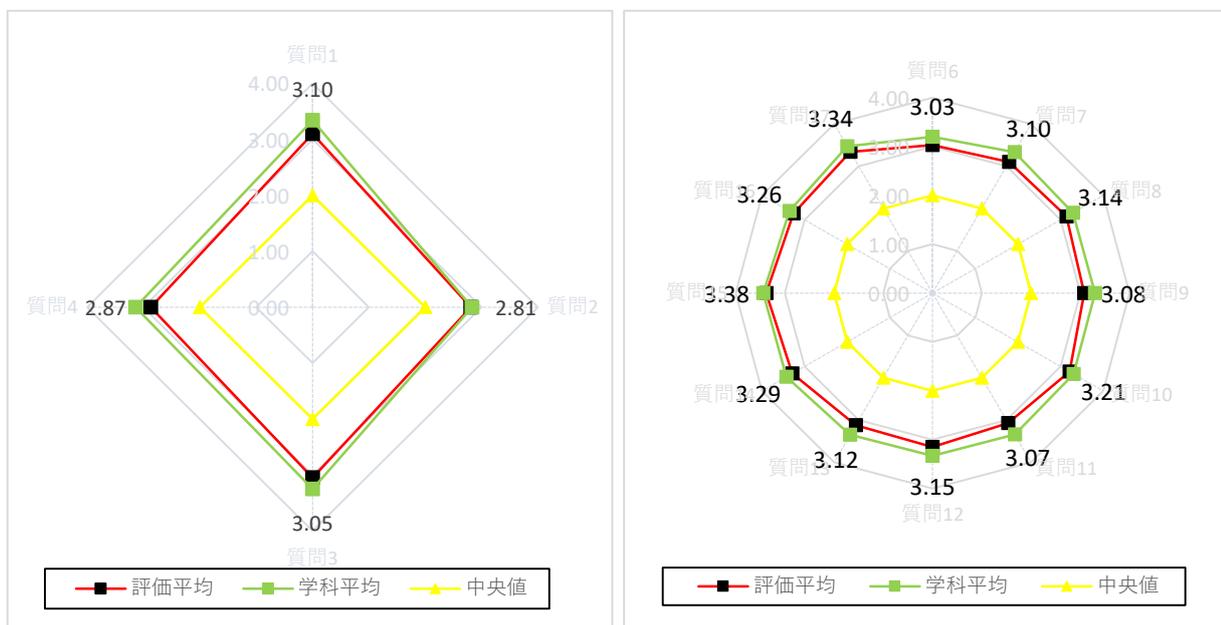
非常に高評価である

(3) 次年度に向けての取り組み

このまま継続して精進したい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		情報処理基礎	192名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

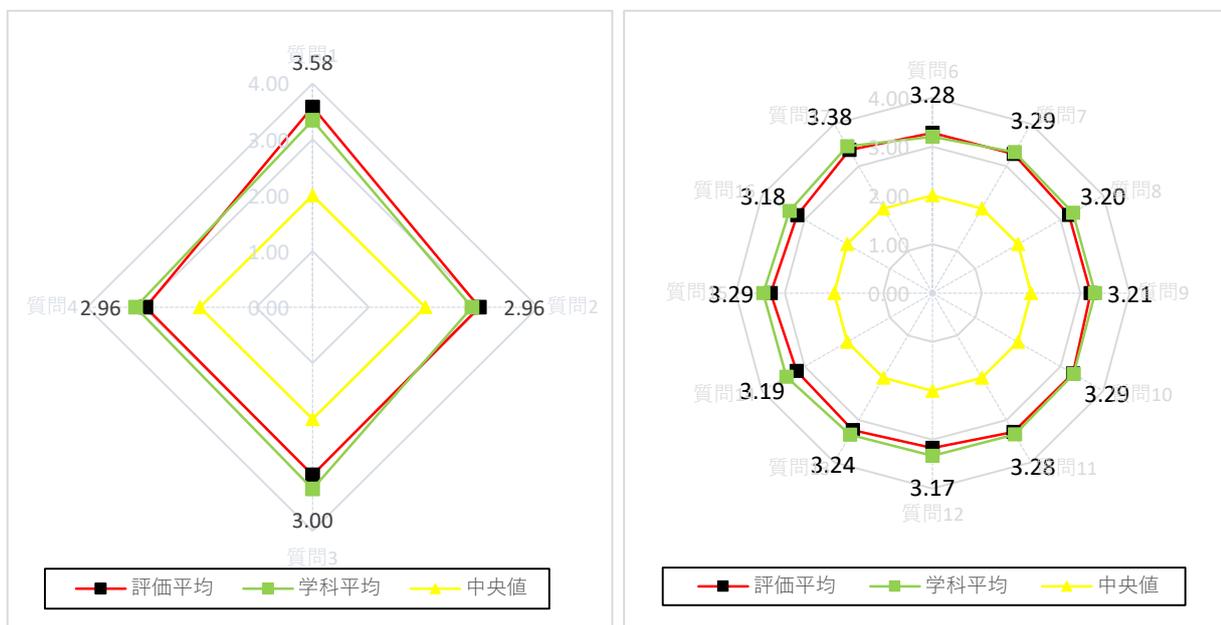
- ①学生の自己評価及び教員授業評価共に中央値を上回っており、又学科評価平均値がほぼ3.2に対して本教科の平均評価もほぼその近傍付近に位置している。
- ②Q. 6～Q. 17のいずれも3.1と3.3の間にあり、学生からの授業評価としては概ね肯定的に捉えられていると判断している。
- ③毎年度の事であるが、シラバス説明・到達度の明確化・興味関心への工夫・視聴覚機器 (CAI教室) の多用・マイク利用・学習の低進捗学生に合わせた授業速度・学生との双方向授業 (CAI装置) 等の各ポイントに対しては、全て更に高得点を期待して良いレベルの授業展開実績と例題の工夫などを行っているにも拘らずこの程度の一見すると非常に厳しい学生からの評価値とも判断できる結果の繰り返しに終始している。
- ④毎年この学生評価は、どのように改善策を変えても、良くもなく悪くもない、いわゆる“普通”にチェックを入れているのではないかと考えざるを得ない結果である。
- ⑤本来の教育の質と当該学生評価との相関が不明であり、例年の評価結果が真の学習効果の向上活動に資する方策は何かを再検討する必要があるように考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

- ①例年の学生評価を受けて、教科書が指定する学習例題 (本来の高等教育機関である大学・短大で実施すべき内容とレベル) に代えて、できるだけ若者受けすると想定できる興味を引く例題、或いは各専門分野 (例えば日本と世界の対比教育関連や心理関連データの活用及び独自例題の考案とインターネット情報利活用や個人スマホの活用等) に合う身近な課題練習を既に近年特に多用している状況であり、以後本来必要とされる情報リテラシー授業に対してどのような興味の持たせ方が今後更にあるであろうかと真剣に思案している最中である。
- ②単に評価点数を上げる為の単純なエンターテイメント性の工夫ではなく、何をきちんと学習し身に付けて欲しいかを考慮した教育対応を考えての指導方針で、今後の授業を実施して行きたいと思っている。
- ③受講者が自発的に授業に参加できるような学習環境と教材を整備の上、アクティブラーニング形態を主体とした展開方法に全面的にシフトし、その結果としての当該学生達からの評価の推移を以後慎重に確認して行きたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		子ども学総論	145名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

子ども学部基幹科目である本科目は、両学科合わせて145名の受講生に対してオムニバス形式で展開している。私は、全15回の授業のうち3回を担当した。

学生の授業態度に関する項目は、ほぼ学科平均値に近いが、「居眠り・私語」に関する項目が平均値を下回っているのは、大人数ということが影響しているだろう。

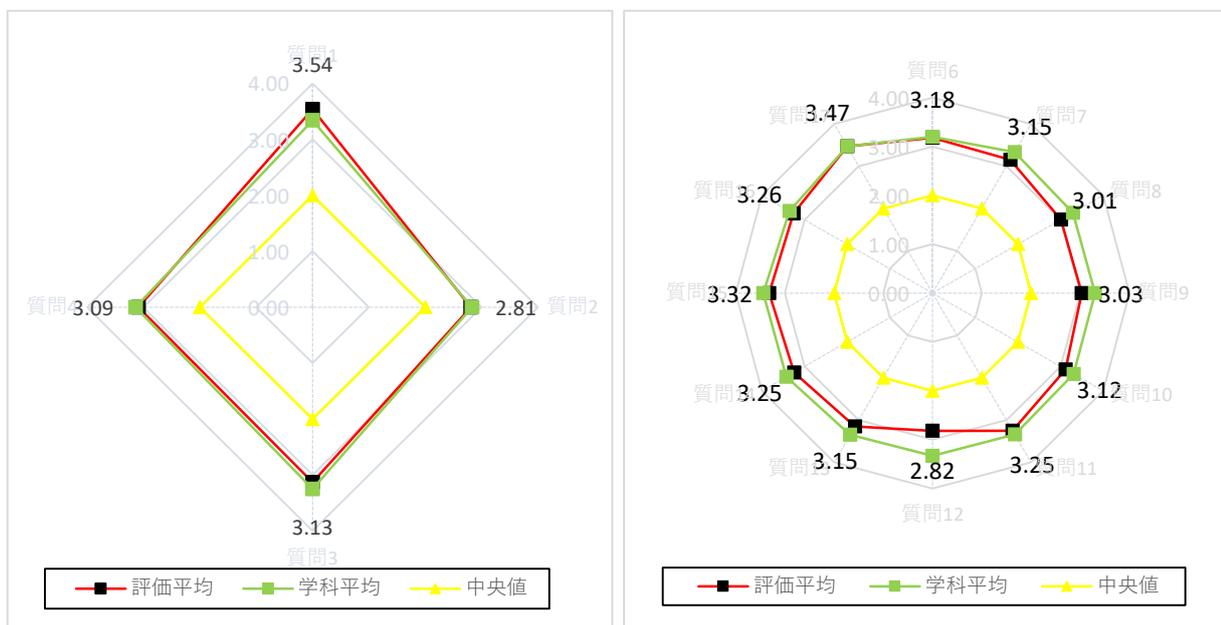
授業の内容や方法については、ほとんど全項目で、学科平均値と同一であった。大人数という不利な条件はあるものの、7人の教員がそれぞれ自分の担当分野について、熱心に、またコンパクトに講義を実施した結果であると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

子ども学部の基幹科目としての重要性を鑑み、学生の興味をそそるような、豊かな内容と思考力を高める授業のしかたを工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育基礎論	102名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の受講態度に関する自己評価では、本科目が1年前期に開講する科目であることも関係するのか、欠席数について学科平均を上回った。しかし、シラバスの活用、私語、自分の工夫については学科平均を若干下回った。

授業に関する項目は、概ね3.1から3.4の範囲であった。最も高かったのは「教員は熱心に授業に取り組んでいたか」の3.47、その他は、概ね学科平均に近かった。最も低かったのが「声の大きさや話す速さ」の2.9であり、スコアが3を下回った。授業に対する熱意は伝わったとしても、授業の内容がしっかり学生に伝わらないのでは意味がない。受講生が1年生であり、本科目の内容を初めて学習する者、大学の授業になれていない者が大半であること、マイクを使った授業であっても後部座席では聞き取りにくいことなど、対象や環境を考慮した授業が必要である。

□

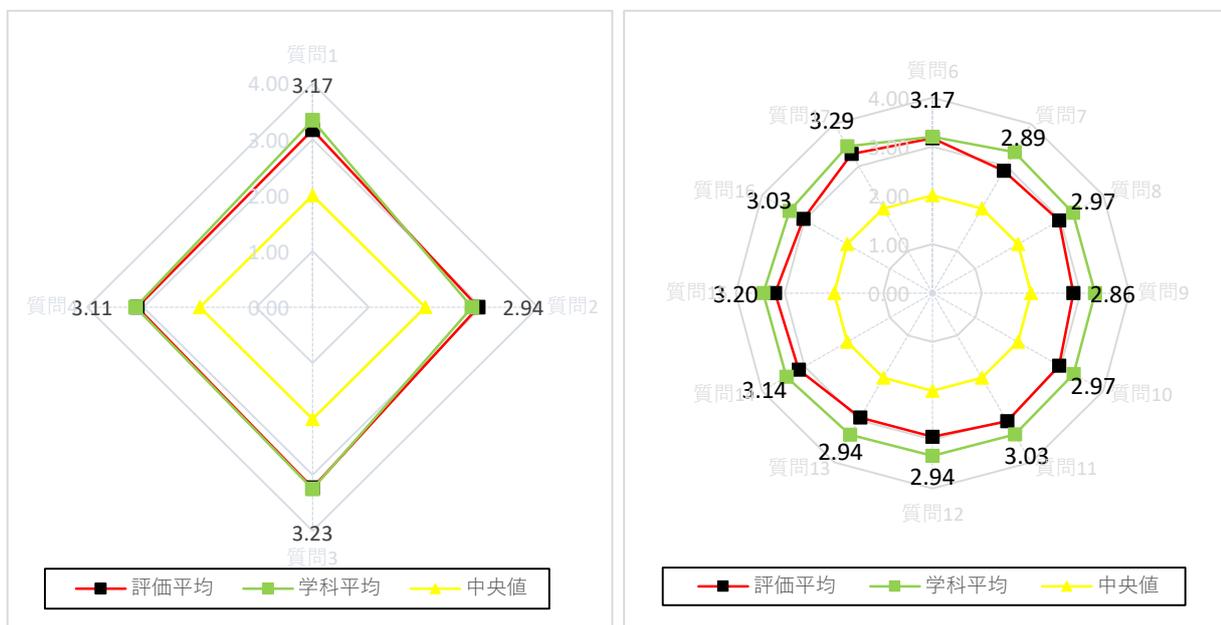
(3) 次年度に向けての取り組み

まずもってシラバスの説明をきちんとわかりやすく行うとともに、授業のテンポを緩め、ゆっくりと大きな声で講義をするように努めたい。

大教室での受講者が100人ちかい授業というハンディに考慮し、教室環境へのや学生の私語への対応を効果的に行う方法を探りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育原理	97名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

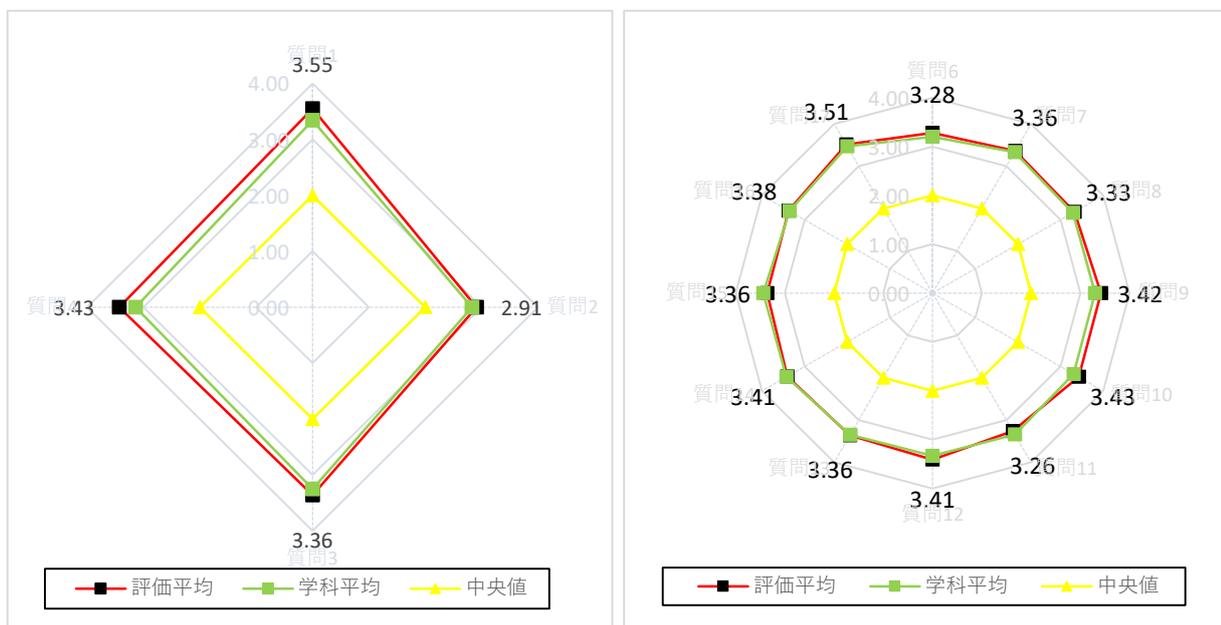
編入生、再履修生も含めて100名程の規模の授業としては、学生の参加度は非常に高いと考える。学生の積極的なかわりを考えて授業を進めた成果はある程度達成されていると考えるが、授業の方法としては、それぞれの観点において改善すべき事柄がある。教室が広く、学生の状況を十分つかめないきらいがあった。人数の多い授業の課題である。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の学生を主体として授業に参加させる方法を、もう少し改善してよいものとして高めていき、授業を学生の手に戻すように工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		発達心理学	102名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

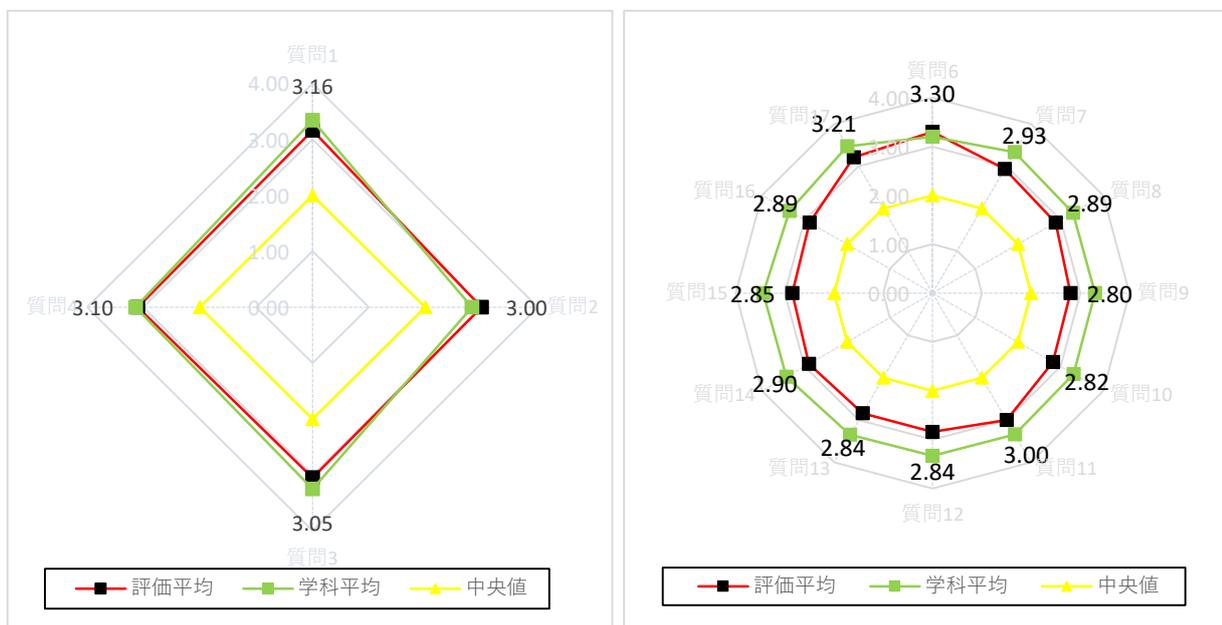
学生の自己評価の項目において、シラバスと総合評価が低かった。前者は授業者によるシラバスの説明が不足していたため、後者は授業内容と定期試験、小レポートの内容が受講者によっては難しかったことがこの結果につながったと思われる。授業に対する評価では、「シラバスの説明」「教科書・配布資料」「公平な対応」が子ども学科の平均評価に比し、微小だが低かった。特にシラバスの説明については、学生の自己評価と対応しており、厳に反省すべきである。シラバスの意義を授業者が再認識することから始めなければならない。反対に平均より高かった項目は「分かりやすい」「視聴覚教材・板書」「声の大きさ」等であった。特に分かりやすさについての評価の高さは、授業者が意識して実践したところであり、これが受講者である学生に評価されたことは、授業者の意図したことの実現であり、授業者が評価項目のどの部分を重視して実践するかが、受講者の評価に反映されるだけの実践が授業者に可能であることを自ら確かめた次第である。

(3) 次年度に向けての取り組み

やはりシラバスの説明の充実が最も反省すべきところである。授業者のこの傾向は授業評価が始まって以来終始変わらない。一度意識してシラバスを説明した時は、平均以上となった。すなわち、説明の実行がそのまま評価につながることは自明である。要は授業者がこの説明を自然に実行するかどうかにかかっている。そのためには、シラバス説明の意義を授業者がしっかりと認識できているかどうかである。授業全体、受講する「発達心理学」の体系を概ね理解し、これにより各授業の受講時に、受講者ができるだけ先を全体を見越し、前もってこれを想像しながら受講していくこと、また中盤ではこれまでをシラバスにより振り返ること、終了時にはこれまで学んだことの体系化をシラバスを頼りに実行すること、これらのことが受講者の学びを深める、確実なものとする、有効なこととすること、こうした自覚が授業者に納得されているかどうかにかかっている。今のところのその認識を深めているところである。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教師論	91名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

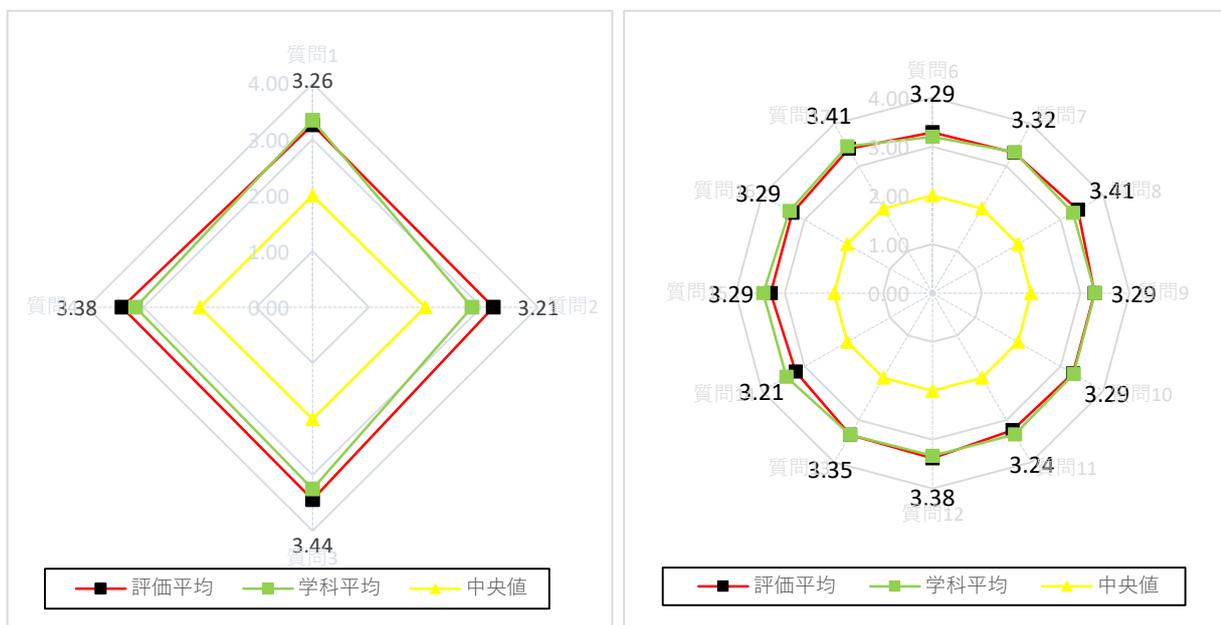
学生の授業参加の自己評価はほぼ満足した状態だと思われる。授業の方法や内容についての評価は、少々厳しく、満足度が低い。おそらく、この授業は、VTRを多く使って実践的に考える授業であったので、大学の授業方法の一般的な基準とは少々違っていいと言えよう。授業内容は、VTRを使っている分、内容のレベルが高かった。また、法規的な知識と解釈も多くあったので、理解しにくかったかと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度の学生を主体として授業に参加させる方法を、もう少し工夫してよいものとして高めていき、授業を学生の手に戻すように工夫したい。授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼児理解の理論と方法	98名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

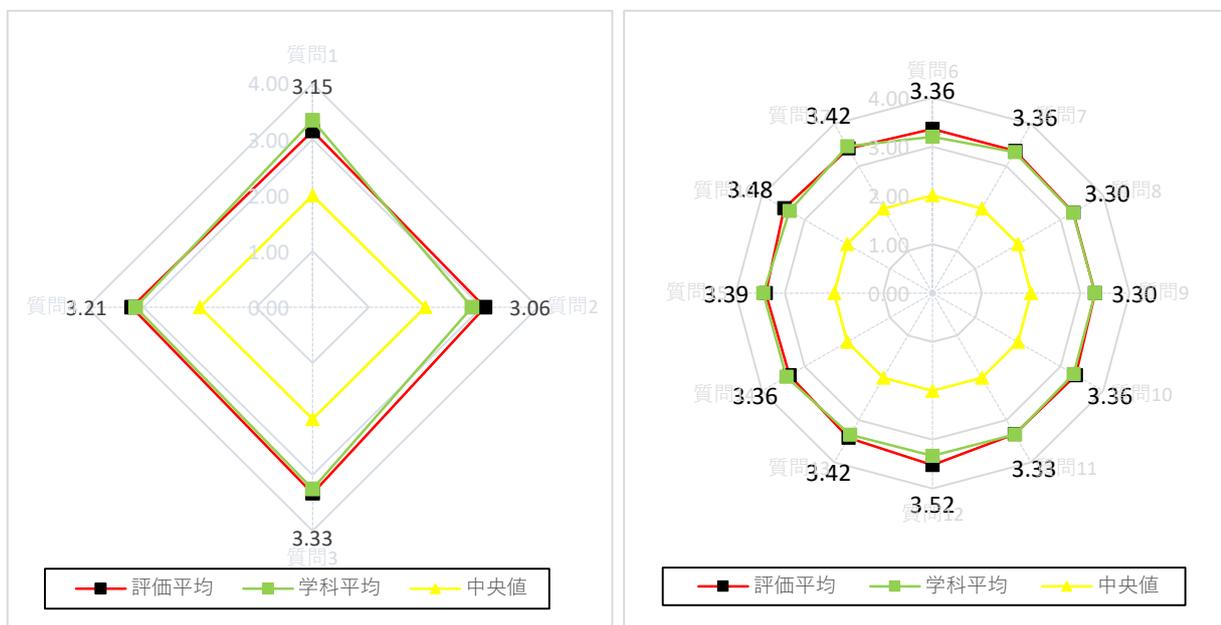
学生の自己評価ではシラバスの活用が、授業者のこれまでにない傾向で良好に高く評価されている。これは授業者が授業を始めるに際し、説明し、かつシラバスをよく読んでおくように指示したからに他ならない。しかし、自己評価の結果から想像される学生の姿、すなわち、シラバスを活用し、欠席が少なく、授業に真剣に取り組む、理解するために自分で工夫したにもかかわらず、「総合評価」が低い。これを問題にすべきである。これは授業内容が受講者にとり、難しかった、このことを反映したものとも思われる。授業評価を見ても、平均より低い事項を見ると、「到達目標の明示」「教科書・配布資料」「質問への対応」「公平な対応」「双方向的なやりとり」「熱心な取り組み」これらの低評価はこれまでの授業者にはあまり見られなかった傾向である。これは授業者の、授業展開時の余裕のなさを反映していると思われる。1単位8回の授業に関わらず、学ぶべきこと、学ばせたいことを詰め込み過ぎている、このことの反映と思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

この授業の特徴、すなわち1単位8回の授業であり、求められる内容は明確で、具体的内容が盛り込みやすいことが特徴である。そのため、授業者が与えられた授業時間数をしっかり自覚し、これに相当する内容の展開を強く意図しなかったことが反省される。また受講者が100名に近く、これに具体的な演習を含む考える機会を充てることから、授業者の指示、反応が行き渡りにくいものと思われる。こうした事態であることを改めて授業者が明確に認識することから始めなければならない。さらに個々の具体的事項、特に「双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか」について、授業中のレポート記載に対する授業者のコメントが十分なかったことを反省すべきである。授業中のレポート記載の様式を工夫し、より実り多い学びにつながるコメント記載を図ることを考えたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容総論	92名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

学生の授業評価については、すべての項目で一定以上の高い評価を得ている。自由記述の中にも、「学生の興味・関心もてる授業であった」との記述も見られる。特に、毎時間授業の中の少しの時間を使って保育現場ですぐに使える遊びなどを取り入れていることに対し、たくさんの学生から「勉強になる」「現場ですぐに使える」というコメントを得ている。座学であり、一方通行になる可能性があるため、できる限り双方向的な学習ができるよう工夫したことがこのような評価につながっているのではないだろうか。

また、本授業は1年次後期の授業である。次年度には初めての実習体験をすることを視野に入れて、学生が子どもの姿や保育所・幼稚園の1日の流れをイメージできるような授業が期待されていると考える。ただ、教科書を読んで説明する授業ではなく、一人ひとりの学生が自分自身の課題として捉え、体験的に学べるような環境が必要であろう。

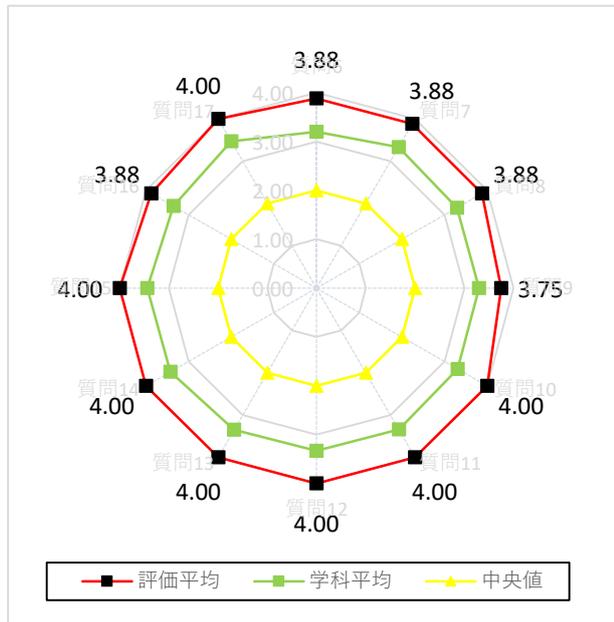
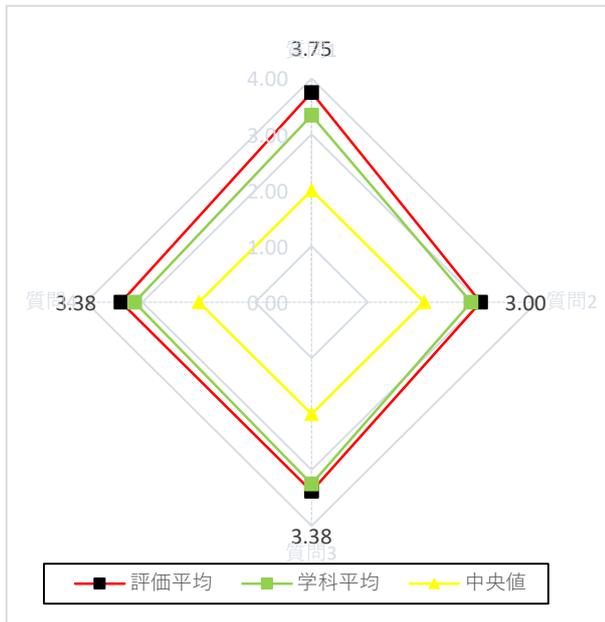
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度についても、基本的には今年度と同様の方法で授業を展開したいと考えている。平成30年度から、保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改定され、4月から施行されている。どのような点が改訂されたのか、学生たちがしっかりと理解し、説明し、保育現場で展開できるよう指導に努めなければならない。

さらには、学生自身が将来の実習や就職後の保育者としての自己の姿をイメージすることができるよう視聴覚教材等を適切に使用するなど、さらに具体的な方法を工夫して授業を行いたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（健康）	75名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

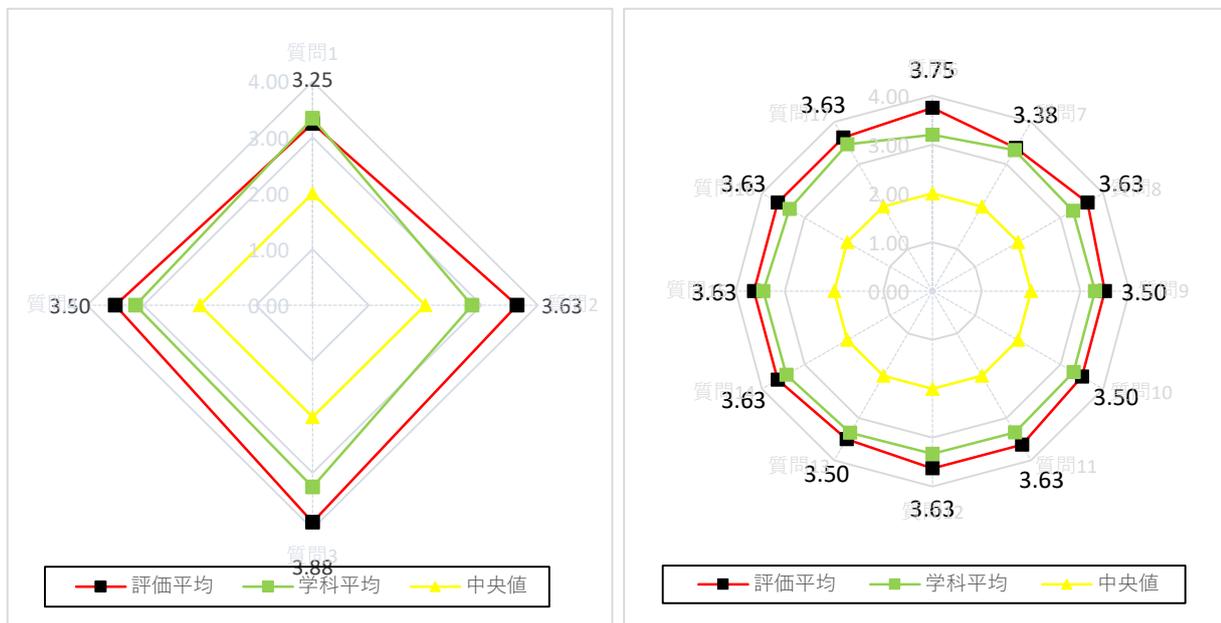
高評価である。

(3) 次年度に向けての取り組み

このまま継続して精進したい

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（人間関係）	81名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

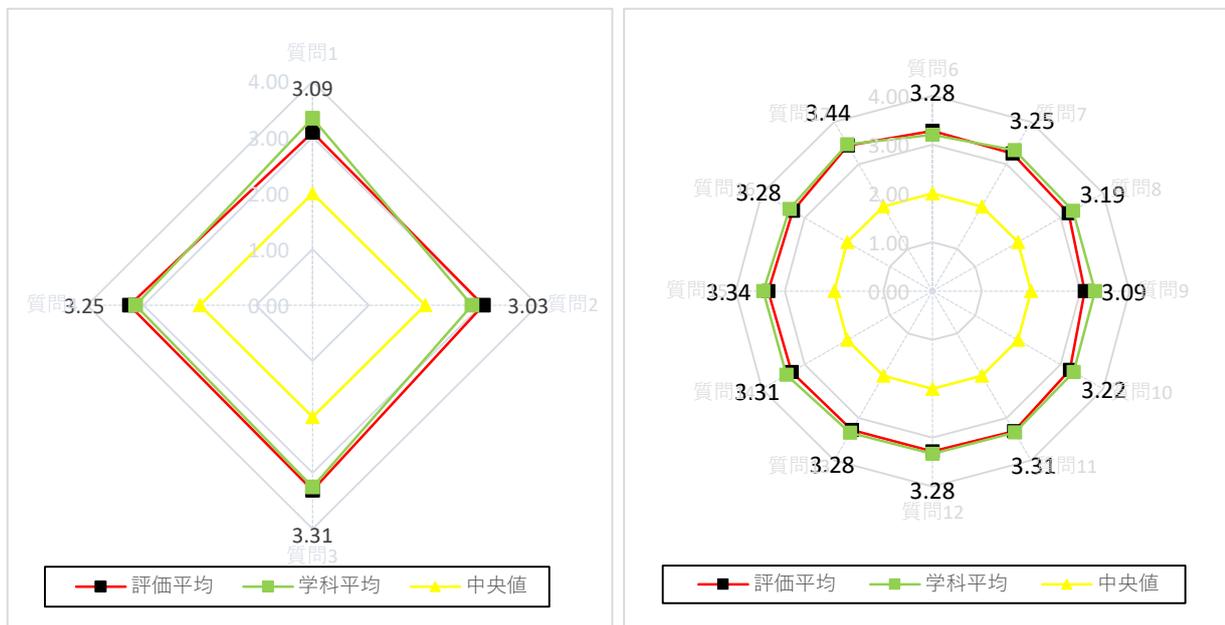
全体的に学科平均より高い項目が多かった。その中で質問2のシラバスの活用、6のシラバス説明、12の声の大きさ明瞭さという面で、評価がわずかに高かった。わずかな値だが、分析すると、幼稚園実習期間を挟んでの授業だったので、子どもの姿を交えての内容だったので共有でき、分かりやすかったのではないかと考える。授業方法としては、学生の授業参加を重視し、考えを発表する機会や、手遊びの発表経験を公平に入れていった。また、授業後に感想を書いたラベルを活用していたので、学生の反応は把握できたと思う。ビデオは、特に「人とかかわる力の発達と課題」「支える保育者の役割」という点で、とても良い教材だと思われる保育の実際のドキュメンタリーを編集したもので、見る視点と捉え方についての説明を丁寧にしていく必要を感じた。

(3) 次年度に向けての取り組み

低い評価項目は、欠席があったこと。体調を崩す学生がいた。内容的には、強いて言えば教科書・配布資料等の活用なので、もっと深める必要があるのだろうと考える。一回一回の授業の目的やねらいは持っているもので、伝わるように表現する事を念頭に置きたい。そのためにも、毎回の内容をどうとらえたか、今後とも授業感想のラベルをとりたい。出来るだけの確な発問と感想を求めるよう努力したいと考える。また、人間関係における実習体験を大事にし、子どもの内面をどう捉え、かかわっていくかディスカッションが出来ればと思っている。ディスカッションの深まりを実現するには、時間の確保が肝心であり、グループワークの話の進め方にも注意を払う必要がある。学生とコミュニケーションをとりながら、発言しやすい雰囲気を作っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（言葉）	97名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

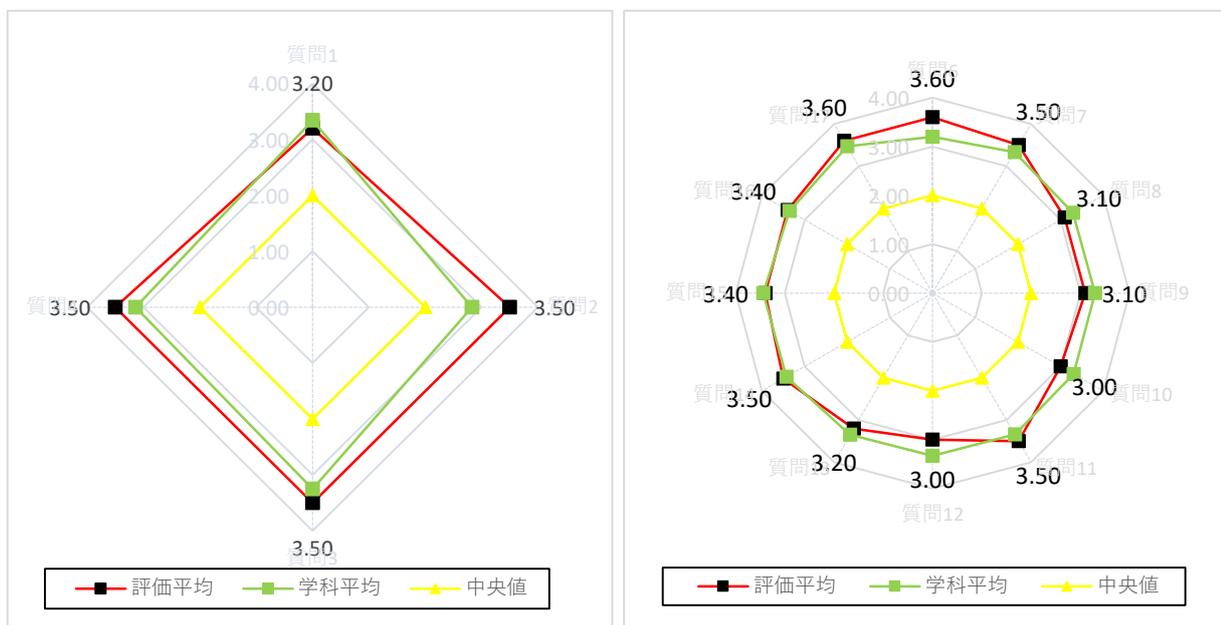
本科目は、乳幼児の発達段階に即して言葉の発達を見ていくという授業内容ゆえに、毎時間の積み重ねを重視してきた。欠席の学生のために、毎時間の冒頭で前時の復習を行ったり補説を行ったりしてきたが、前時（欠席時）と本時がつながらず、理解が難しい場合が多々あったようである。このことは、質問1と質問9との関連から裏付けられているように思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

本科目は、一年次後期の開講であり、「国語」や「文学と言語」と深い関わりがある。受講者に対しては、このことをしっかりと認識させるとともに、復習に力点を置いた学びを進めていくよう励ましていく。また、授業者としては、科目相互の関連を常に意識するとともに、受講者の理解度を常に確かめながら授業を展開していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育行政学	86名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

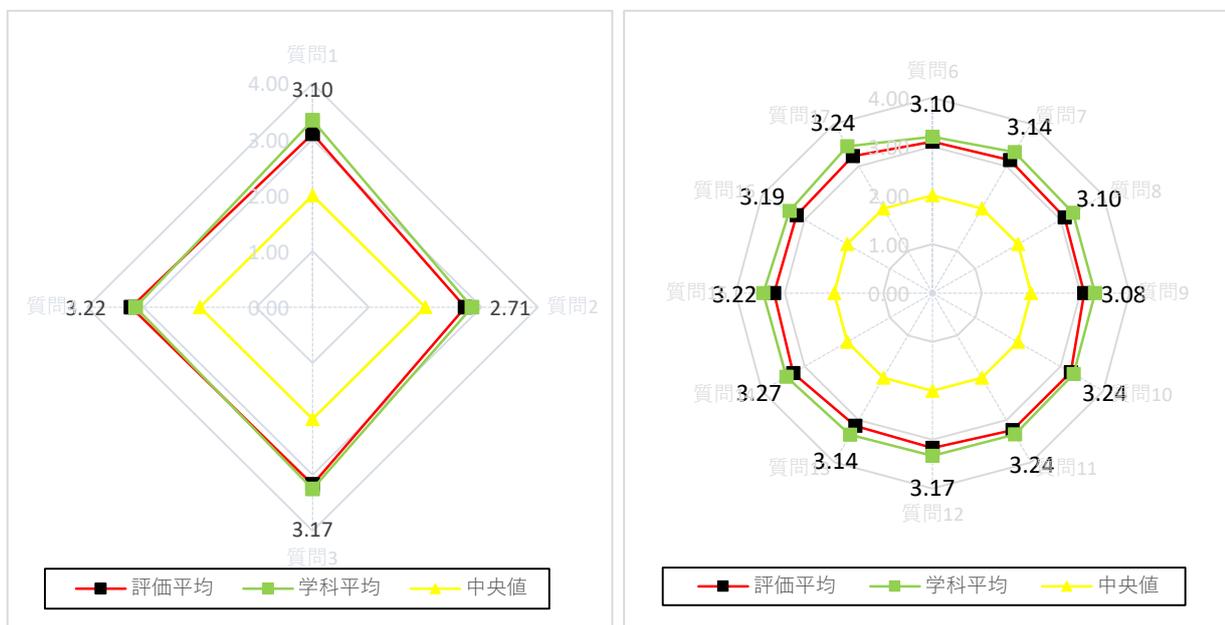
学生の授業参加度が高いことが喜ばしい結果である。授業方法には、多くの課題が残っていることは間違いない。途中で実習があり、授業が中断する。問題意識を継続して高めていくことが困難で、かなり苦勞した。この制約はやむを得ないものである。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保証することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		カリキュラム論	83名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

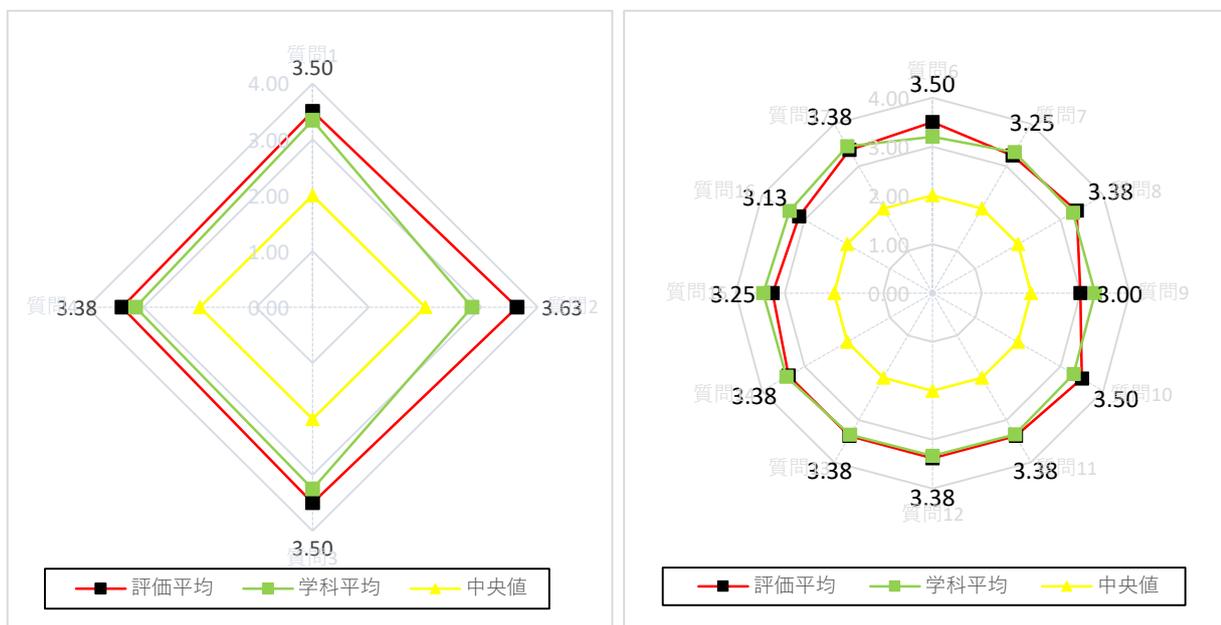
学生の授業参加の状態がよく、満足度が高いことがうかがえる。非常に喜ばしい。授業への参加度がよいので、授業のあり方もある程度の水準を確保できたようだ。しかし、授業評価のそれぞれの観点では、なお、課題が残っていることも明らかである。授業者は丁寧に対応し、公平に対応しているつもりでも、声掛けなど、その必要性を学生が皆同じように理解しているとは限らない。課題があること自体課題がないよりは、授業者にとっては、良い授業であった部分もあることを忘れないようにしたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生が一層授業に参加しているという実感を持ち、自分の課題を認識することが大事だと思う。したがって、授業の効果を高めるためには、学生の参加度をより促し、学生の負担感を高めず、授業の質を保證することのできるやり方、授業方法、授業で活用するツールを工夫していくことが必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育内容指導法（表現）	82名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

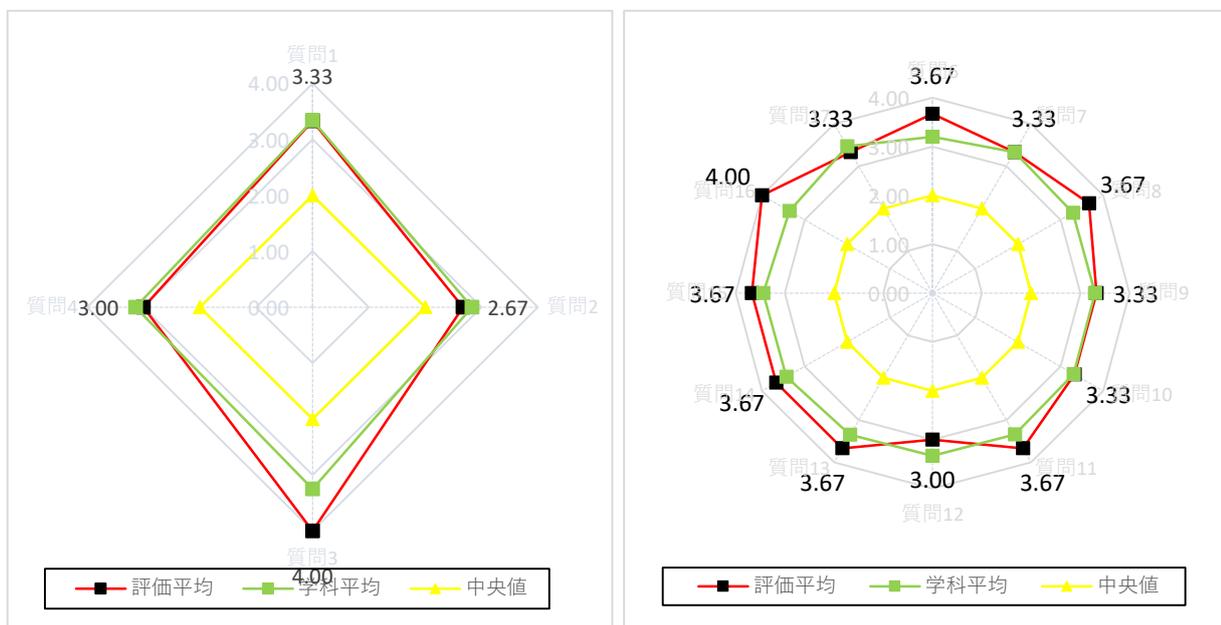
学生たちの受講態度は真面目で、グループ活動にも積極的に取り組む姿勢が見られた。造形や音楽等の作品づくりでは、学生相互が意見を出し合いながら、協同で一つの作品に仕上げていった。この過程では、保育者に求められる表現活動の実践力に関する気づきを得ていた。作品づくりは、結果的には充実感や達成感に繋がっていくが、なかなか思い通りには作業が進まないことが多い。そのため、時として分かり難さに繋がる場合がある。このことが質問9の評価に?があった可能性があると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

この授業では、学生たちに造形や音楽等の表現活動に取り組ませながら、保育者に求められる表現領域の実践力を習得させていく。次年度は、データの結果を踏まえ、学生自身が表現者としての自分自身と向き合いながら、保育者として子どもと係る際に必要となる様々な力量をテーマに省察する機会を充実させ、個々の事象に対して分かりやすい授業づくりに努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		進路指導の理論と方法	54名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

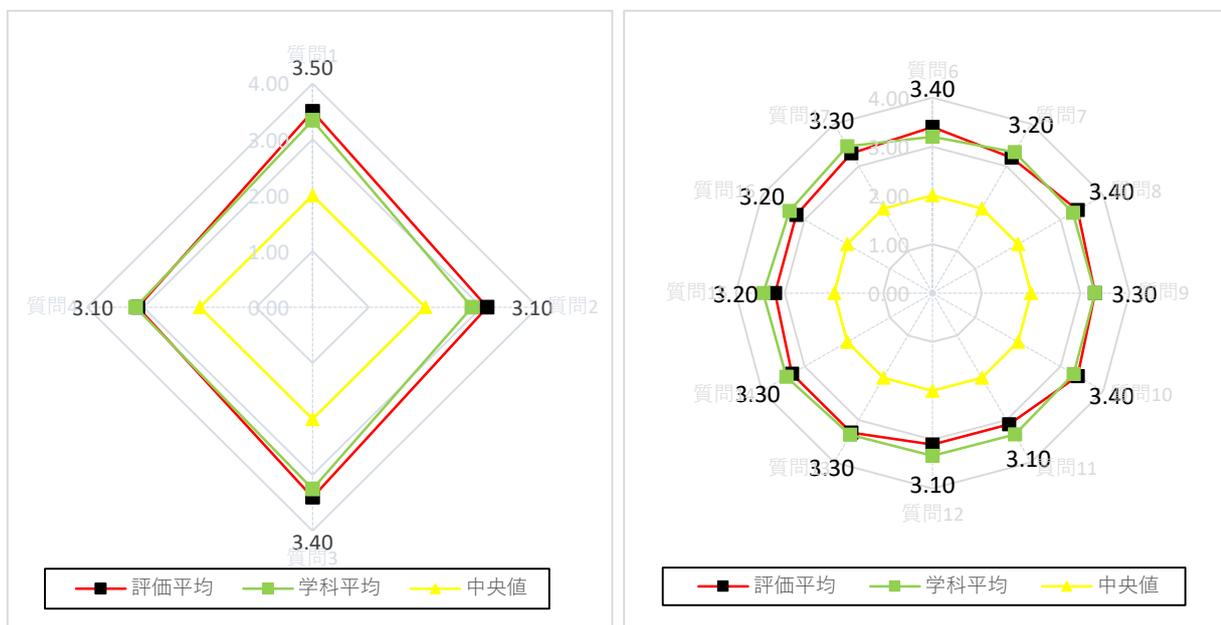
担当授業の評価結果が評価平均を示すとすれば、質問12を除いて学科平均と中央値を概ね上回っている。ただし、中央値が学科のそれを示すのか、学部や大学全体を示すのかが判然とせず、かつ無視できない開きがある点は気になる。

(3) 次年度に向けての取り組み

学科平均を下回った質問12を中心に、履修者の理解が深化するよう工夫する。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		教育相談の基礎と方法	88名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

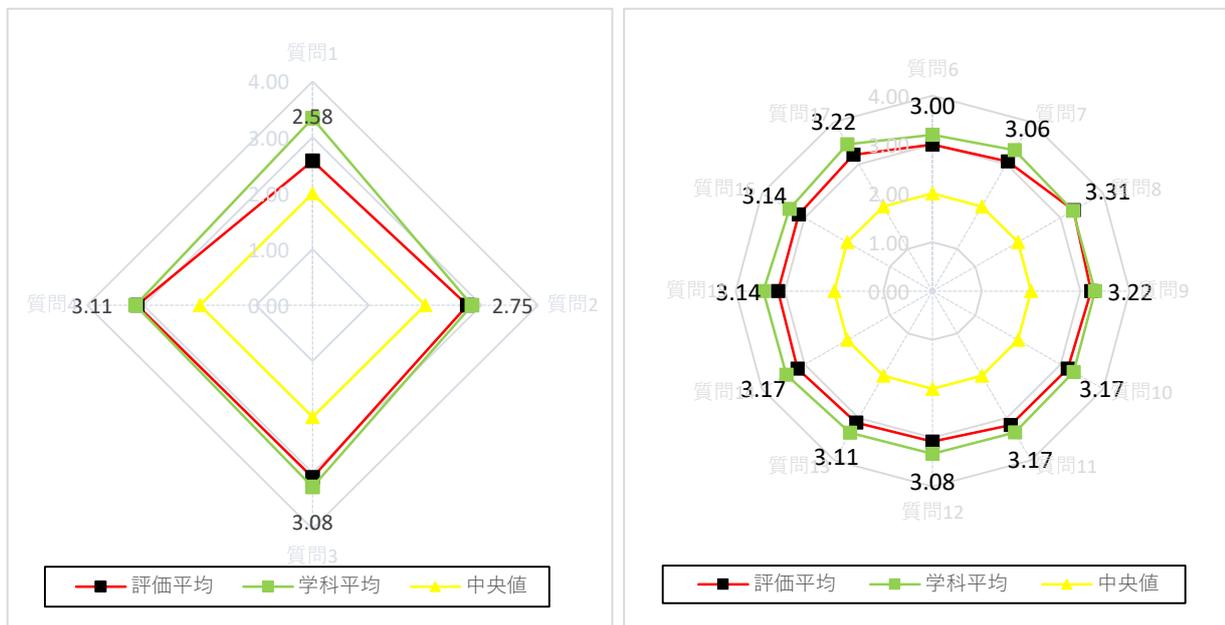
学生の自己評価についてである。「授業を理解するために自分で工夫した」の回答で「やや悪い」が10名中の2名、「悪い」が1名となっている。3割の受講者が何も工夫することなく授業に臨んでおり、このことは看過すべきものではない。「教育相談の基礎と方法」は小学校教諭、幼稚園教諭免許の必修科目となっている。想像するに、両免許共に取得する意思のない受講者がこの評価になったものと思われる。この科目の受講する意義を両免許の取得志向のない学生にどのように説くか、これを考えないといけない。子ども学科に入学したことを考えると、本来子どもに関心があるものと思われる。子どもに関することにつなげて受講者の学ぶ意欲を喚起することが求められるが容易ではないように思われる。授業評価で13項目のうち9項目で子ども学科の平均評価を下回った。これまで本科目に限らず、評価対象科目に於いて、このような低評価を受けたのは初めてである。大いに反省すべきであろうか。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価全体が低評価となった。中でも問12「声の大きさ・明瞭さ・話す速さは適切でしたか」に対して、「やや悪い」が2名、「悪い」が1名であった。これは全体の30%が否定的評価をしたということであり、反省しなければならない。授業者の授業に否定的感覚を持つ受講者に対して、授業内容が少しでも届くような話し方を工夫すべきである。すぐには思い浮かばないが、こうした評価があることを謙虚に受け止めて、今後授業に臨みたい。今回最も反省すべきは回答者が10名であったことである。学科全体、大学全体で回答率がどうであったか、つまびらかには知らない。それにしても88名の受講者の中で10名の回答は低すぎる。今後授業評価をしっかりと実行させたい。できれば授業時間の中で確保すべき方法を考えたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科指導法	64名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

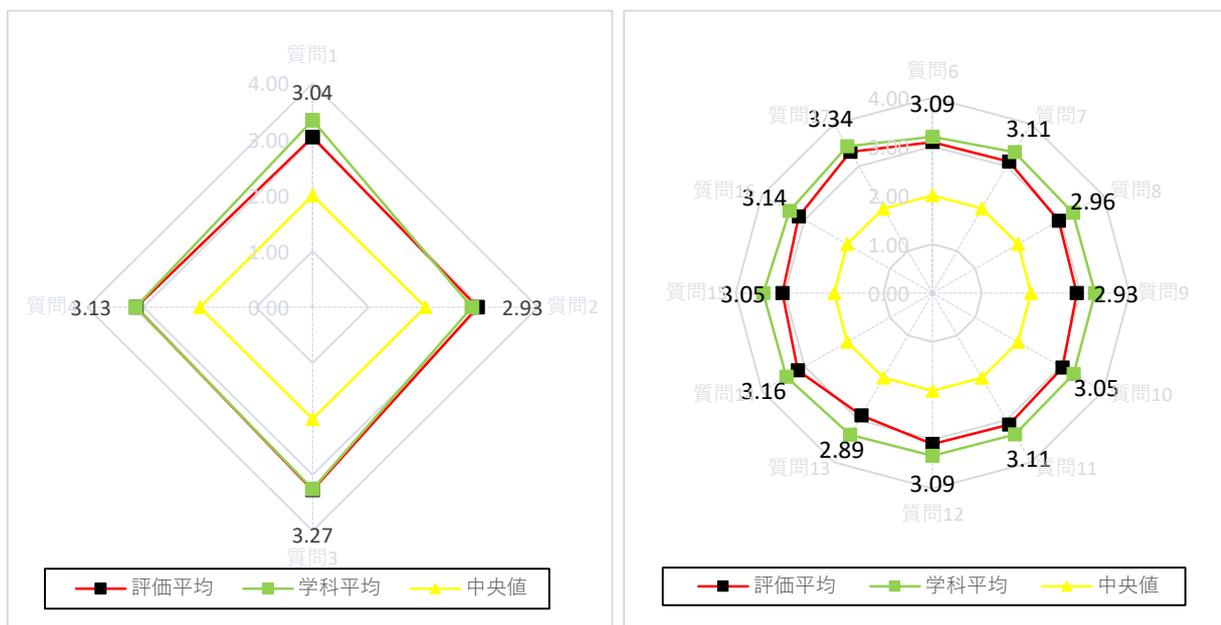
概して、学科平均と同様であるが、質問1「授業は何回欠席しましたか。」が平均より、かなり下回っているのは、1限目開講によるものと思われる。また、質問8「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。」が、唯一、学科平均を上回っている。この点については、特に力を注いでいる点であり、満足している。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、全ての項目で、今年度を上回れるよう、努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科指導法	81名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

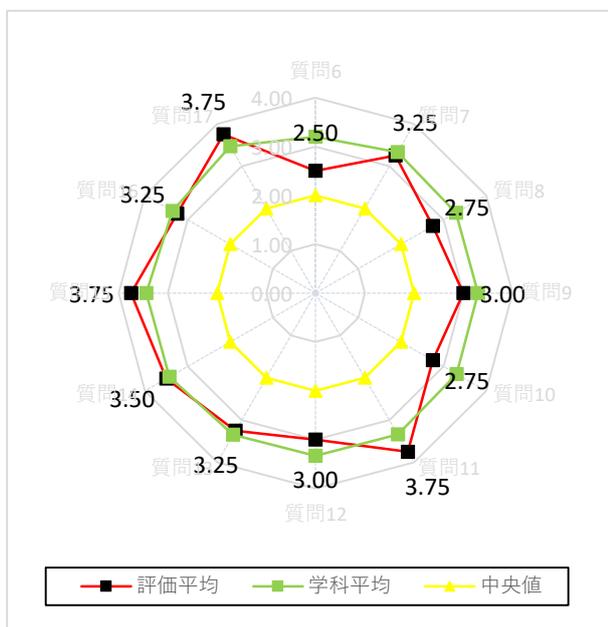
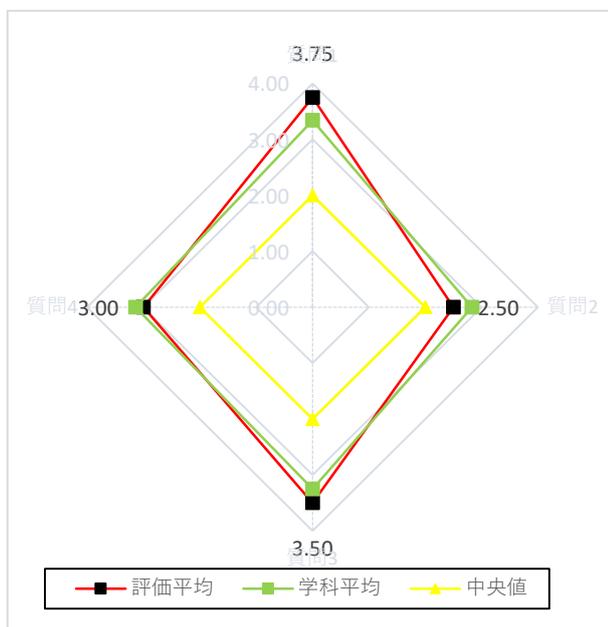
「授業づくりは、学習者の実態把握から始まる」ということを今改めて思い起こしている。赴任後の準備が不足したこともあり、本科目を受講する2年生が1年次にどのような学びを経験し、どのような疑問や課題を抱いているのかを的確に把握することができなかったように思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

「結果の分析と評価」で記した点をしっかりと踏まえながら、「ゆっくりと丁寧に教えていくこと」「教えることと考えさせることを明確にすること」「(学生の)毎時間の疑問を生かした授業展開を工夫すること」などに留意しながら授業に取り組んでいきたい。また、本科目の内容を「国語科演習」へとつなげていくことで、国語科指導法の深化・補充が図られると思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		理科指導法	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

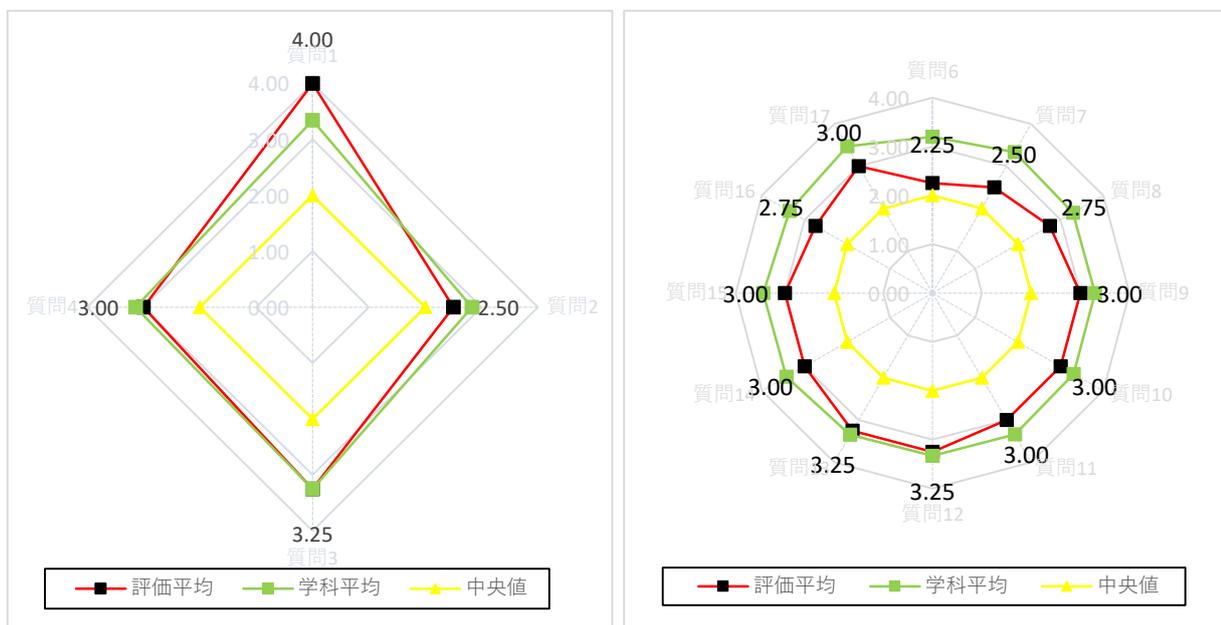
シラバスの説明に関して、理解不足な学生がみられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

理系科目が不得意な学生もいることから、身近な生活における題材を取り上げることを行っている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活科指導法	55名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

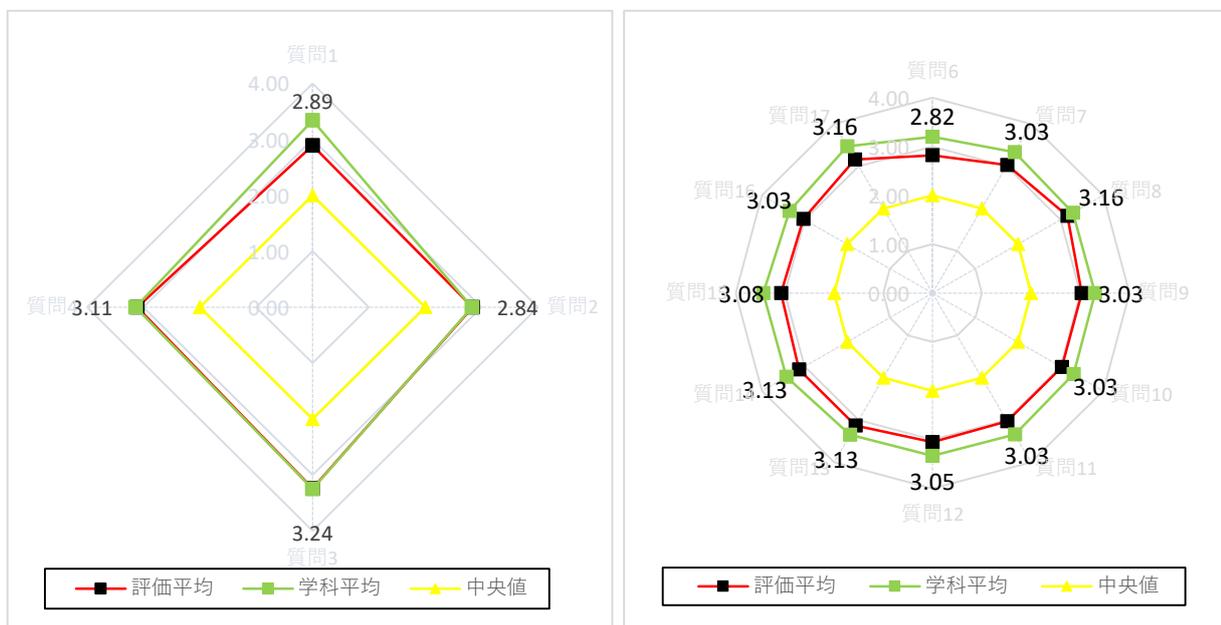
オムニバスで2名で担当しており、授業評価が個々の教員の授業に還元されていないため、分析も困難な面がある。この点を割り引いても、質問1「授業は何回欠席しましたか。」が、極めて高い(出席率がよい)点は、高く評価できる。担当者が2名ゆえ、それぞれの授業の欠席が大きく成績に影響していると思われるが、学生が熱心に授業に参加していることが見てとれる。逆に、質問6「シラバス(授業計画)について説明がありましたか。」が、極端に低い。第一回目の講義時に「シラバス表」を配布し、説明しているのであるが、やはりオムニバスで2名で担当していることが影響し、内容を忘れてしまうのであろうか。

(3) 次年度に向けての取り組み

本年度、特に低かった質問6「シラバス(授業計画)について説明がありましたか。」を中心に改善を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		図画工作科指導法	62名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

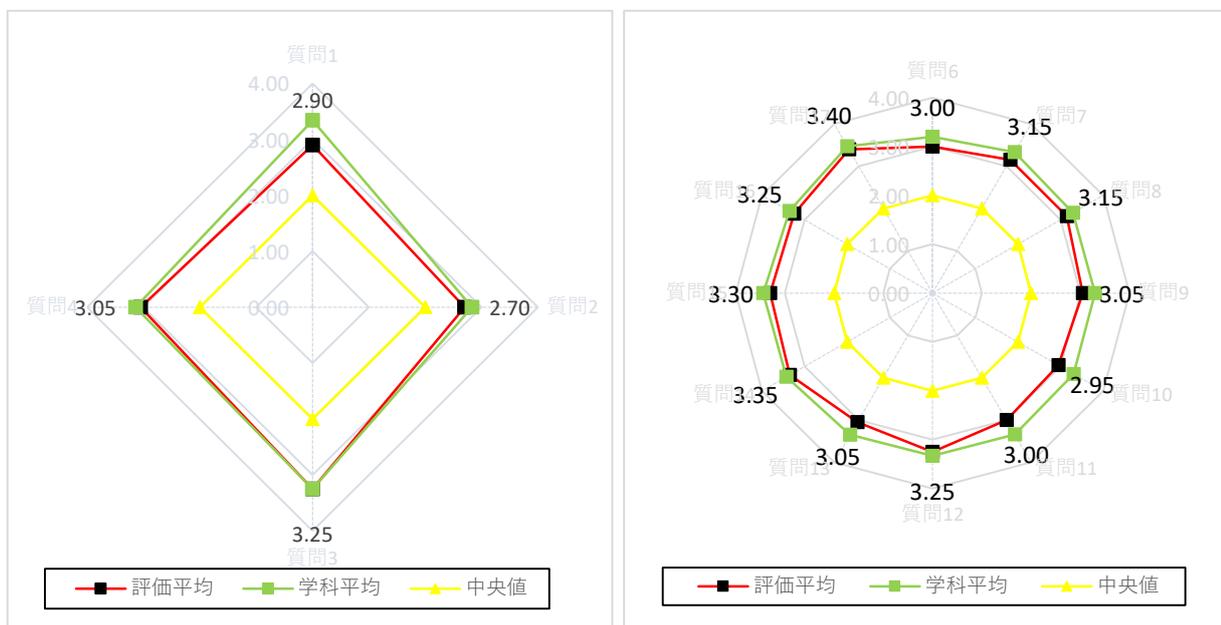
多少のシラバスとの相違が生じてしまった。おおむねの評価は得られたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度からは、一層の内容の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽科指導法	105名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

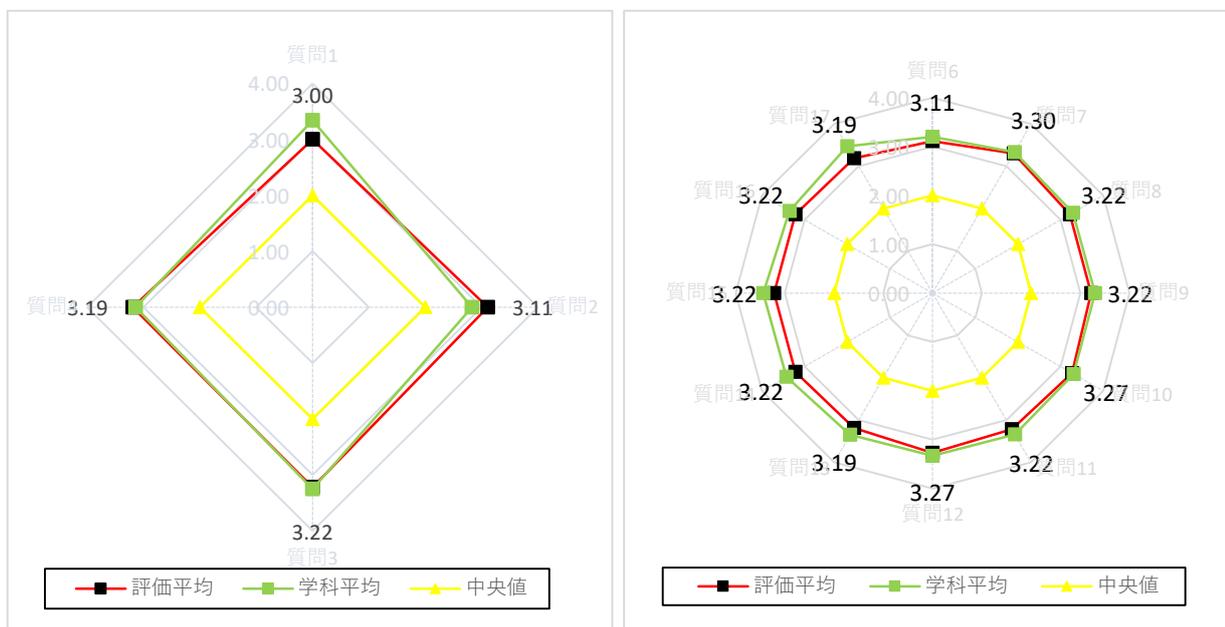
入学前の音楽経験に関しては、個々の学生によって大きな開きがある。読譜、歌唱やピアノ伴奏等への戸惑いから、音楽に対する苦手意識を持っている学生も少なくない。しかし、各地区の教員採用試験では、必ずピアノ伴奏をしながら共通教材を歌唱する試験が課せられている。そこで、この授業では、採用試験を想定した課題にも取り組ませた。質問項目13の授業の進む速度に関する評価は、やや低い結果であった。15回のうちに、主要な内容を取り扱わなければならない為、苦手意識を持っている学生にとっては、授業の進度が少し早く感じられたかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

小学校音楽科の授業では実践力育成を目指しており、そのためには理論的な内容に加え、実技の向上を図るための指導を図る必要がある。苦手意識の払拭は容易ではないが、次年度はこのような学生への指導の在り方を再考し、実践力育史柄に向けた指導の強化を図っていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育科指導法	63名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

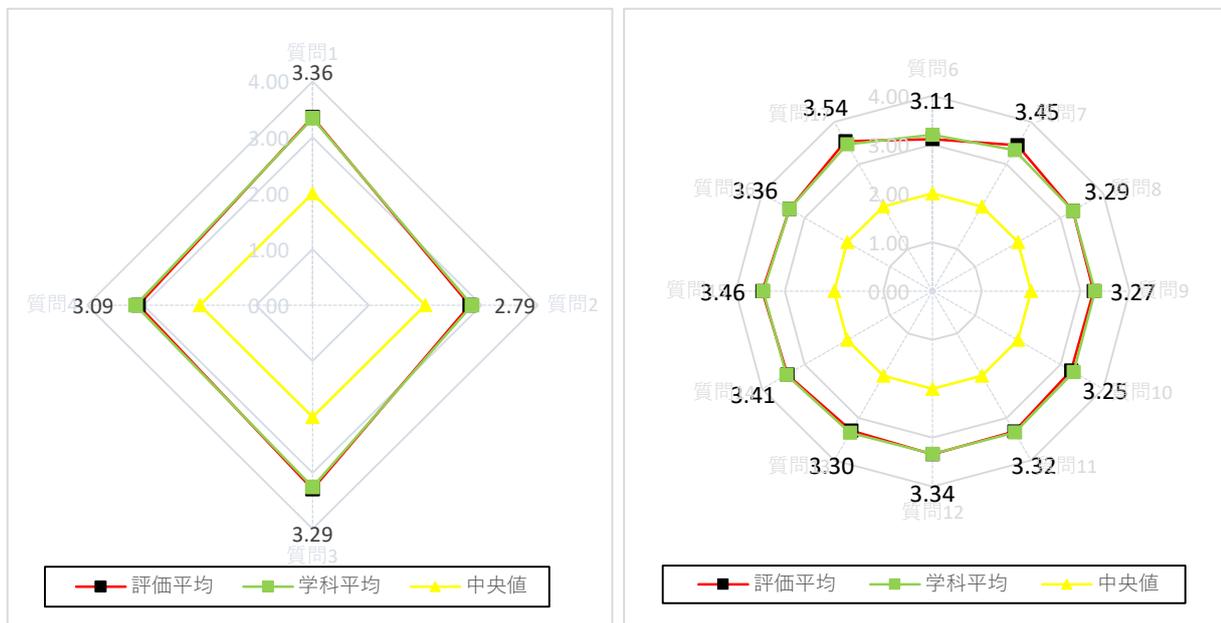
3点台を下回っている質問項目はないが学科平均より低い項目がいくつかあることは低評価と考えざるを得ない。特に17の質問項目に関しては反省し改善すべき事項であると言える。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生に熱意が伝わるように資料の準備や言葉がけを増やしていく

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育・教職実践演習 (幼・小)	99名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

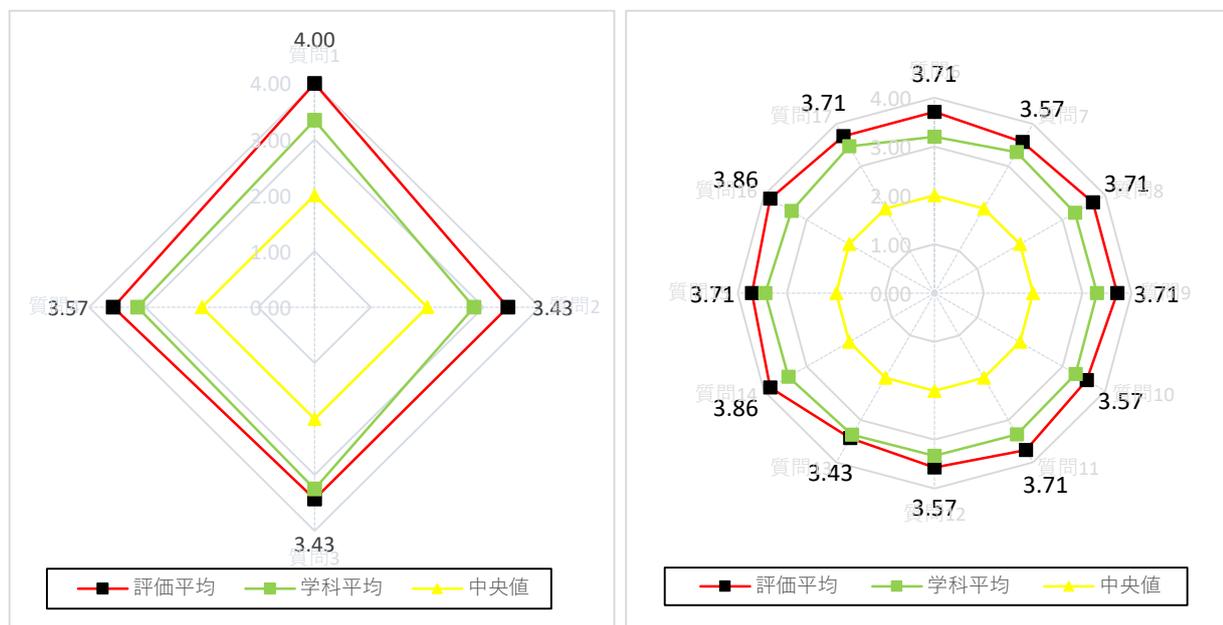
本科目は、四年生最後の必修科目であり、資格・免許取得に向けた教職課程・実習等の集大成として位置付けられている。授業者は四人、オムニバス形式で担当し、授業は、保育・幼稚園指導、児童生徒理解・指導、教科指導、学級経営等の内容で行っている。評価はほぼ学科平均と同じであるが、より高みを目指すには、履修カルテの有効活用が大切であると考えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

大学入学時から、履修カルテによるタイムリーな振り返りができていないのではないかと考えている。学生のタイムリーな振り返りから本授業に対する要望等を読み取り、授業に取り入れることが重要であると考えている。また、そうすることで履修カルテの有効活用につながっていくと考える。以上のことから、履修カルテによるタイムリーな振り返りとそれを踏まえての授業構築に取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		相談援助	73名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

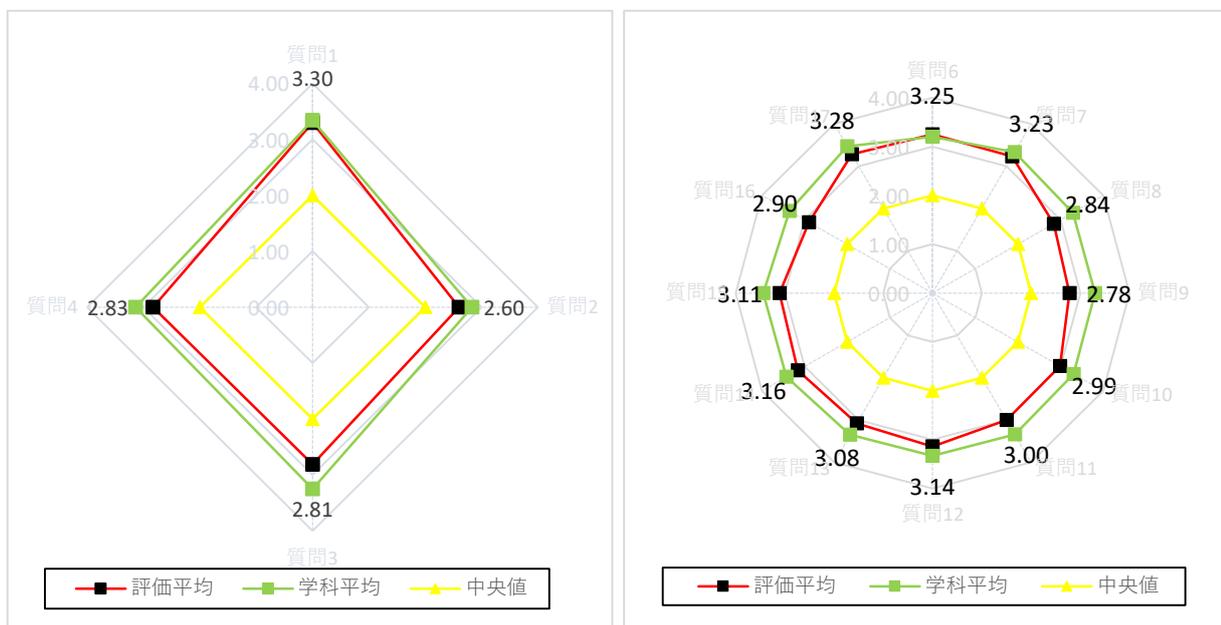
授業アンケートの結果と分析としては、質問6「シラバス（授業計画）について説明がありましたか。」、質問8「授業は興味・関心が持てる工夫がされていましたか。」、質問9「授業は分かりやすくする工夫がされていましたか。」、質問14「学生の質問等に誠実に対応しましたか。」、質問15「公平に学生に対応しましたか。」、質問16「教員は双方向的なやり取りをしながら、授業を行っていましたか。」については全体平均と比べ高い評価を得ており、授業における学生への問いかけなどが効果的にはたらいっていると考えられる。一方、質問3「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」、質問13「授業の進む速さは適切でしたか。」については、全体平均と比べて低い評価となっており、学生の学習進度に合わせた授業展開など改善への取り組みが必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度に向けての取り組みとしては、まずはテキストの内容と照らし合わせながら授業の展開方法について見直し、主体的な学習へと移行できるような工夫を行う。また、時事的な議題などを多く取り上げ、学域に関する学生の関心を高めるような取り組みを行う。さらに、事前学習の明確な設定と、事後学習への取り組みについても検討し、循環型の教育システムへと移行していく。さらに、学習教材の見直しも行い、学習の動機づけにつながるような教材と、今後の学びに活用される教材とに区分し、それぞれを使い分けていけるように整理していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会福祉	92名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業では、社会福祉とは何か、現代社会においてなぜ社会福祉が必要とされているのかということについて、社会福祉の特徴、意義について整理し解説するとともに今後、一層の変動が予想される社会に対応することができるような、これからの社会福祉のあり方について紹介した。

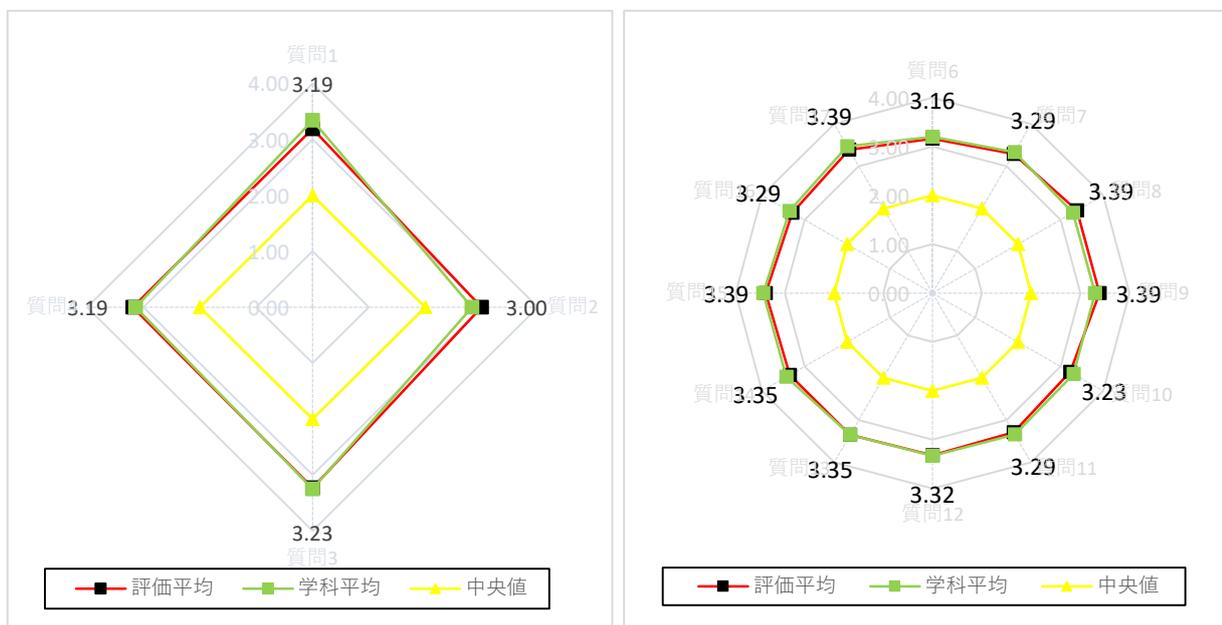
1年前期の授業であり、学生に社会福祉に興味を持たせるために、新聞やニュースなどから話題の提供や視聴覚教材の適宜使用等を行い授業を実施したが、双方向的なやり取りや学生が興味を示すための工夫については改善を必要とした。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、学生に社会福祉に対する興味を持たせるために、新聞やニュースなどからの話題提供や、視聴覚教材の使用を工夫して授業を実施したい。また、学生がノートをまとめやすい様に、適宜、資料等を配布し、予習、復習がしやすいような工夫をしたい。双方向的なやり取りをしながら学生に発言を促し、学生が主体的に参加できる授業を実施したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会的養護	86名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率を見ると、85名中31名の回答で36.4%であることが大きな問題である。

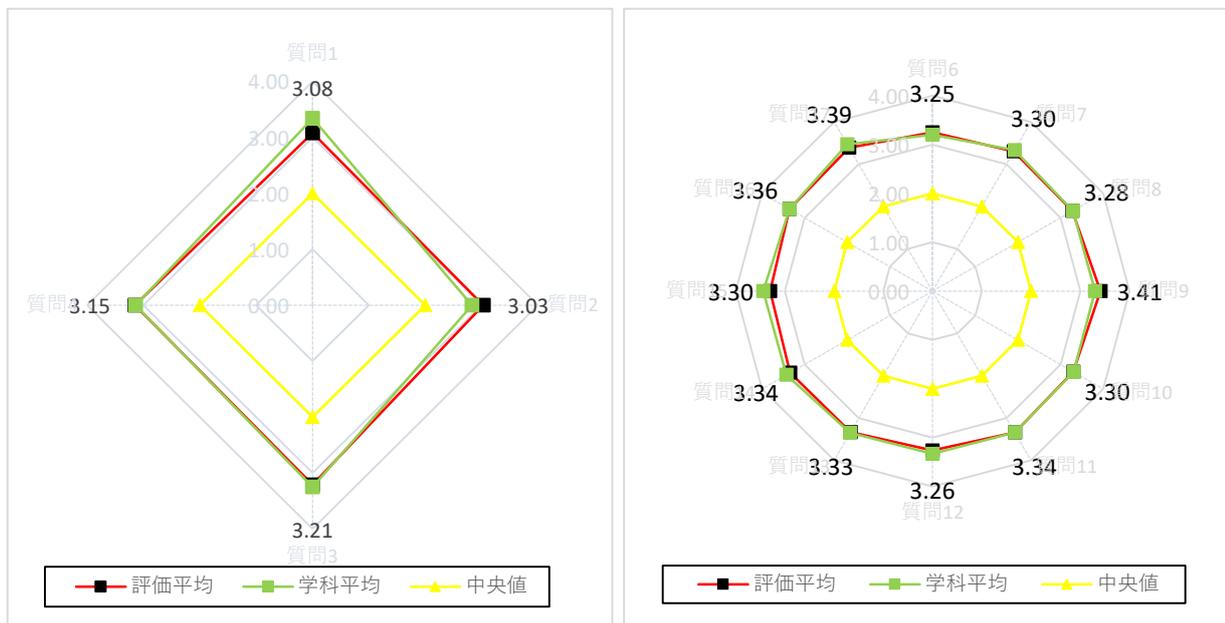
その上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.29、②授業の総合評価は3.29であり、回答学生の大半は充実した学びとなったことが窺える。自由記述にも進捗より、分かりやすい、資料もよしとの高評価があった。項目で見ると、Q2シラバスの活用（学生自身の）、Q4学生自身の工夫、Q6シラバスの説明が3.00～3.16でやや低かった。また、上位項目としてQ8興味関心を持つ工夫、Q9分かりやすい工夫、Q13進む速さ、Q14質問等への誠実な対応、Q15公平な対応、Q17熱心な取り組みが3.35～3.39で高評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

本授業に対する学生自身と取り組みと授業内容・方法の工夫、教員の対応、熱意について概ね高評であったが、学生自身のシラバスの活用に関して教員による説明を授業初回にのみ行っている現状を改善し、説明回数を増やしながら、その中で事前事後学習に向けた取組を強化していきたい。さらに、授業終了後に行う授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として80%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども 心理カウンセリング		家庭支援論	98名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率をみると、97名中61名の回答で62.8%であった。回答率6割は決して高いとは言えない。

- その上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.07、②授業の総合評価は3.33であり、回答学生の大半は概ね充実した学びとなったことが窺える。

学生自身の授業参加度をみると、シラバスの活用や予習復習が不足気味であったことが窺え、授業内容・方法は分かりやすい工夫、興味関心のある情報や資料の提供ができていたことが窺える。

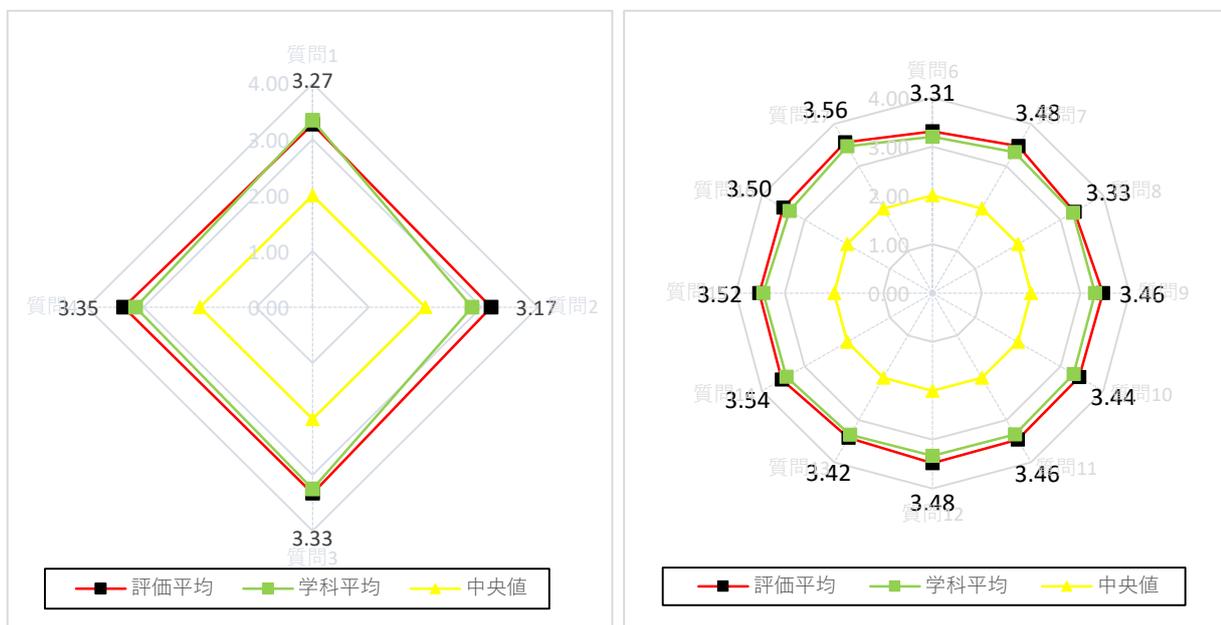
自由記述にあった意見として、心理カウンセリング学科の受講生より、子ども学科の学生主体と思われる説明や発言があったことで区別されていることに違和感を感じたとの記述が確認できた。公平な対応という点で、授業内容の表現、発言についてあらためて検討すべきと痛感した。

(3) 次年度に向けての取り組み

本授業に対する学生自身と取り組みと授業内容・方法の工夫、教員の対応、熱意について概ね高評であったが、学生自身のシラバスの活用に関して教員による説明を授業初回にのみ行っている現状を改善し、説明回数を増やしながら、その中で事前事後学習に向けた取組を強化していきたい。さらに、授業終了後に行う授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として80%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		乳児保育	72名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本授業は、保育現場の保育士と共にオムニバスで進める授業である。学生の授業評価については、すべての項目について一定以上の高い評価を得ている。

概論的な内容は櫻井が行い、具体的な園での子どもの姿や保育者の役割、遊びの実際等については保育士が行うというように分担をしている。

学生については、ほとんどが家庭や地域において幼い子どもと接する機会がない状態で入学しているため、市販の視聴覚教材や実際に保育所で撮影された映像をもとに進めているが、学生がよりイメージしやすい内容となり、そのことが高い評価の理由であると考えられる。

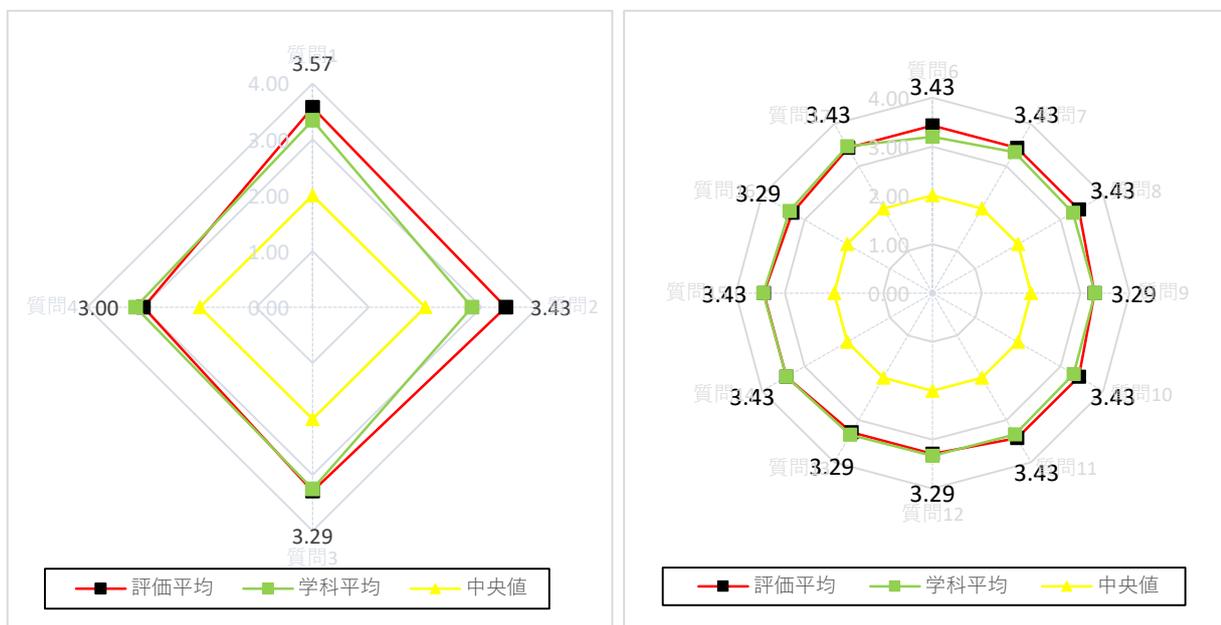
(3) 次年度に向けての取り組み

平成30年度より、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、幼稚園教育要領が改訂され、4月1日より施行されている。その中で、新たに「乳児保育」に関するねらい及び内容が強調され示されている。保育現場においても、なお一層「乳児保育」が重視され展開されるであろう。

この授業は今後行われる保育実習の際、保育現場において非常に役に立つ授業であるため、可能な限り現場を想定した授業ができるよう工夫し行う必要がある。そのためには、オムニバスを進める中で、それぞれの立場でやるべきことを確認し、これまで以上にお互いの教員が連携し、効果的な授業が構成できるよう努力していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育相談支援	74名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率をみると、74名中7名の回答で9.4%であることが大問題である。

分析評価に値しない数値であることをふまえた上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.00、②授業の総合評価は3.29であり、回答学生は充実した学びとなったことが窺える。

項目毎の大差はないが、自身の学びとして授業理解にむけた工夫は3.00でやや低評価、授業内容・方法及び教員の対応については、分かりやすい工夫や進む速さ、双方向のやり取りが3.29でやや低評価ではあったことから、学生が行う学習の手立てを検討すること、双方向のやりとりも取り入れつつ、分かりやすくかつ進度の調整などに取り組む必要があると考える。

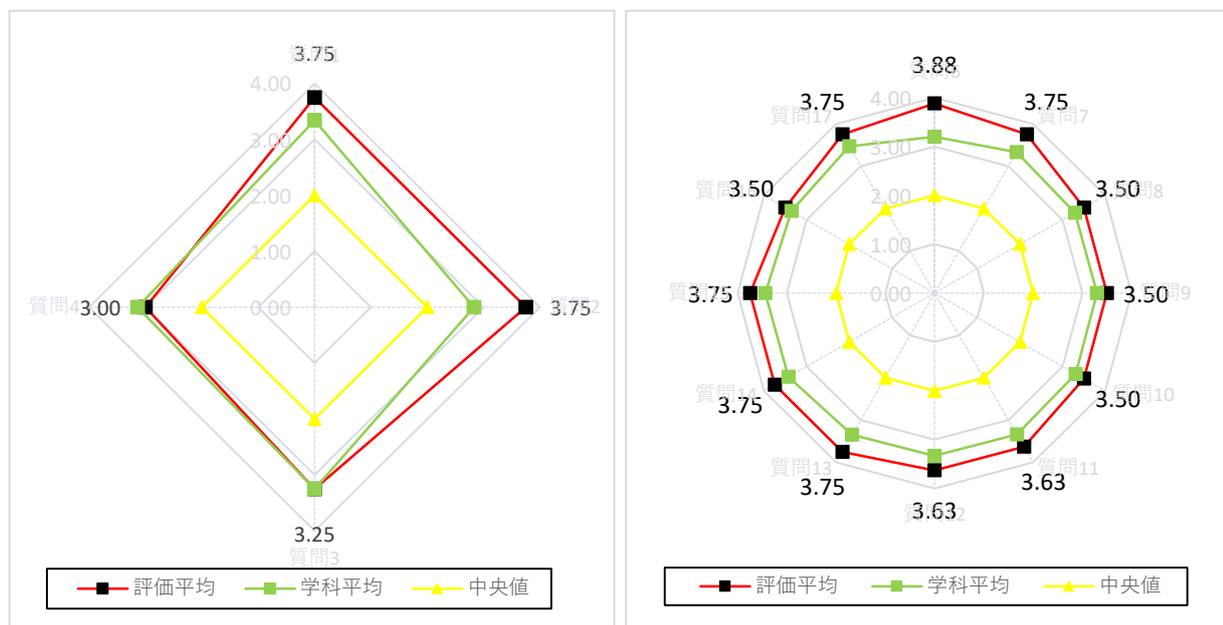
(3) 次年度に向けての取り組み

まず回答率の向上を図ることが必要である。次年度は回答率80%を目指す。

授業終了時に行う授業評価の意味、意義をより丁寧に伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児保育	78名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答した受講生は78名中8名で、回答率が10.2%であることが、まず大きな問題である。

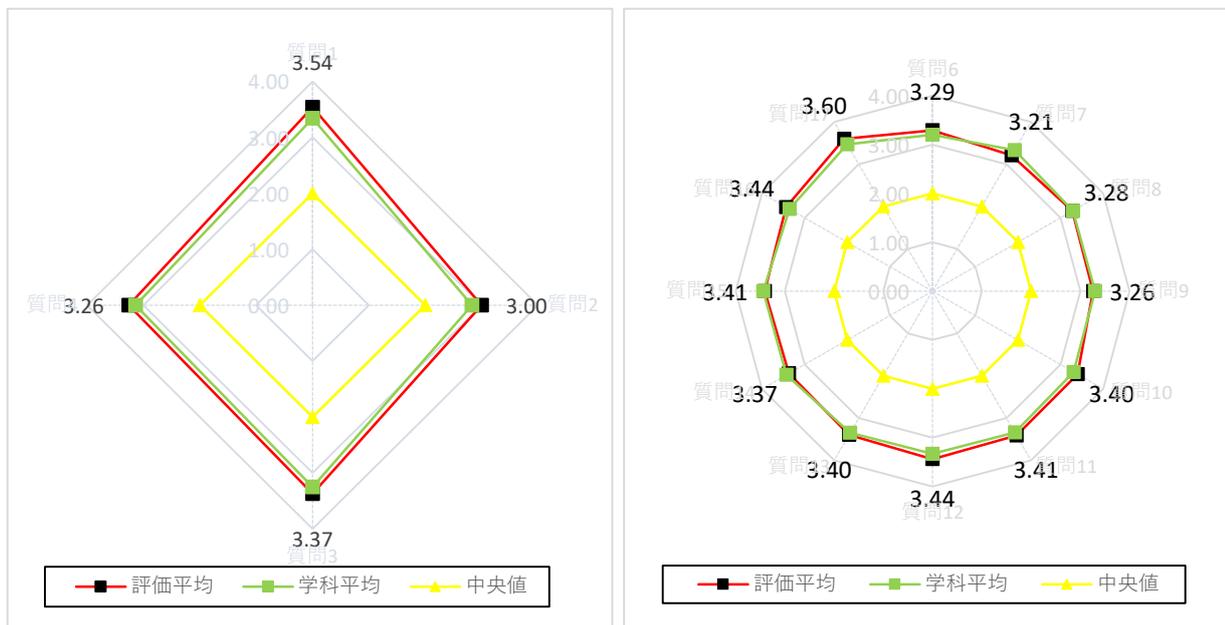
本結果は受講生の1割の回答ではあるが分析すると、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.38、②授業の総合評価は3.63であり、学科平均値を上回り、回答学生の大半は充実した学びとなったことが窺える。自由記述にも話すスピードよし、分かりやすいVTRを使用している、資料もよしとの高評価があった。項目でみると、Q4学生自身の工夫が3.00でやや低かった。また、上位項目としてQ2シラバスの活用、Q6シラバスの説明、Q7明確な目標と授業展開、Q13進む速さ、Q14質問等への誠実な対応、Q15公平な対応、Q17熱心な取り組みが3.88~3.75で高評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

本授業に対する学生自身と取り組みと授業内容・方法の工夫、教員の対応、熱意等について高評であったが、学生自身のシラバスの活用に関して教員による説明等について、昨年度までと比較すると、高評価となっており、説明回数を増やしたことが要因であったと考える。次年度においても、シラバスを大いに活用し授業を展開していきたい。さらに、授業終了時に行う授業評価の意味、意義も十二分に伝え、学生の学びのモチベーションを一層高めていきたい。回答率の目標として80%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語	102名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

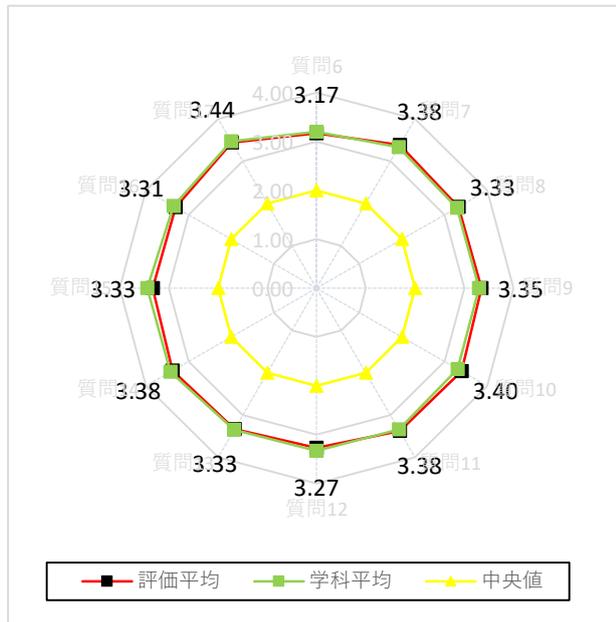
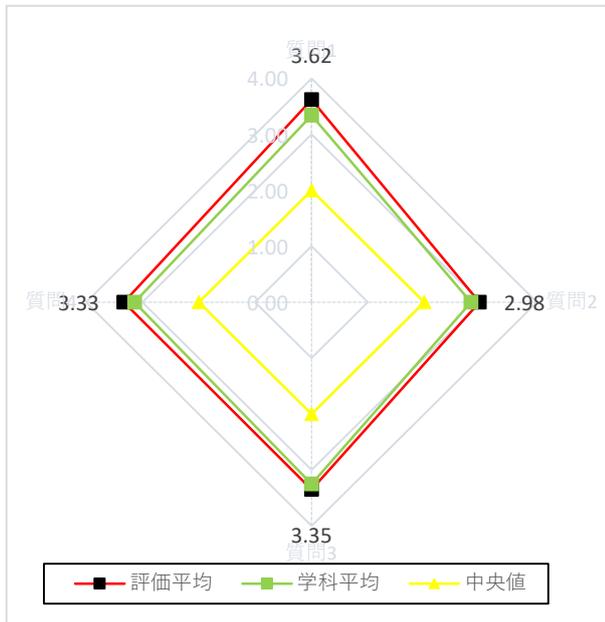
子どもの教育・養育に関わるに当たって基盤となる「国語力」の獲得を目指し、計画的に授業を進めることができた。特に、学生の実態を踏まえ、日本語に係る「基礎知識の習得」及び、国語に関する「興味・関心を高めること」に重点を置いた。

(3) 次年度に向けての取り組み

「学生の実態を踏まえて、どのような国語力を付けていけばいいのか」という本質を踏まえつつ、一人一人に自分の言語生活を日々振り返ることができるような態度を育てていきたい。そのためには、授業中、自分で考える時間や、学んだことを整理（復習）する時間を十分確保していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会	86名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

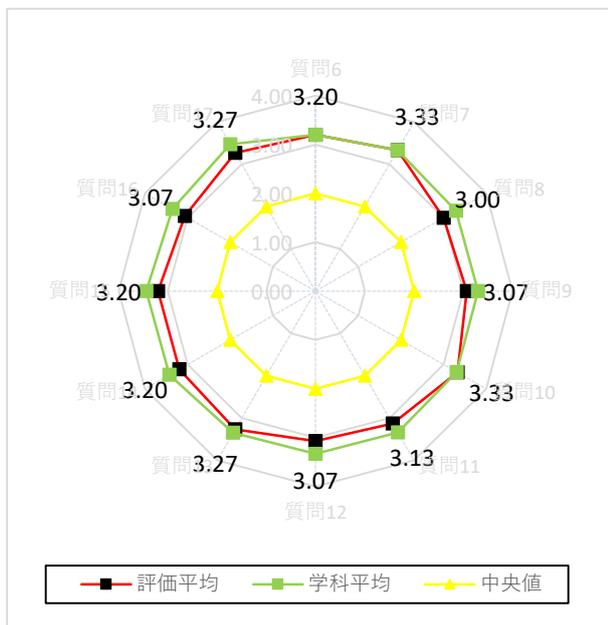
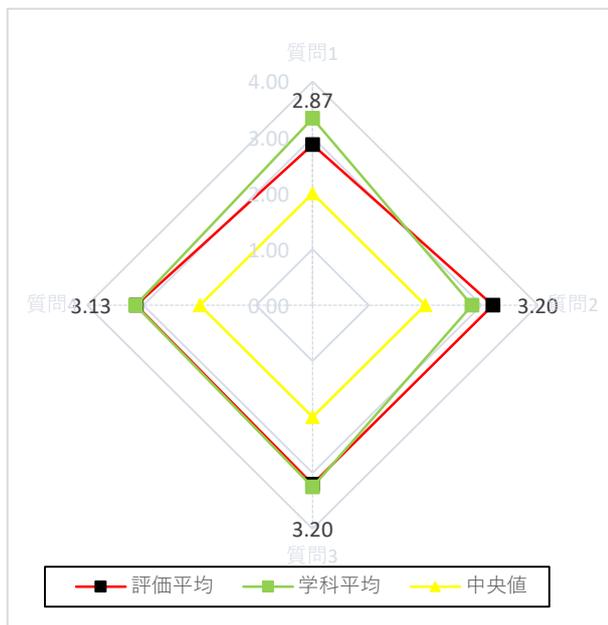
ほぼ学科平均と同様の評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度と同等以上の評価を得られるよう励んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		理科	32名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

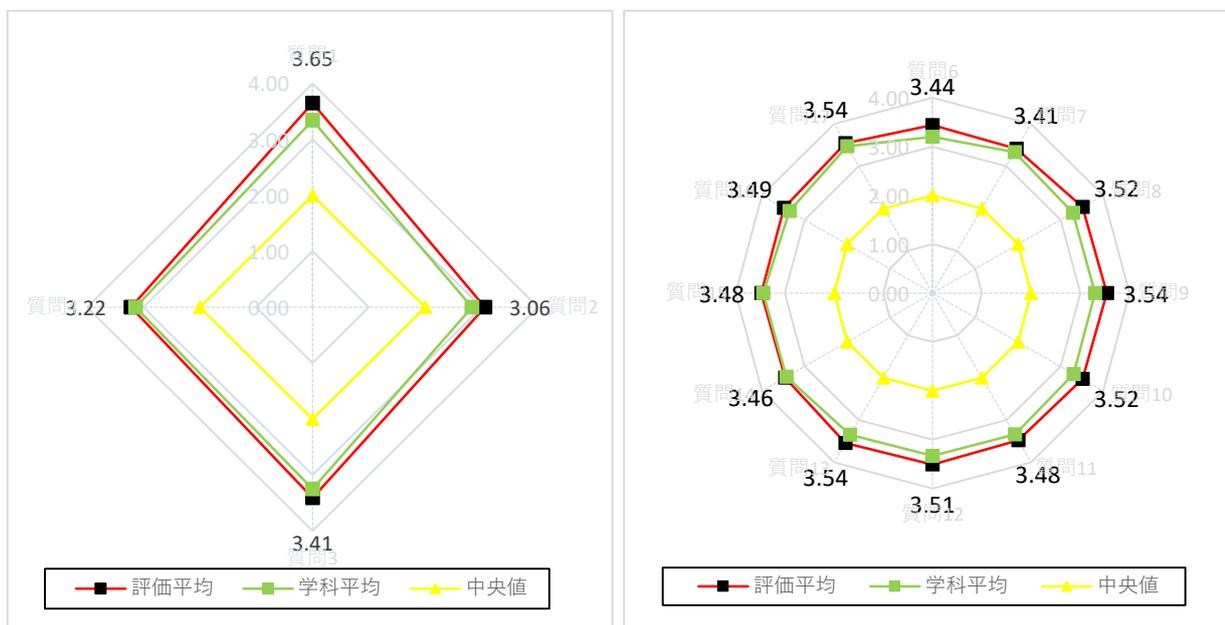
全体的に評価は高かったものとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

理系科目が不得意な学生もいることから、身近な生活における題材を取り上げることを行っている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		生活	99名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

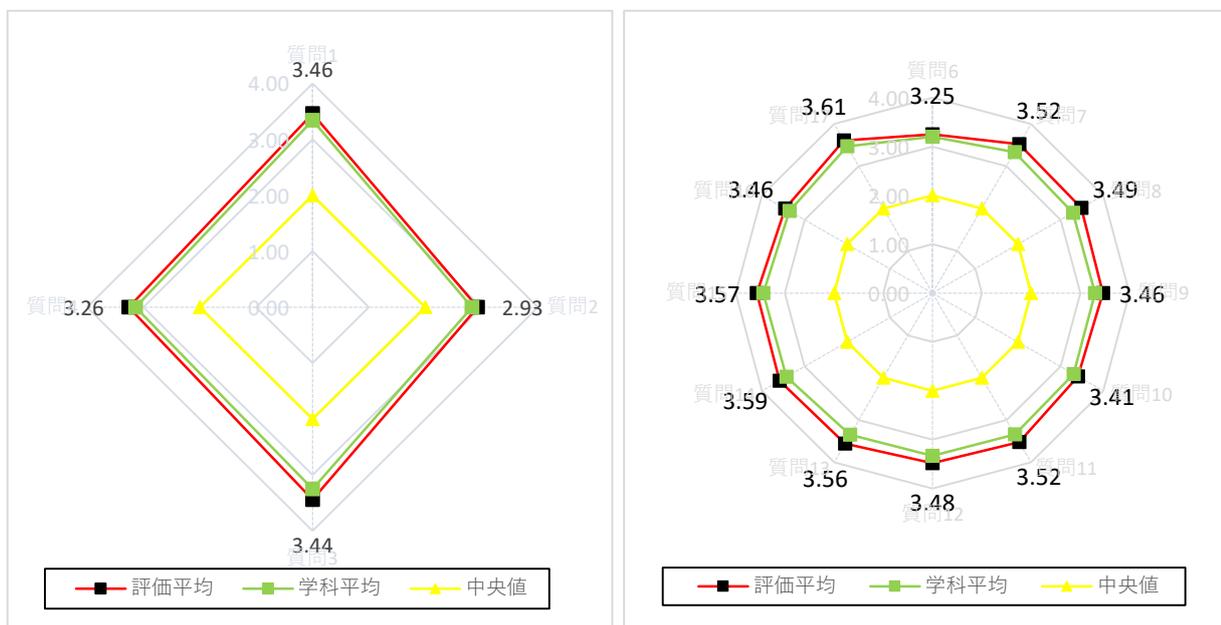
全ての項目において、学科平均と同等か上回る高評価を得た。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、本年度と同等若しくはそれ以上の高評価をめざしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽	96名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

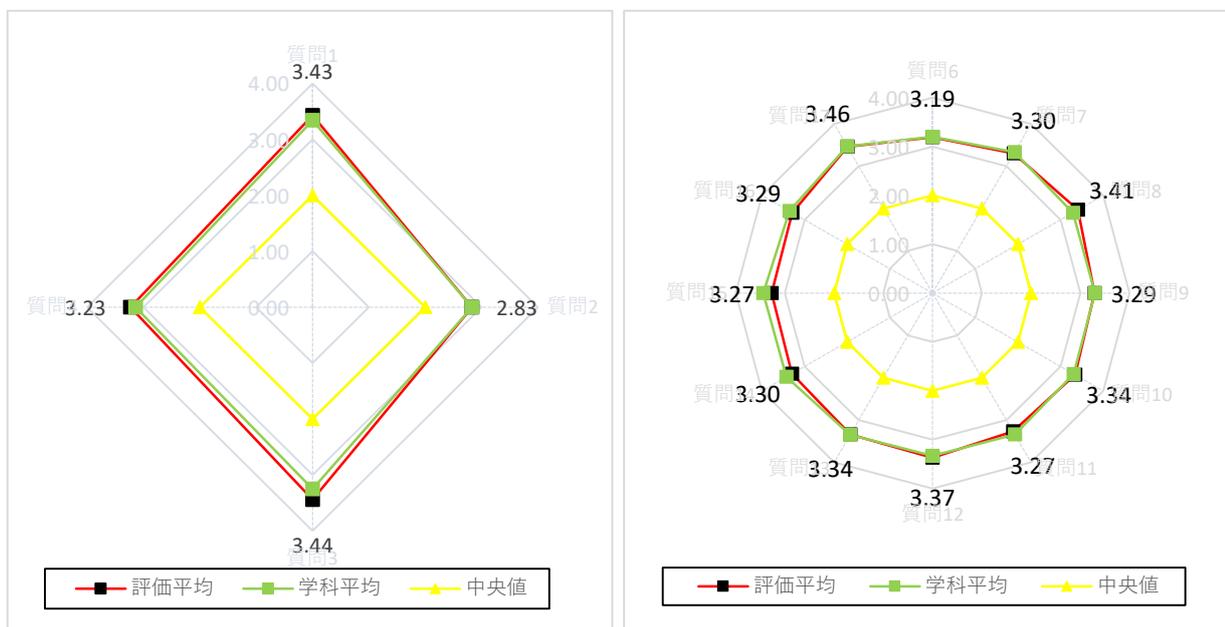
この授業は1年次前期の開講であることもあり、学生たちの出席状況は良好であった。ピアノ初学者の学生が6割強を占めていた。そのような学生にとっては、調性、移調、音程等の楽典の理解は負担が大きかったと思われる。しかし、質問項目13の授業の進度に関する評価は3.56であったことから、進度としては適正であったと考えられる。この点への配慮は学生の理解度にも影響を及ぼすため、今後も慎重な対応が求められると思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

ピアノ初学者の割合が高い学年と低い学年とでは、楽典を取り扱う音楽の授業の進度を、慎重に変えて対応していく必要があるということを痛感している。次年度の入学者の実態を速やかに把握し、学生に合わせて指導方法や進度を調整しながら対応していく予定である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		図画工作	109名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

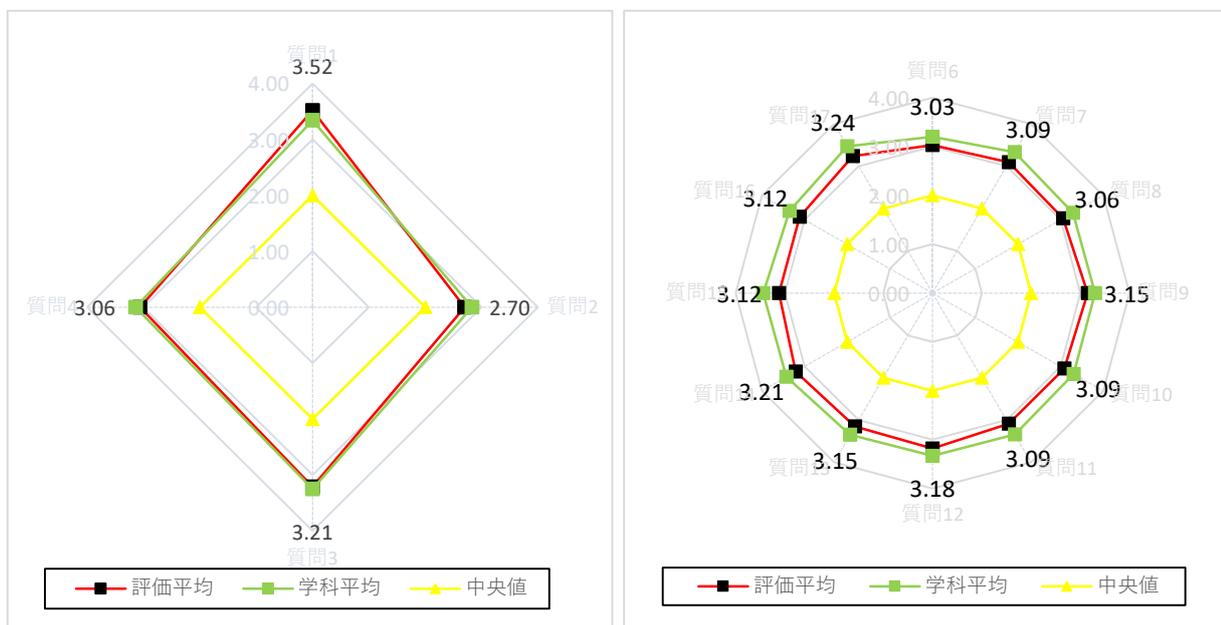
多少のシラバスとの相違が生じてしまった。おおむねの評価は得られたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度からは、一層の内容の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅱ（保育所）	59名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観や倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。

この評価については、一人ひとりの学生がそれぞれの実習園でさまざまなことを学び、その結果について自己評価をしたものであるが、全体的に低い評価となっている。このことは、質問内容が実習とは少し離れた内容であることが一因であるとも考えられる。

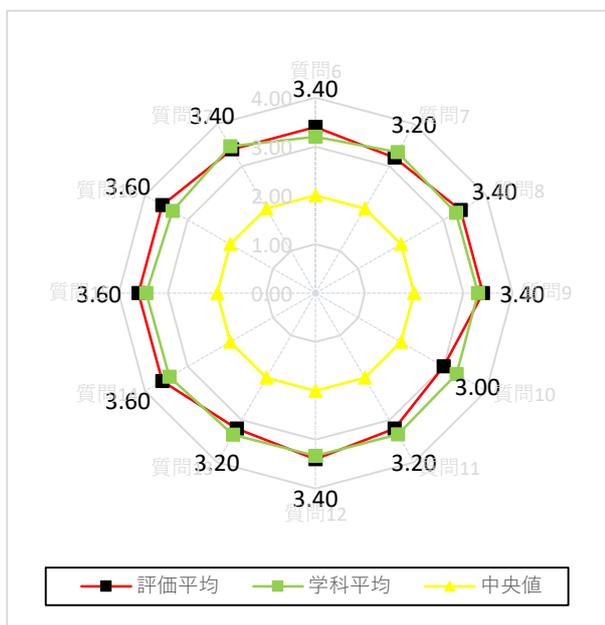
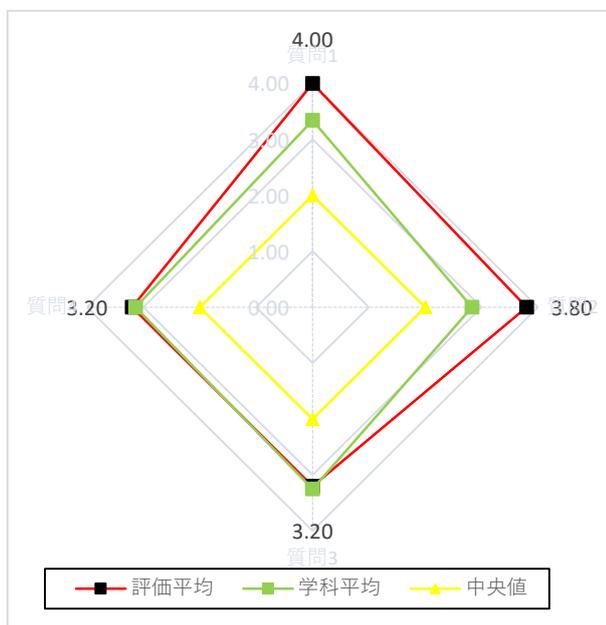
(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習Ⅲ（施設）	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅲでは保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各施設の特長や一人ひとりの利用者の実態、保護者の状況、社会資源との連携等について理解し、利用者に対する適切な支援を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。

この授業評価は、一人ひとりの学生がそれぞれの実習施設でさまざまなことを学び、その結果について自己評価したものであるが、すべての項目について一定以上の評価を得ており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えている。

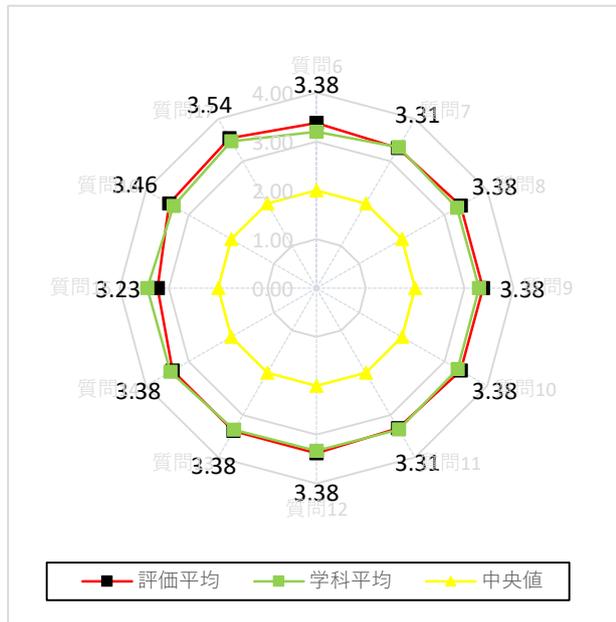
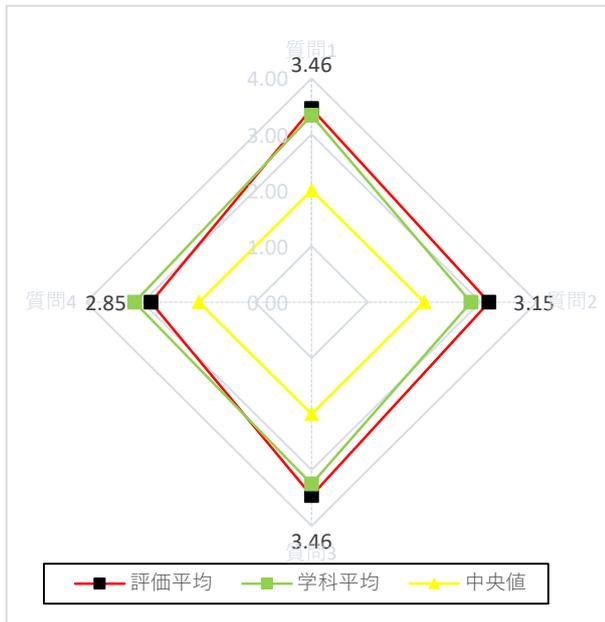
(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅲは、最終学年である4年次で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に支援を必要とする利用者に対する個別支援や地域社会における支援の現状、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習施設とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育	88名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

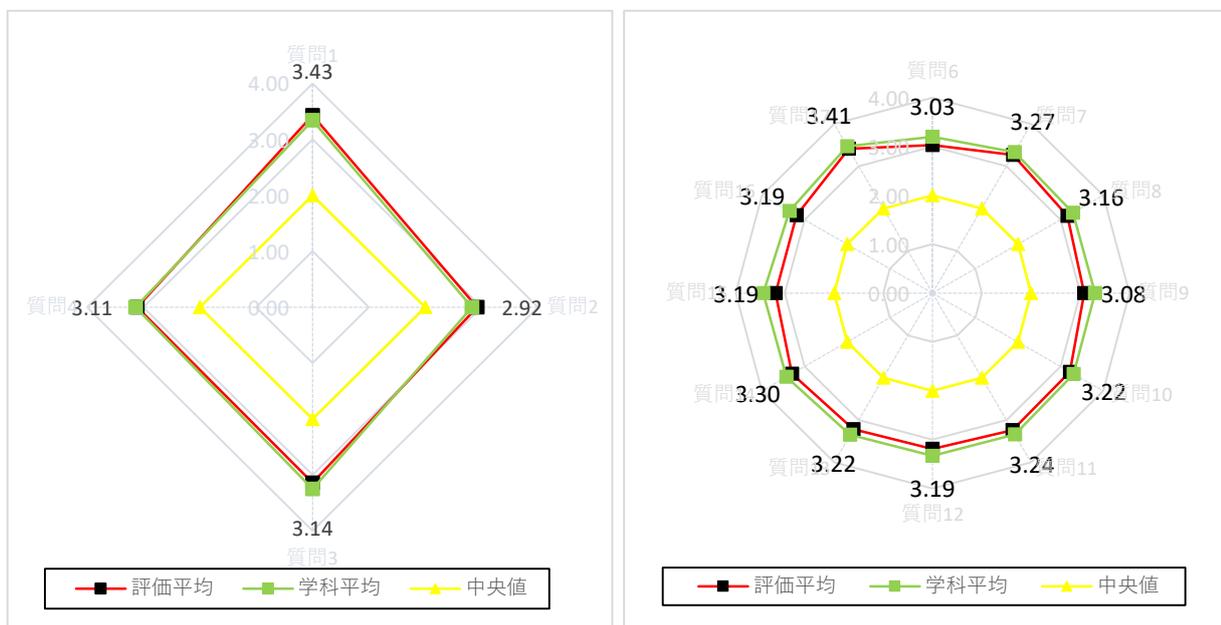
質問項目15に関してのみ学科平均をやや下まわっている。実技の科目のため全員に目が行き届かないことがこのことにつながっていると分析する。
全体的には高評価であると言える

(3) 次年度に向けての取り組み

実技の科目でも出来るだけ全体を見て個人個人を見て声かけを増やすようにする

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅱ	117名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習Ⅱでは、保育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各保育所の特性や一人ひとりの子どもの実態、保護者の状況等を理解し適切な援助を行うことが目標となっている。また、専門職としての保育士の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる、一人ひとりの学生が、それぞれの実習園でさまざまなことを学び、その結果について自己評価をしたものであるが、すべての項目について学科平均を上回っており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

仕上げの実習として、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えられる。

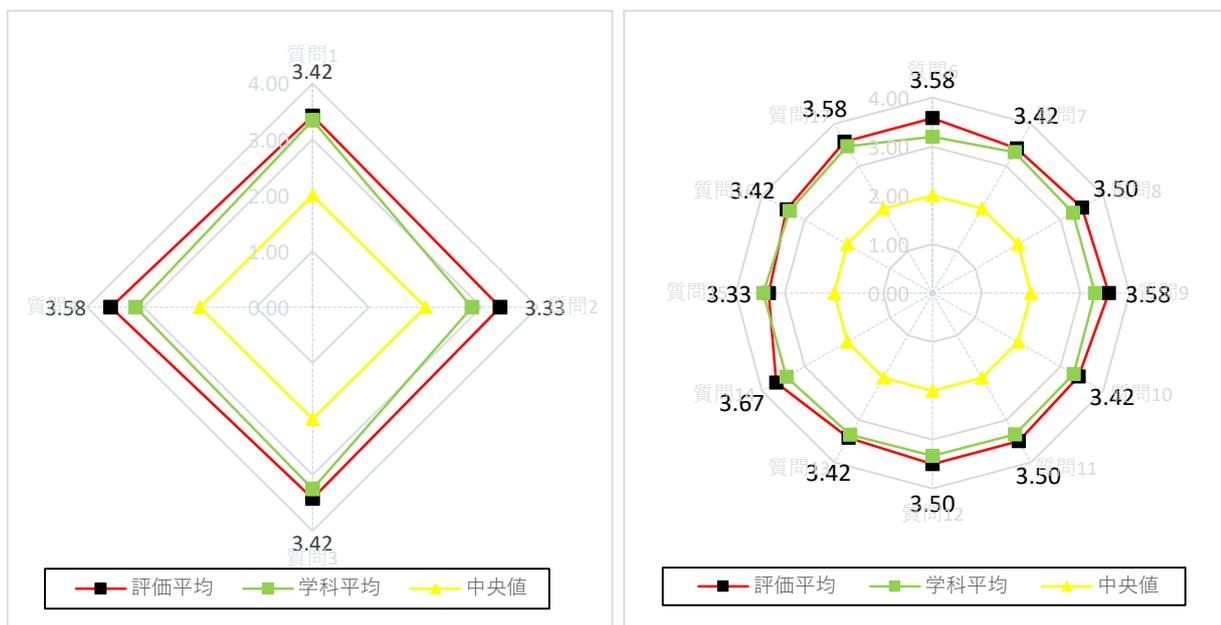
(3) 次年度に向けての取り組み

保育実習Ⅱは、最終学年である4年生で行う仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも非常に重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。今回も実習の自己評価分析表を用い、実習を振り返ると、現場でどのような保育を目指したいかを明確にしている学生も多く見られた。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導Ⅲ	30名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導Ⅲについては対象となる学生が少ないため、ゼミ形式の授業を展開している。しかし、少人数であるにもかかわらず、実習先施設の種別は、養護系・障がい系、利用者についても児童、者であるなどさまざまである。その前提のもとでの指導であるため、指導方法に配慮を要する。今回は、状況に応じて全体的に進めたり、実習直前期は個別に対応するなど、指導の方法を工夫して臨んだ。

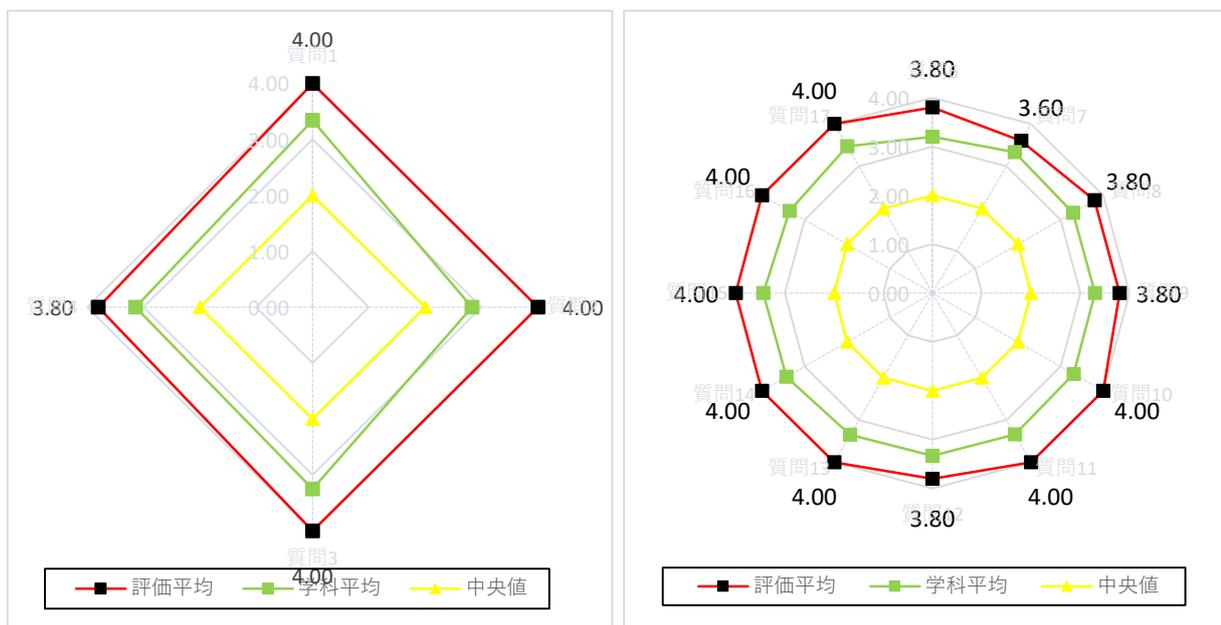
授業評価については一定以上の高い評価を得ており、特に大きな問題点はないようである。自分が経験する実習について事前に調べたことや、実習中経験を通して学んだことなどを全員が共有しながら進めたことは、一人ひとりの学びにとって有益であったように思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も対象学生は少ない人数である、今年度と同じようにゼミ形式を進めていくことになる。学生それぞれが実習に臨む上で事前に調べたことや、実習後に学んだことを報告する機会を設けて、学生間で双方向的に学習できるような環境を整える必要がある。また、教員もその環境の中に存在することによって適切な指導ができるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		保育実習指導 I	139名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

保育実習指導 I においては、初めての外部実習である施設・保育所実習に向けて、実習の意義・目的・心構えを学習するとともに、対象となる子どもや利用者の年齢や状況に応じた保育・支援、また指導計画・支援計画立案等さまざまな内容を習得できるよう指導を行っている。特に学生にとっては、経験のない未満児や障がいをもつ利用者についての理解が非常に難しいため、視聴覚教材等を適切に使用したり、保育現場の保育者や指導員を招へいし、具体的な指導を盛り込むなどの工夫をしている。

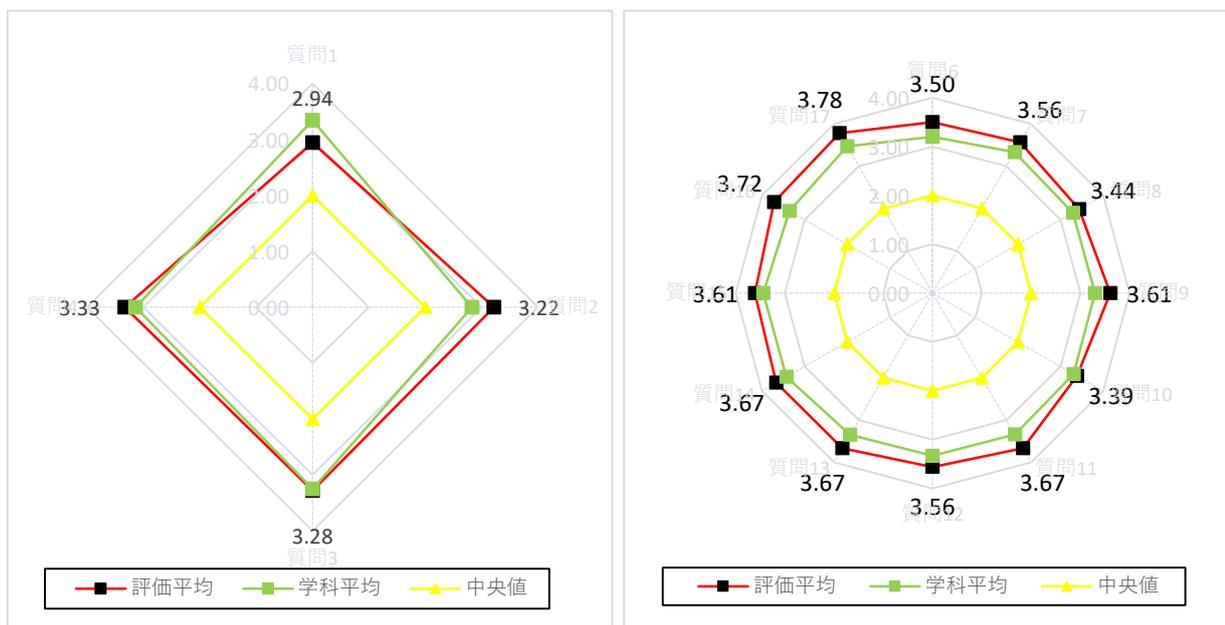
授業評価については一定以上の高い評価を得ており、特に大きな問題点はない。しかし、到達目標の明確さという点で少し評価が低いため、さらなる努力が必要である。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、概ね同様の方法で進める計画である。特に「到達目標の明確さ」という点について、今後は、より明確にした上で指導できるよう努めたい。課題としては、特に未満児や障がいを持つ利用者についてしっかりと理解した上で実習に臨めるような工夫が必要である。また、記録や指導計画・支援計画等の書き物については、書くことが苦手な学生も多くいるため、「書く」というたくさんの経験ができるように視聴覚教材等の適切な使用も含め検討したいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		子どものストレスマネジメント論	47名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本講は、ストレスマネジメントに対する知識を高めるとともに、実際のコーピング法を実技を取り入れて学ぶ形式のものである。

質問6～17までの評価についてはすべての項目において学科平均を大きく上回る評価を得た。

ノートにする資料配布、教科書、実技など工夫をし、毎回、終了時に学生が記入した授業メモの感想、意見や質問を

次回の授業でフィードバックする形式を用い、学生たち自らが授業を作っていく要素を取り入れた。その結果、

学生たちにも双方向性が実感できたのであろう。

学生の態度に関する項目（質問1～4）については、欠席が多い学生がいたことが残念である。この要因が何かという点は不明瞭であるが、一つには、身体的なアプローチをおこなう実技があることもその一因かもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

前年度同様に授業メモを活用しながら学生と共に、授業を作っていく。

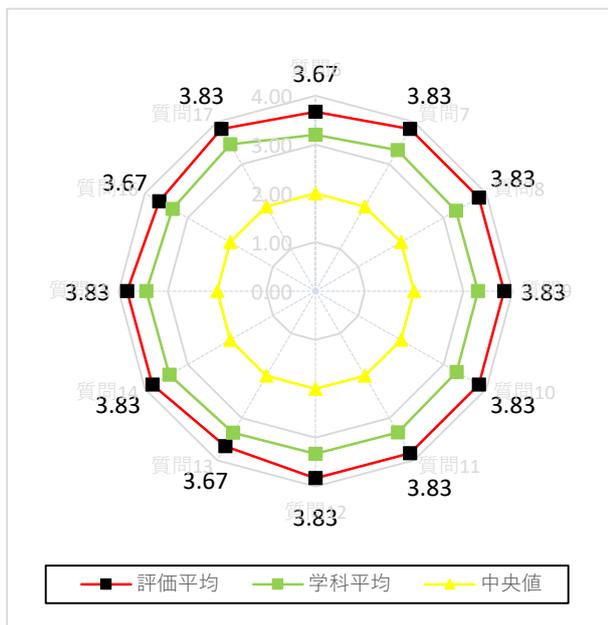
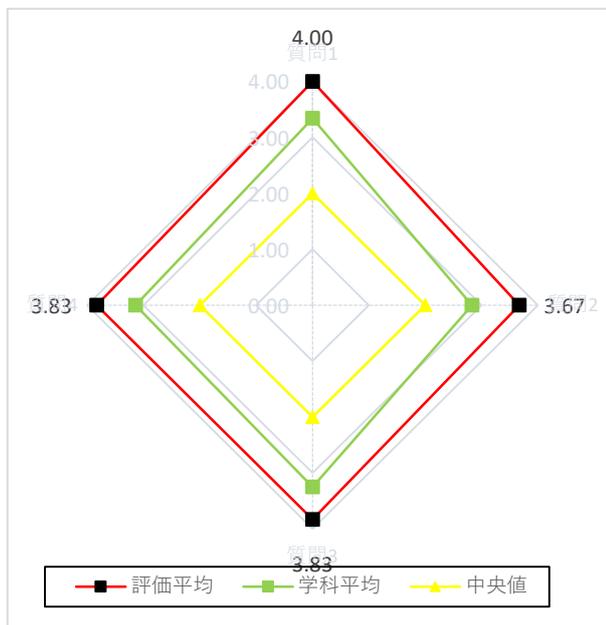
なるべく、学生とのやり取りを多く行いながら、学生の興味、関心を喚起していく。

実技に対する配慮が必要な学生がいた場合には、事前にチェックするような体制をとっていく。

その面での配慮がどの程度可能かについては学生とやり取りをしながら工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習Ⅱ	73名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

幼稚園教育実習Ⅱでは、幼稚園教育実習Ⅰにおける経験と課題を踏まえ、各幼稚園の特性や一人ひとりの子どもの実態を理解し、その援助の方法について学びを深め、保育実践に必要な指導力や技能を展開することができることが目標となっている。また、専門職としての幼稚園教諭の役割や職務を理解し、自らの保育観・倫理観をさらに深め、新しい学習課題を発見する機会として捉えることが必要とされる。一人ひとりの学生が、それぞれの実習園でさまざまなことを学び、その結果について自己評価をしたものであるが、すべての項目について学科平均をかなり上回っており、学びが素晴らしいものであったことがうかがえる結果である。

実習後、大学において振り返りを行い、課題や問題点を解決し、社会に出ていけるよう各自が努力していくこと、さらには教員がそれを支援していくことが必要であると考えている。

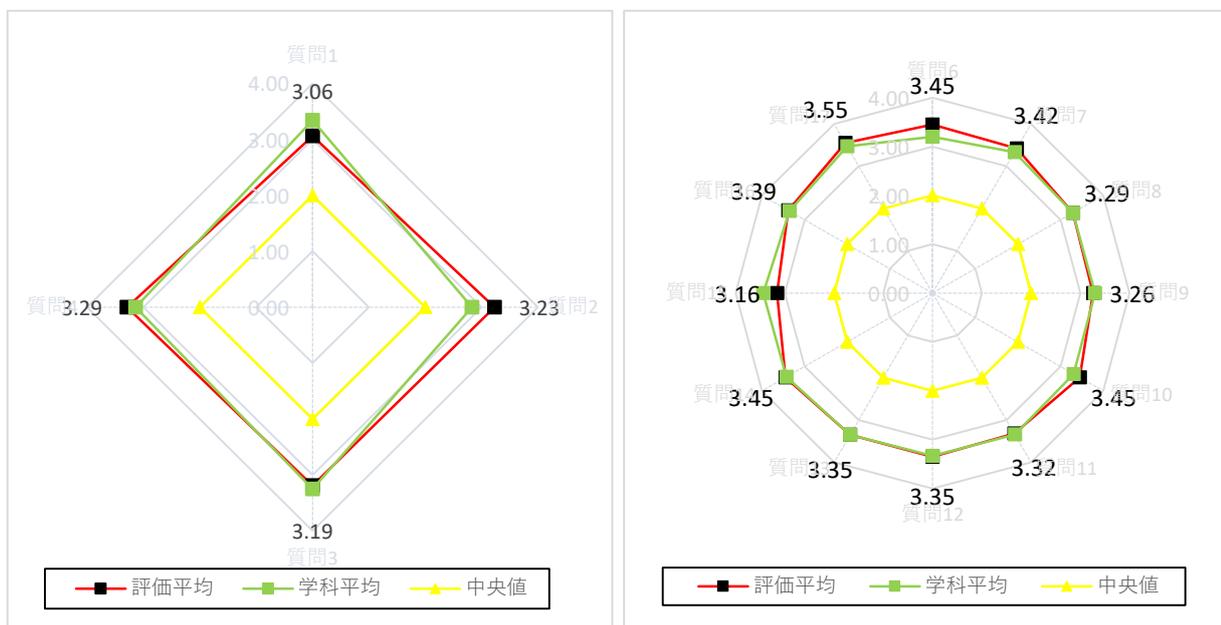
(3) 次年度に向けての取り組み

幼稚園教育実習Ⅱは、3年生で行われる幼稚園実習の仕上げの実習である。自らの今後の進路を定める上でも重要な実習であると言える。特に地域社会における保育の現状、子育て支援、保護者支援に対する理解や実践についても求められており、その内容は多種多様である。

これらを踏まえ、次年度は実習園とも連携をさらに密にし、各自の保育観や倫理観を確立していきけるよう支援していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		児童臨床心理学	36名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

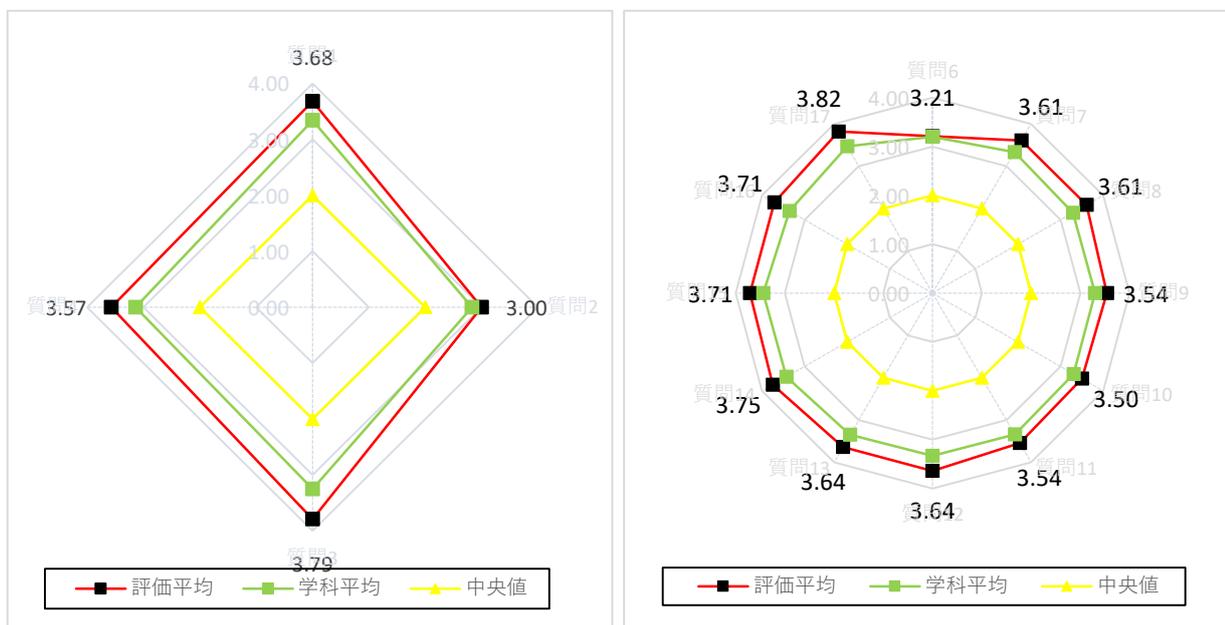
本科目は、シラバスの内容を当初に説明し、授業内容の担当者を決めグループで調べ学習を行い発表する形をとっている（不登校、いじめ、虐待などの内容）。グループ間で話し合いは行われているが、学生間に温度差があり、まじめに取り組むものとならない学生がおり、その指導に時間を費やした感がある。また、テーマを決めグループワークを行ったが、熱心に話し合いそれをきちんとまとめて報告することが出来た（不登校、いじめ、メディアの問題など）。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度はテーマに沿ったグループワークを取り入れ、児童の心理的問題について自分の考えをまとめ発表するような授業にしたい。
また、視覚的教材を用いて児童への心理的アプローチや技法について学べるよう工夫したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習	68名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

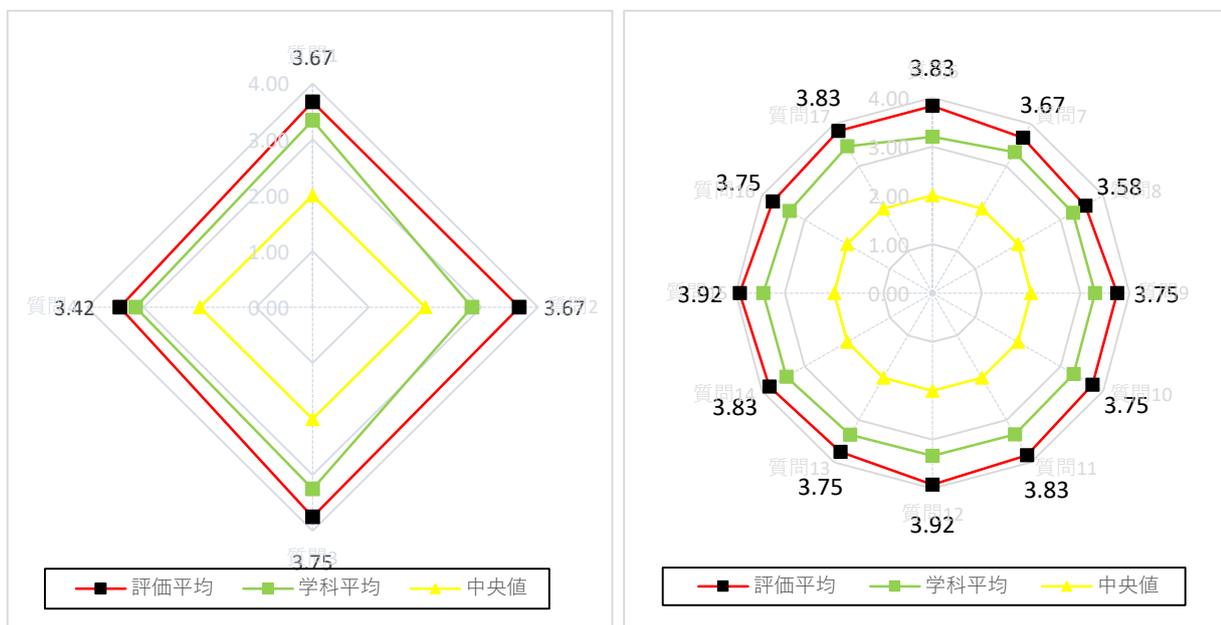
今年度は教職に対する学生の意識が全体的に高く、全問に対する評価が良好であった。小学校教育実習と教員採用試験について、リーダーシップを発揮する数名の学生の存在が、全体にいい影響を与えたと考えている。学生のアクティブ・ラーニングと日ごろの授業の在り方の重要性を改めて実感している。

(3) 次年度に向けての取り組み

早い段階から体系的・継続的、そして組織的に小学校教員養成に取り組み、「子どもとしっかり向き合い、寄り添いながら、粘り強く課題解決に取り組む教員養成」をめざしていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習指導	151名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

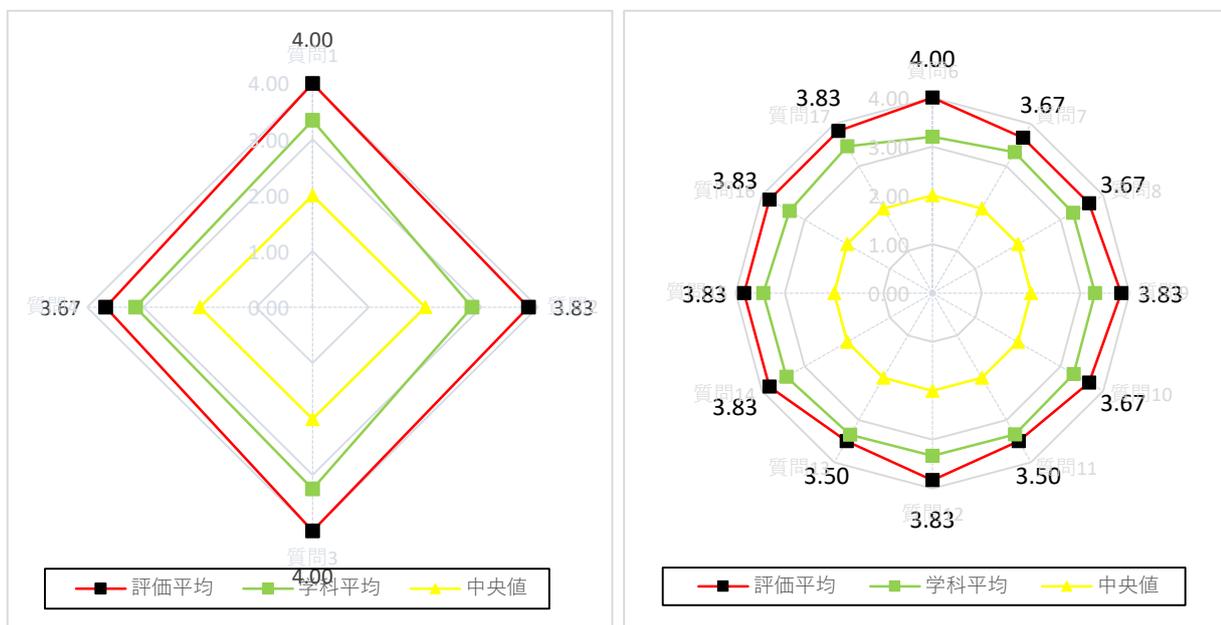
幼稚園実習指導については、全体的に平均以上の数値だった。実習事前・事後の活動は、各自が実習に向けて取り組む課題があり、能動的に参加した結果が数値に表れている。教員側の評価では多い順に①学生の質問への誠実な対応②声の大きさ明瞭さ③授業目標の明確化④授業の計画性などと続いている。初の実習で附属幼稚園に尽力頂き、園との協力体制と連携もとれており、充実した実習指導になっていると考える。その基盤をもとに学外実習へ各々がそれぞれに取り組むというステップを踏んでいる。

(3) 次年度に向けての取り組み

授業評価の項目で、視聴覚・配付資料・授業の分かりやすさと工夫・興味関心について、が平均とほぼ同じであった。これからの改善の余地があると思われる。さらに上記に示した自由記述の具体的内容として思い当たるのは、グループワークで「実習で何を学びたいか」の明確な視点を持つため、図解作成を行っている取り組みである。説明にも作業にも時間と労力をかけており、初めての図解作成に苦戦している姿と楽しんで取り組む姿が見られる。結果的には学び取ったものを共有し、学生自身が満足いくグループワークになっているようである。今後、効率よく時間配分できるように改善していきたい。そして、この学びのスタイルが、子どもの成長発達を願い、保育現場で生かせるように取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		幼稚園教育実習 I	76名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

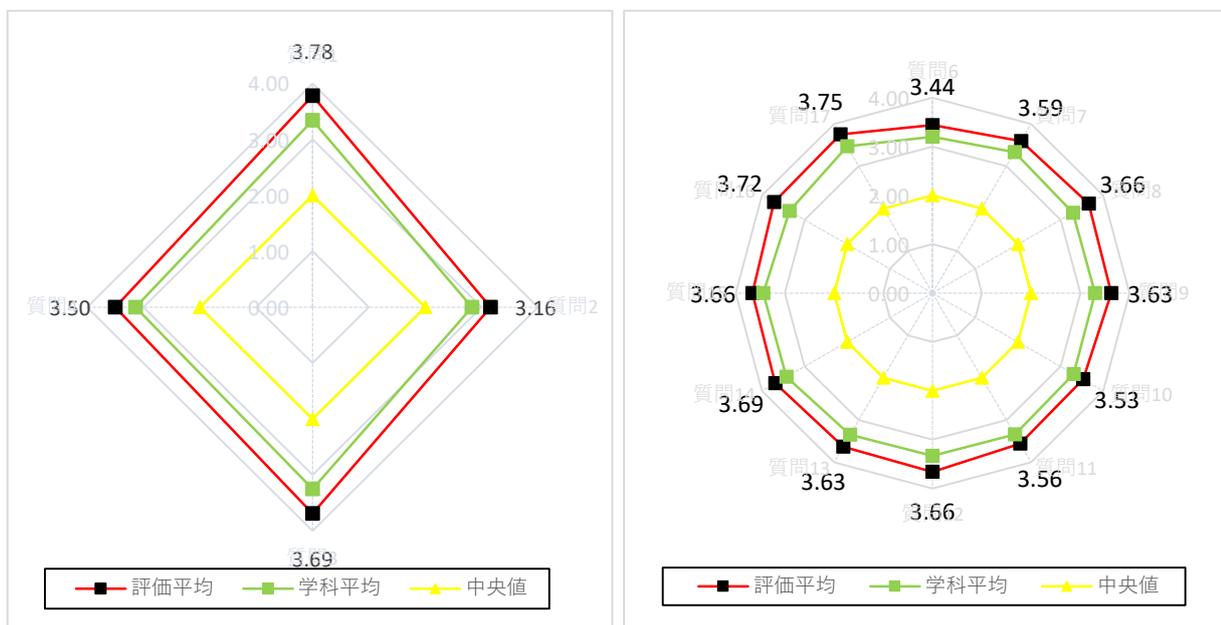
各評価とも全体的に高めである。幼稚園実習 I は、学生にとって初めての实習であり、附属幼稚園での実習である。現場の受け入れ体制が整っているので、実りある実習になっていると分析できる。実習日誌からも実際に子どもにかかわり、体験からたくさんの学びを獲ていることがうかがえる。園のクラスに配属された実習生同士の助け合いや学び合いも観察できる。また、夏休みから、現場の先生に指導計画案の添削を委ね、子どもの興味関心をひく内容を考えてきた。観察実習、参加実習、部分実習、責任実習の段階を踏まえ、子どもや保育者から多くを吸収していると捉えている。今年度はA, Bクラスが実習を継続的に行ったので、実習の学びの図解作りがスムーズに進んだ。そして、現場に御礼の言葉を添えて学びを報告出来たことは教育効果が高かったと捉えている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も、体調を整え、礼儀やマナーを身につけ、謙虚な気持ちで実習に臨みんでほしい。幼稚園実習 I が以降の実習の取り組みに大きく影響するので、個人の実習への姿勢や取り組みを重視していきたい。また、現場の先生と連携をとり、実習生指導をより充実させたいと考えている。日誌や指導計画案が書けない学生もいると指摘を頂いているので実習の事前事後指導でもう少し対応できるようにしたい。各配属クラスの実習生で、「実習で学びたいこと」を目標に掲げている。学内のみでなく、実習期間中に振り返り、実習の意識をより高めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		小学校教育実習指導	118名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

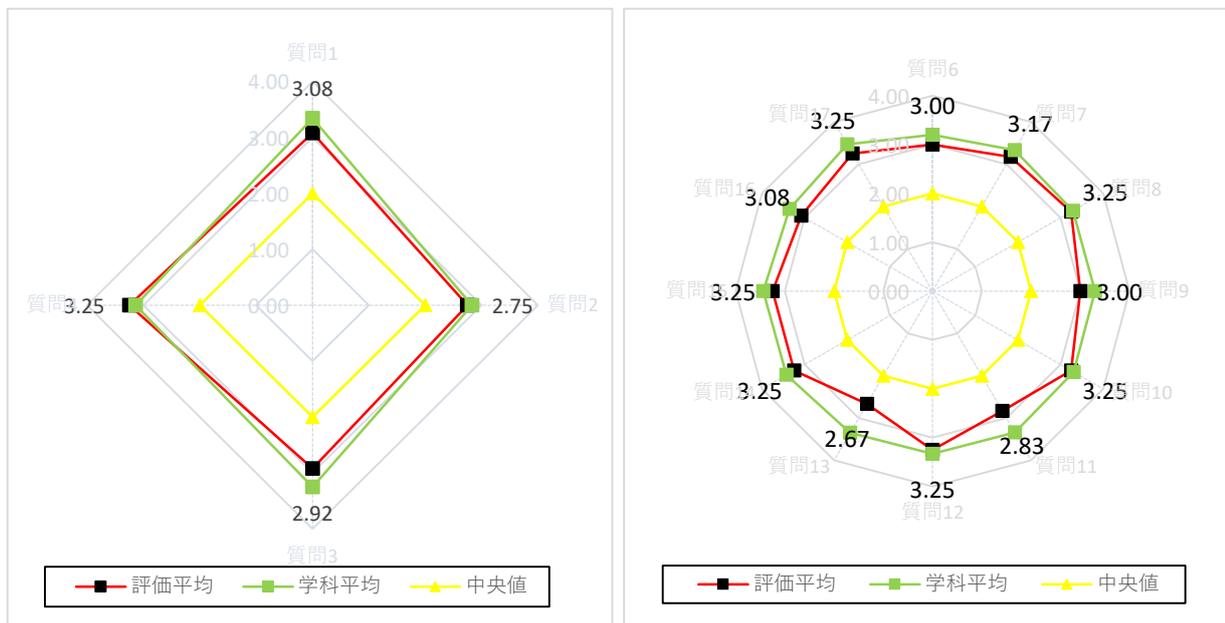
小学校が主という学生と、保幼が主という学生との温度差のある中で、おおむね高い評価となっている。授業は実践的指導力の育成という観点から、模擬授業を中心に行っている。模擬授業については、本年度から一人45分で行うとしたことで、学生の負担は物心両面とも大きくなったと思うが、より真剣さが高まり、学生の充実感や実践的指導力の育成などに成果・効果があったのではないかと考えている。模擬授業前の教材研究、学習指導案作成などの指導が、今後の課題であると考えている。」

(3) 次年度に向けての取り組み

小学校教育実習指導についての学生の温度差をできるだけ小さくするためにも、小学校教員免許取得についての一年時からの継続的・段階的な重要であると考えている。また、担当教員の役割分担や組織的な取り組み等についての検討も必要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども心理カウンセリング		スクールカウンセリングと学校臨床	38名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

子ども学科の学生は2名受講して回答は1名のみであったが、内容は、項目毎にメリハリがあり、各項目毎に熟考して答えていることがうかがえる。

それに対してカウンセリング学科の学生はなおざりにも見える。

質問11については、スライドを中心に教科書・資料等は使っていないのでこのような結果になったと考えられる。

質問13については、早かったのか遅かったのか、自由記述にも記載がなく、わからないので対応のしようがない。

子ども学科の学生は質問15~17について満点の評価であり、同じ授業という体験を共有していてもこれほど受け取り方に違いが出るのかと驚く。

(3) 次年度に向けての取り組み

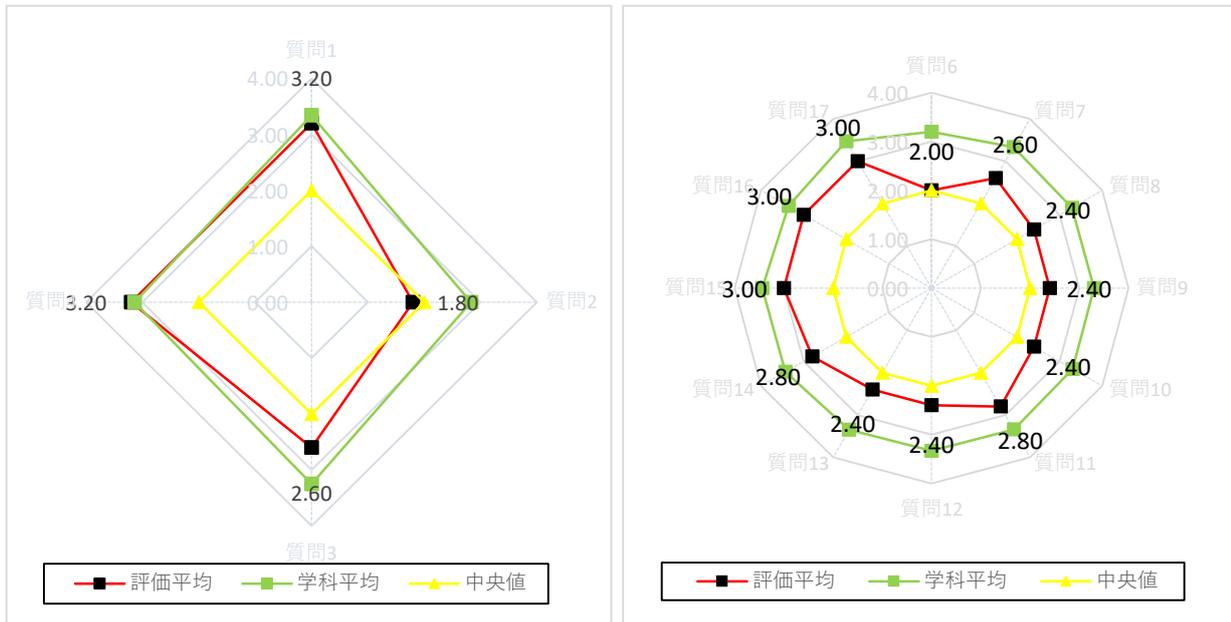
特に何を改善点として指摘されているか受け取りにくい面もあり、修整点に戸惑う。

基本的に授業の中で挙げてもらえればその都度対処したいと思うのだが、肝心の授業では反応に乏しいため、リアルタイムでの対応が困難である。

授業中に学生から色々希望・要望を出て、それに対しての教員の反応、を含めて最終的なアンケート結果、であれば考えようもあるが、授業中にはほとんど出てこないため、この結果だけから修整点を見出すのはなかなか難しい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

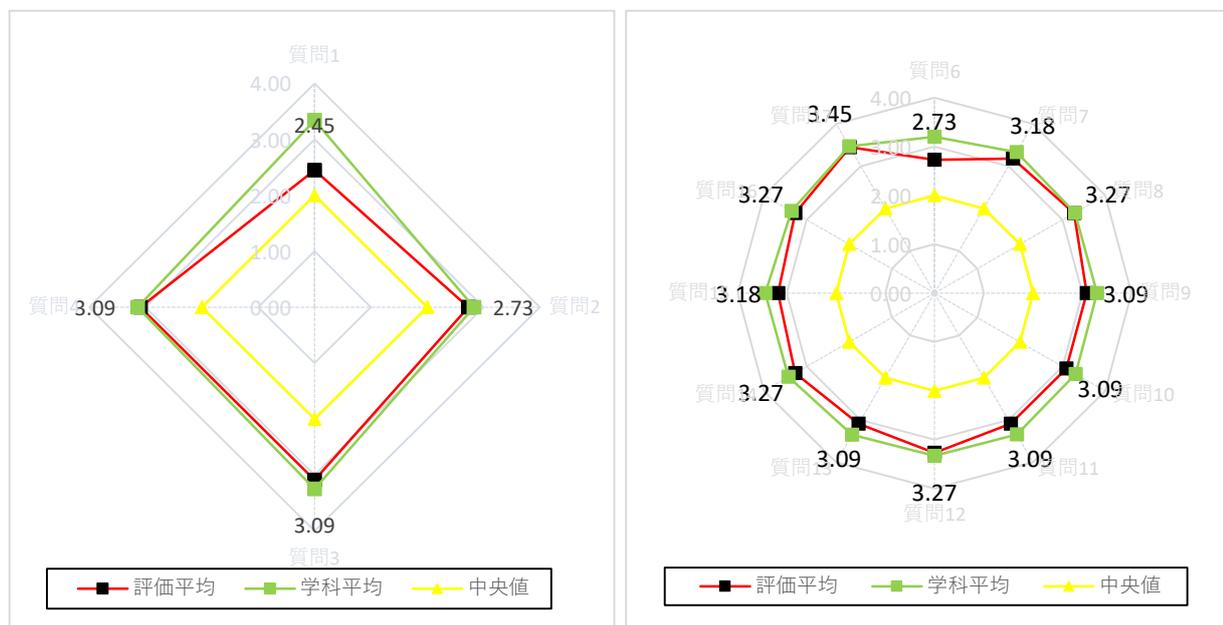
卒業研究は、学生が主体的に進めていくもので、受け身の講義の授業の尺度をそのまま当てはめると、卒論は、学生自身のものではなくなってしまう。この回答者は、そのような答え方をしたのだと思う。卒論指導に不満があったように受け取れるが、それは、学生自身の取り組み姿勢の問題である。この評価のやり方は役に立たない。

(3) 次年度に向けての取り組み

学士絵がこのような評価尺度で、自分の取り組んだ卒論を評価しないように指導していかなければならない。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	14名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

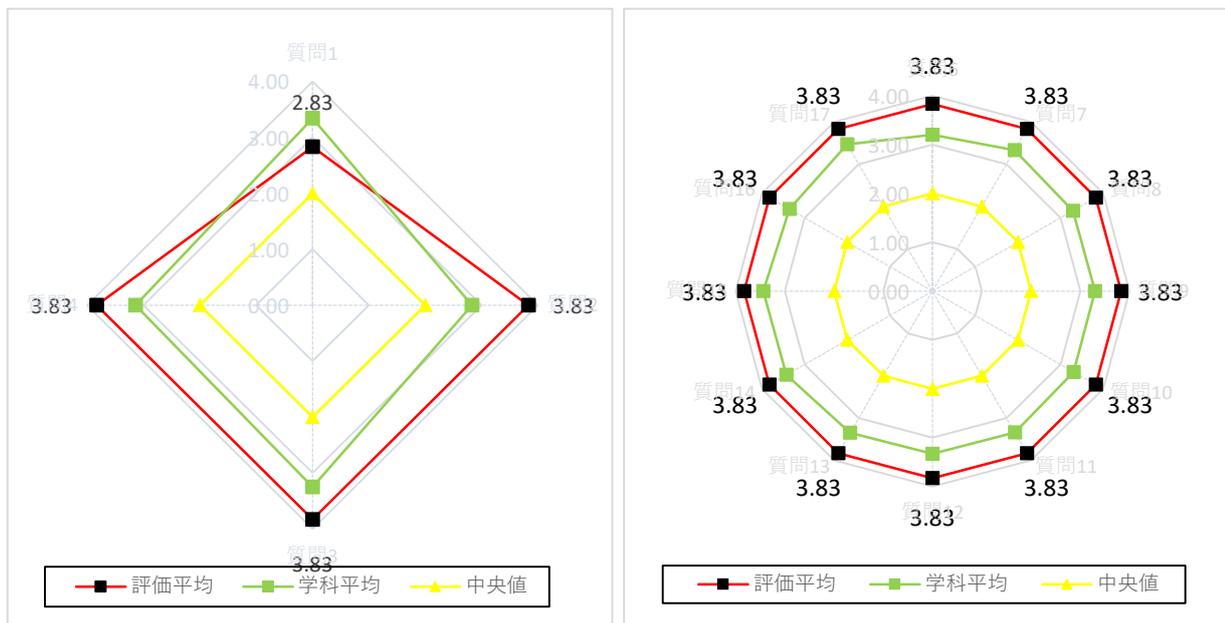
学生の自己評価である。5項目のうちすべてに亘って子ども学科の平均より低くなっている。大いに反省すべきである。まずはシラバスの解説である。卒業研究自体の特徴、意義等は適宜説明しているものの、シラバスの説明となると実行していない。また「総合評価」が2.73と「やや良い」を下回っていることは看過すべきでないと思われる。学生の卒業研究への取り組みは個人差が著しい。能力の高低がそのまま取り組みに反映されるところがある。だからこそ受講者の個々の特性に合わせて指導すべきものと思われる。授業評価についても13項目すべてに亘って子ども学科の平均評価を下回った。特に注目すべきは「質問に誠実に対応しましたか」「公平に対応しましたか」に対して11名の中で2名の受講者が「悪い」と答えているところである。授業者としては質問への対応、公平な対応は心がけているつもりであり、これを授業者の意図に反して、全くそうでないと評価されたことはしっかり考察すべきことと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

卒業研究の指導をどう実践すべきか。卒業研究の取り組みは学生の個人差がそのまま反映される。研究の構想力、その前の先行研究の理解、自己の好奇心の定位、構想の実行力、指導者の活用力、さらに文章力である。今回は受講者が14名と多数であったことが影響しているとはいえ、受講者の総合評価が「やや良い」を下回ったことは、今後の取り組みの大いなる反省材料である。各受講者の卒業研究の到達目標を明確に意識させる指導が有効かと思われる。どこまでの卒業研究としたいのか。受講者自らがどこまでできると考えるのか、このことを卒業研究の出発点としたい。また、「誠実な対応」「公平な対応」に「悪い」と評価した受講者が11名の中で2名もいたことを重く受け止めなければならない。一つは14名という人数の影響を考えるべきと思われる。今後10名を越えての指導は卒業研究の充実を妨げる要因として考えたい。また対応の意図がしっかりと実行されていない、受講者にそう受け取られていないことは、受講者の反応に授業者が鈍感であった証である。感覚を謙虚に研ぎ澄ますべきと思う。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

「子ども学」領域において、各分野・学問に応じた教育研究や学術研究等を遂行し、その成果を提出・報告することが求められている。本ゼミにおいては「子どもの環境と文化」に視点を置き、さまざまな角度からアプローチして疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことなど、興味や関心に基づいた研究テーマを各自選択し、深めている。

集大成である「卒業論文」作成については、その取り組みの姿勢や進度に大きな個人差があり、課題提出期日や約束事が守れず、他の学生に比べてすべてにおいて遅れるという学生がおり、その対応に苦慮した。人数が11名という大変多い人数であったことも影響して、なかなかスムーズな指導ができないこともあった。

質問項目にある「双方向的なやり取り」という点については、昨年度の反省点を踏まえて、個別指導を徹底したため、非常に高い評価となっている。

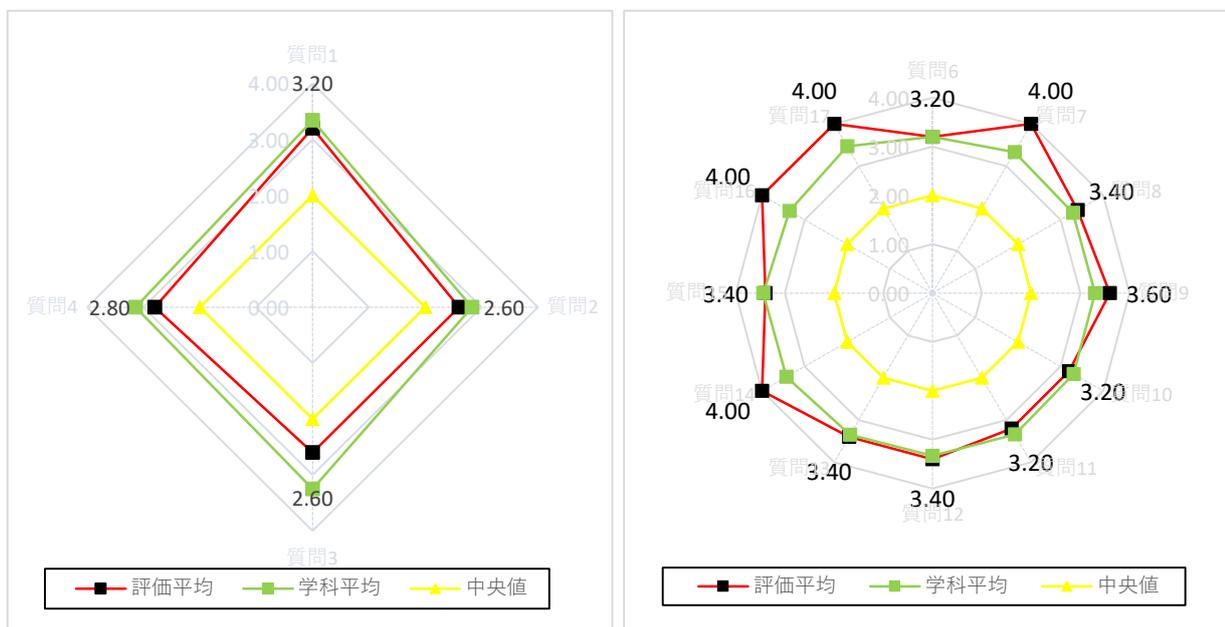
(3) 次年度に向けての取り組み

次年度も概ね同じような形式で進めていく予定である。すでに仮のテーマを設定し、先行研究についてもある程度深め、ゼミ全体で中間的な発表も行っている。

今後は、学生が自らの「卒業論文」に対して主体的に取り組み、無理のないスケジュールで完成に至ることができるよう支援していきたいと考える。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

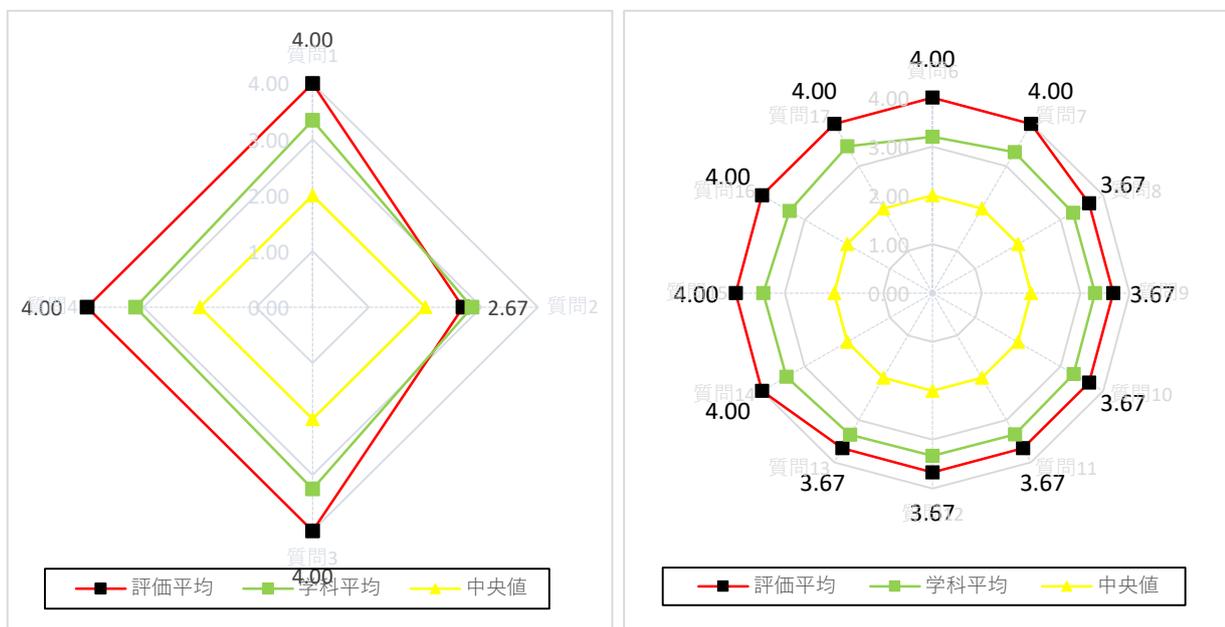
学生の意欲・態度（「質問1～4」）が、学科平均を下回っている。その反面、質問6～17に関しては、ほぼ学科平均を大きく上回っており、高評価を得た。

(3) 次年度に向けての取り組み

今年度よりも、さらに高い評価を得られるよう精進したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率をみると、9名中3名の回答で33.3%であることが大きな問題である。

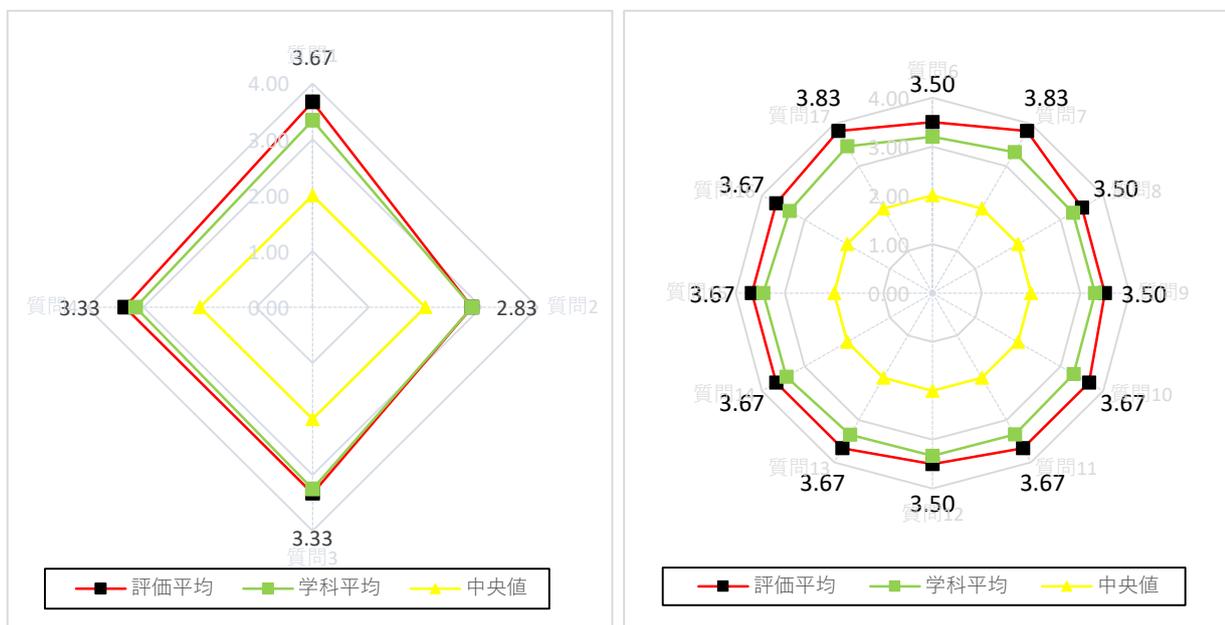
その上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は4.00、②授業の総合評価は4.00であり、回答学生は大変充実した学びとなったことが窺える。卒業研究は、学生の興味関心を探求し、研究論文作成とその成果発表を行うことにより、学生自身の学びの充実と自己理解を深めることができている。

(3) 次年度に向けての取り組み

受講生全員が授業評価を行うよう、あたためて、授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として100%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	9名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

本年度卒業研究を担当した学生たちは、真面目で意欲の高い学生が多かった。「シラバスの活用」以外の3つの項目の評価が高いのは納得できる。

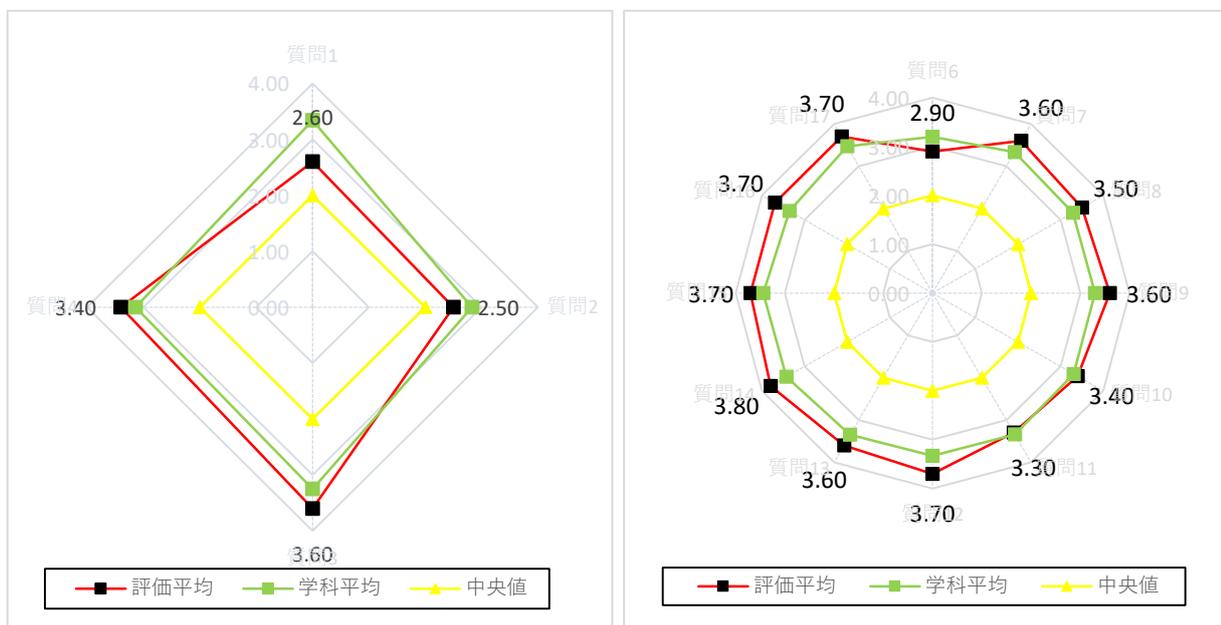
教師の指導については、17の項目すべてで学科平均を上回った。とくに「到達目標を明確に示す」「授業への熱心な取組」については、どちらも3.8という高い評価値となった。学生たちは卒業論文作成の過程を通して、自分の選んだテーマについて研究する道すじ、文献調査やアンケート調査、インタビュー調査の方法、考察を文章として形にしていく方法、プレゼンテーションのしかたなど、大学生として重要なものを学べたと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

本年度の成果を活かしながら、様々な背景と学力、興味関心をもつ学生への個別的指導を丁寧に進めていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

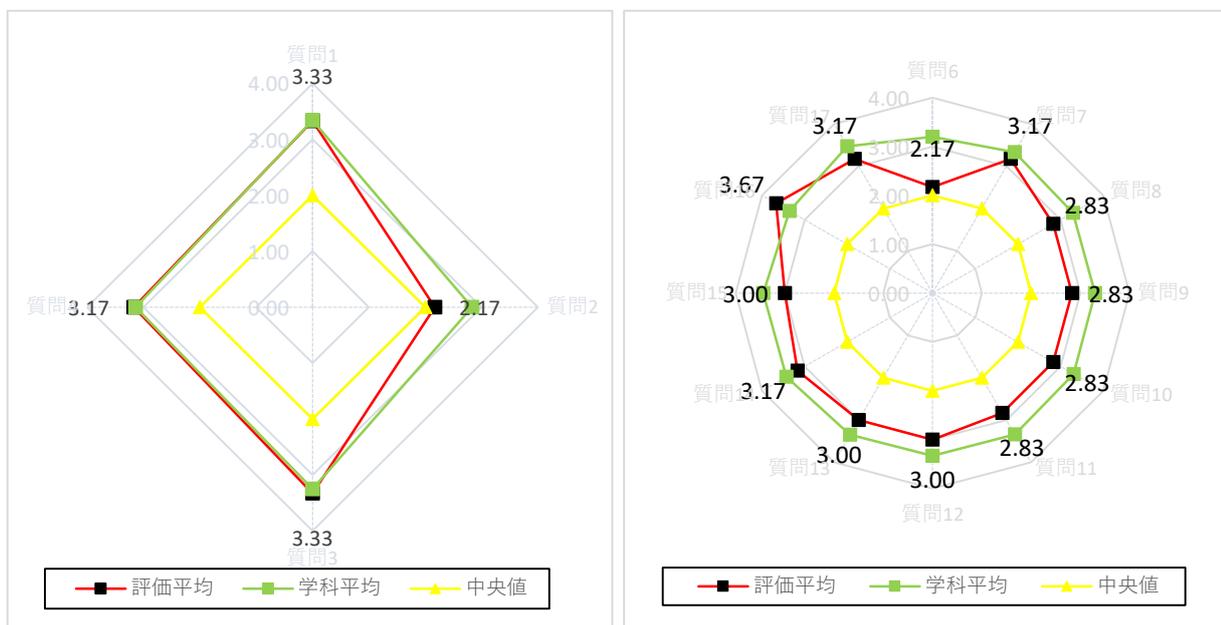
問6のシラバスの説明が十分でなく、学生が見通しをもって卒業研究に取り組むことが今一つであったと反省している。

(3) 次年度に向けての取り組み

ゼミ生が、大学最後の一年を見通しをもって、充実した学生生活を送れるように、卒業研究指導を行っていく。ゼミ生5人の少人数であり、前年度以上に丁寧かつきめ細やかに指導していきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	11名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

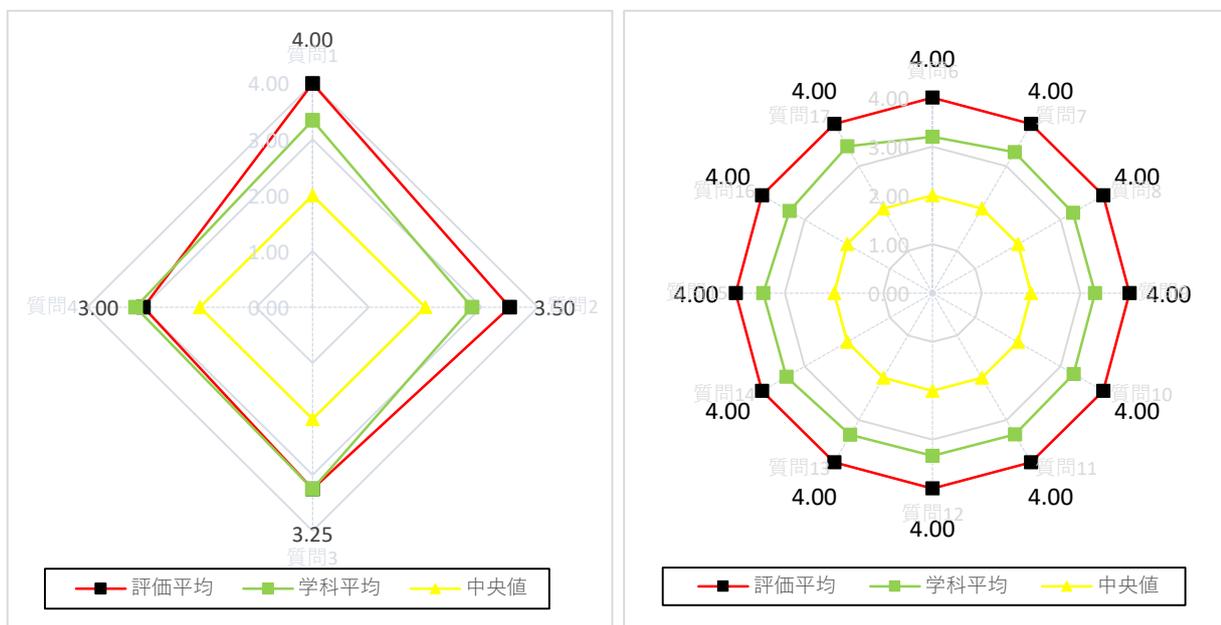
質問2や6のシラバスに関する項目の評価が低かった。卒業研究は全員が個別のテーマで研究に取り組んだため、個々の学生の就職活動や学外実習のスケジュールに合わせて個別指導を苦に混んでいったそのため、毎時の予定は予め統一したものではなく、その都度、個別に指示を出していった。したがって、シラバスに関しては、受講学生が不都合を感じることはなかったと思われる。他の項目に比べ、質問16は評価が高かった。卒業論文の内容の充実を図り、完成させるまでには、学生と教員との双方向的なやり取りは欠かせない。他の授業以上に、この点には配慮しながら取り組んだ、このことが、評価の数値にも表れたと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

この授業では、論文や書籍等の資料を活用しており、教室内での板書は行っていない。調査項目によっては、学生は答えづらいと思われる。次年度の卒業研究では、今年度に引き続き双方向的な係りを重視し、さらに学生の満足度を上げるように取り組んでいきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子育て支援	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

回答率をみると、8名中4名の回答で50%であることが大きな問題である。

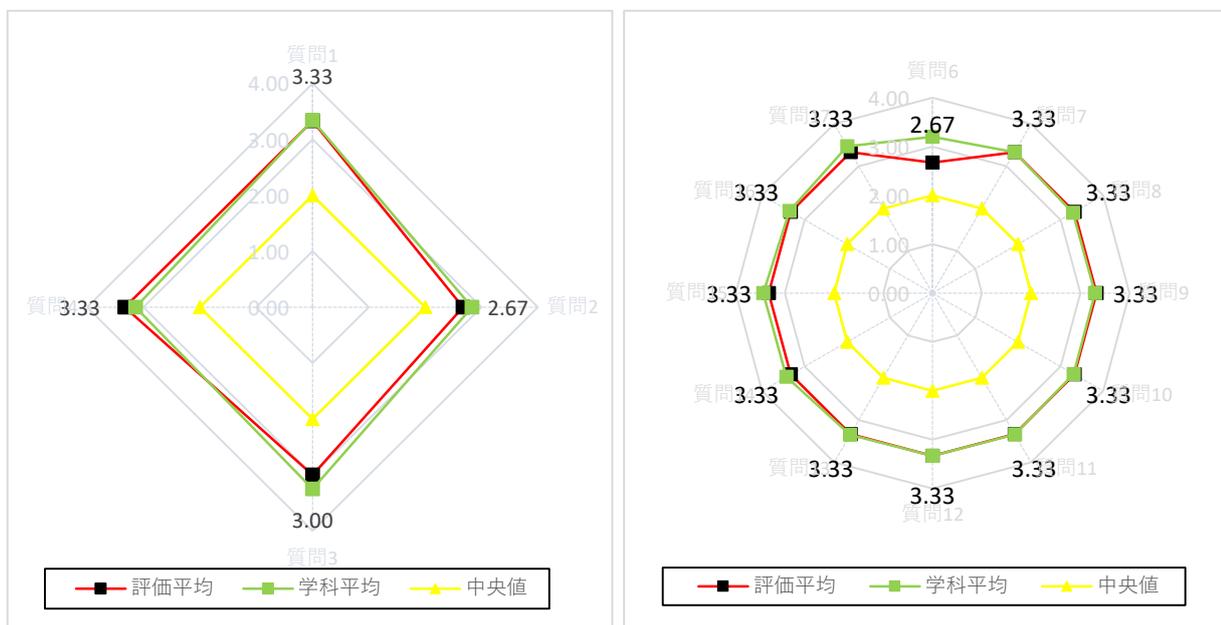
その上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.75、②授業の総合評価は4.00であり、回答学生は大変充実した学びとなったことが窺える。本授業は4年生の選択科目であり、療育現場におけるフィールドワークをメインに行っている。フィールドワークでは、対象児や保護者、現職の保育者や療育スタッフの中で学ぶことができ、受講生の全員から実り多き機会であったことに満足しているとの感想を聞いている。

(3) 次年度に向けての取り組み

受講生全員が授業評価を行うよう、あたらめて、授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として100%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

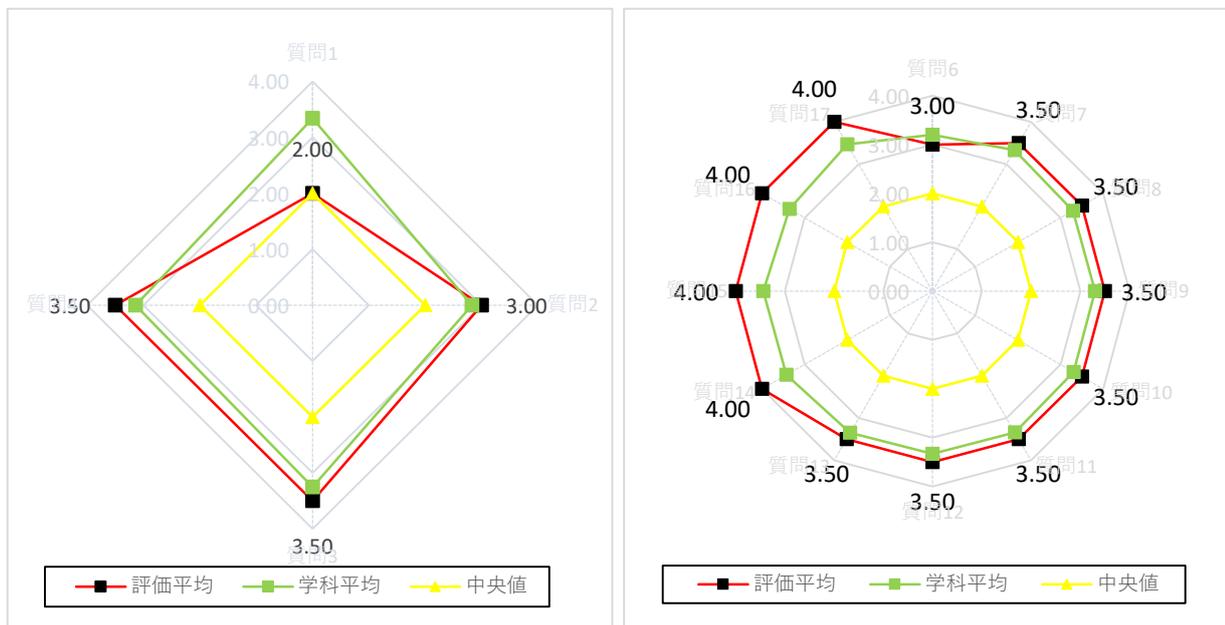
シラバスについての説明が不十分であったという点が低評価である以外はおおよそ学科平均で高得点であると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

シラバスについての説明をより詳細にし学生が見通しを持った学習が出来るようにする

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		卒業研究	8名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

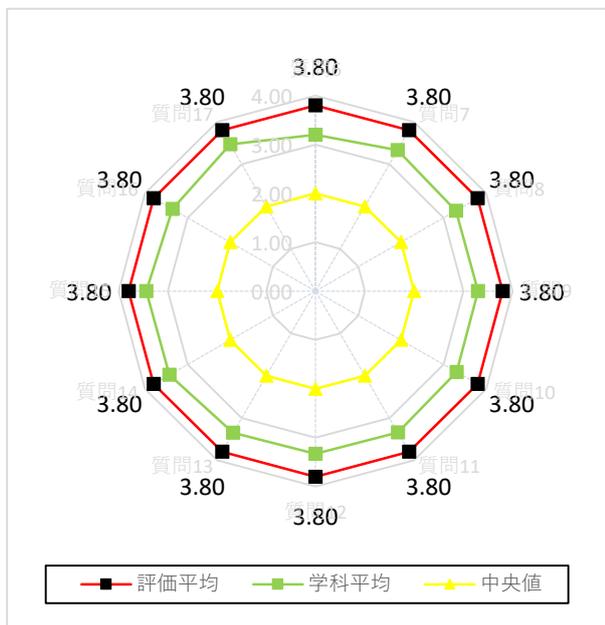
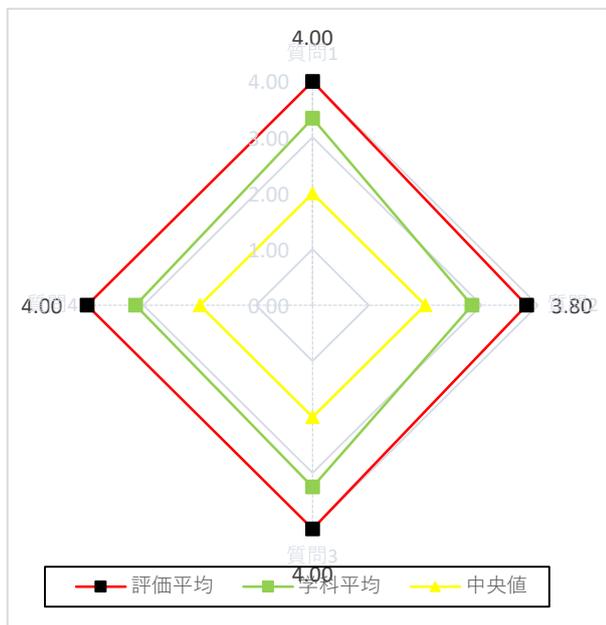
シラバスについての説明について、学生の理解が不十分であったと考える。

(3) 次年度に向けての取り組み

配布資料についての改善を考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		学校インターンシップ	30名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

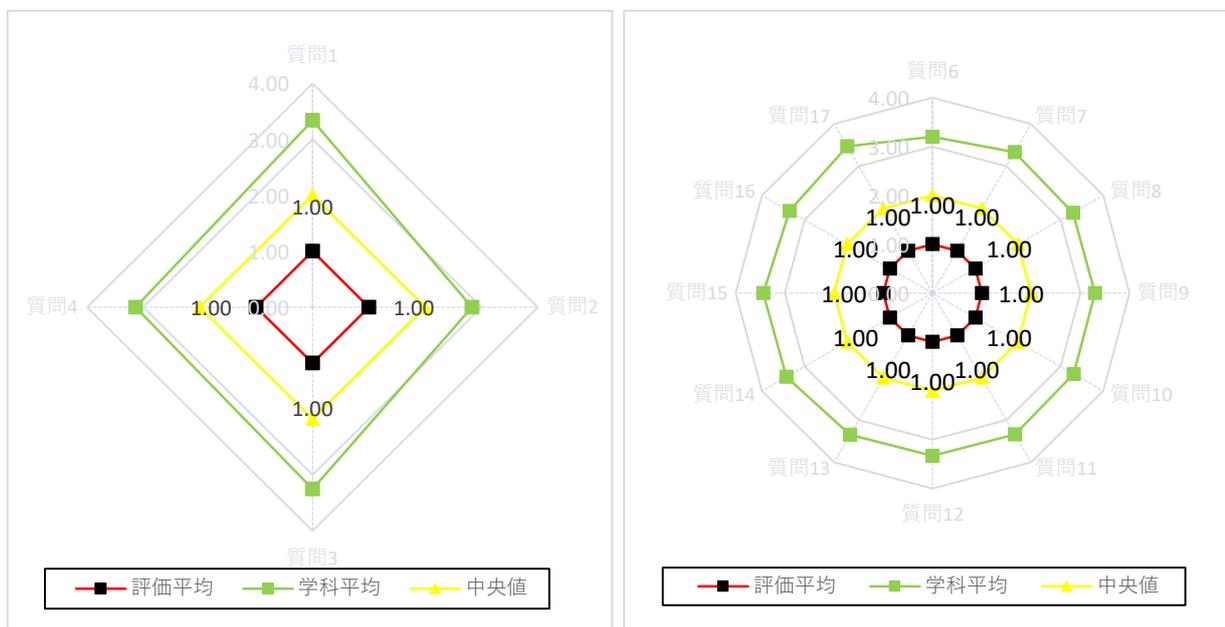
すべての問いに対する評価が、学科平均を上回っている。その理由としては、学校インターンシップに対する学生の意識の高さであろうと考えられる。学生は、四年次の小学校教育実習の前段階としての位置づけをよく理解していると考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

今後とも地域の小学校との連携を図りながら、学校インターンシップを継続していくことが重要である。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		障害児の理解と支援	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

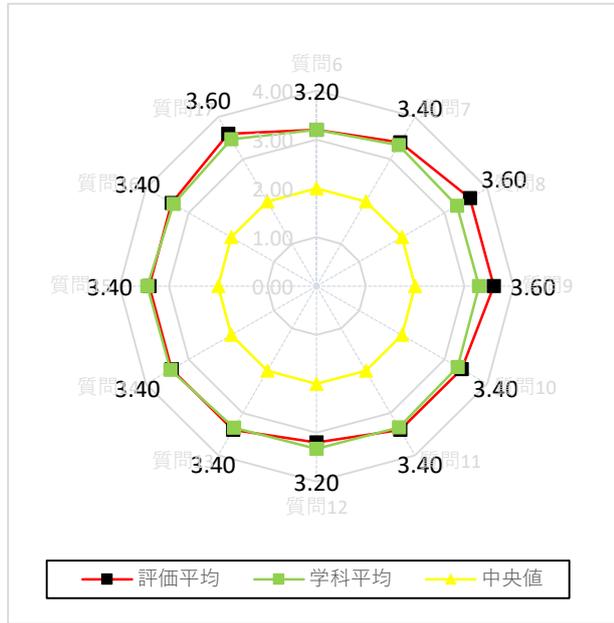
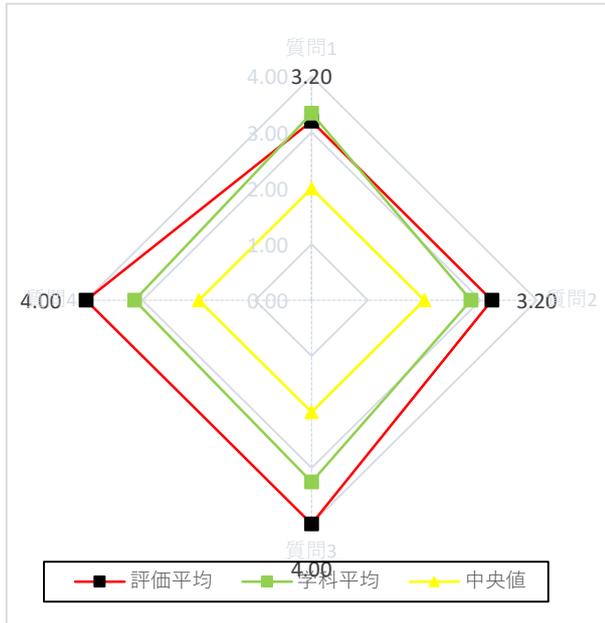
18名中評価者は1名で、その評価した学生は、授業にもまじめに参加しない学生の評価である。その1名の評価で何を分析するのか疑問である。ちなみに昨年の評価では高い評価であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

実際の体験等を設定するとわかりやすい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		環境教育論	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

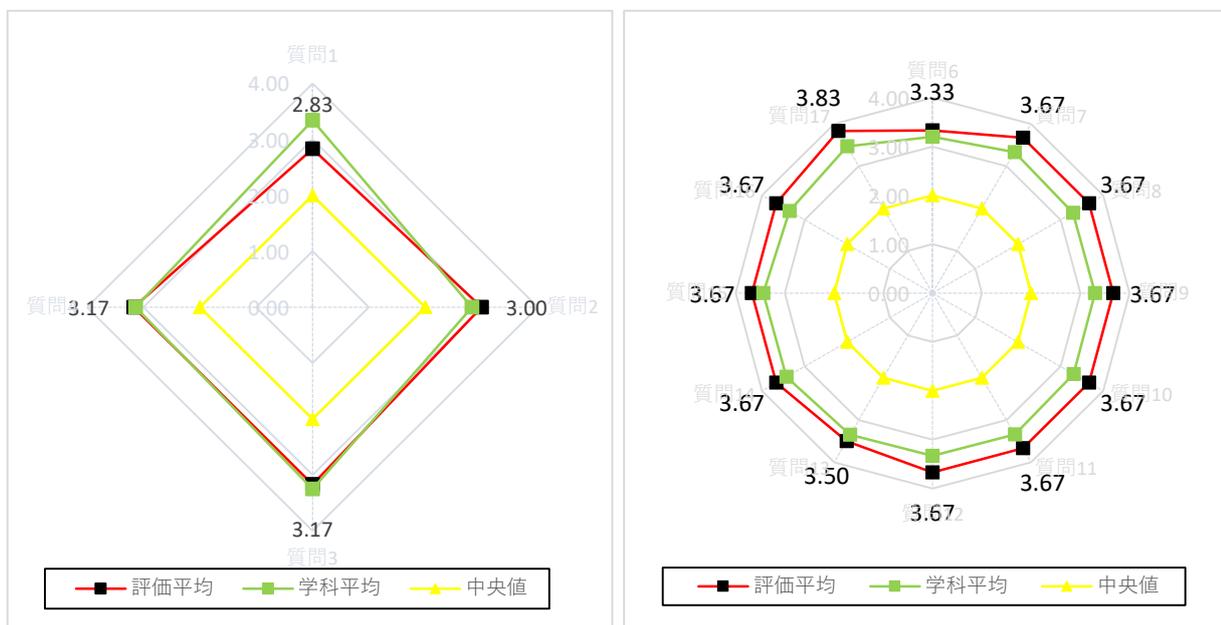
全体的に評価は高かったものとする。

(3) 次年度に向けての取り組み

配布資料の改善

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子どもの科学	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

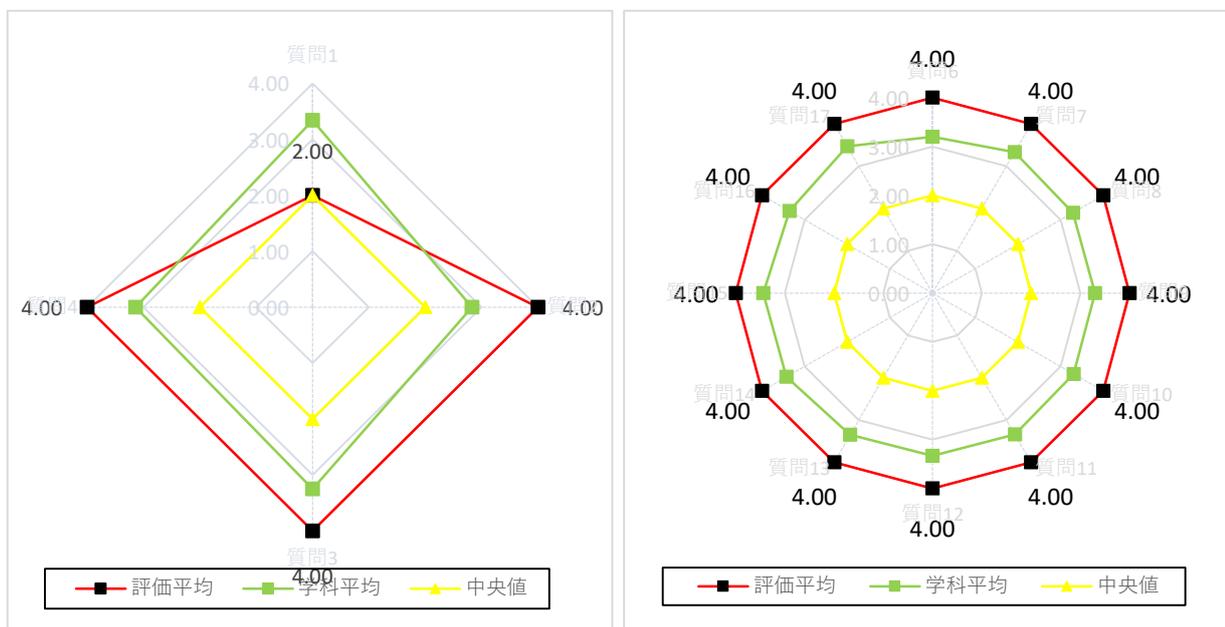
自由記述で「教採にも役立った」とコメントがあり、学習が有効に活用されたことが判断された。授業計画については、毎回授業の冒頭で説明し、次回の授業内容についても説明していたので、学生自身がシラバスを毎回確認する必要はなかったことから、質問2は低くなっていると考え。授業の評価については総じて平均より高い値を示しており、授業への満足がうかがい知れた。授業は、教育実習期間が含まれるなかで、計画通りにはいかなかったが、教育実習後の学習意欲が高まりを伴い、効果的に授業を展開することができた。

(3) 次年度に向けての取り組み

「子どもの科学」への理解を通して、学習指導案作成、教材活用がより効果的に導入できるよう、教育実習期間を上手に利用し展開の改善を図りたい。4年次の選択科目であり、学生の履修への関心は低く、履修希望者は少ない。シラバスの学習内容をより魅力的示す工夫も必要と考える。今後は実際に教材を活用する頻度を増やし、活動による学習の充実を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		体育（応用）	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

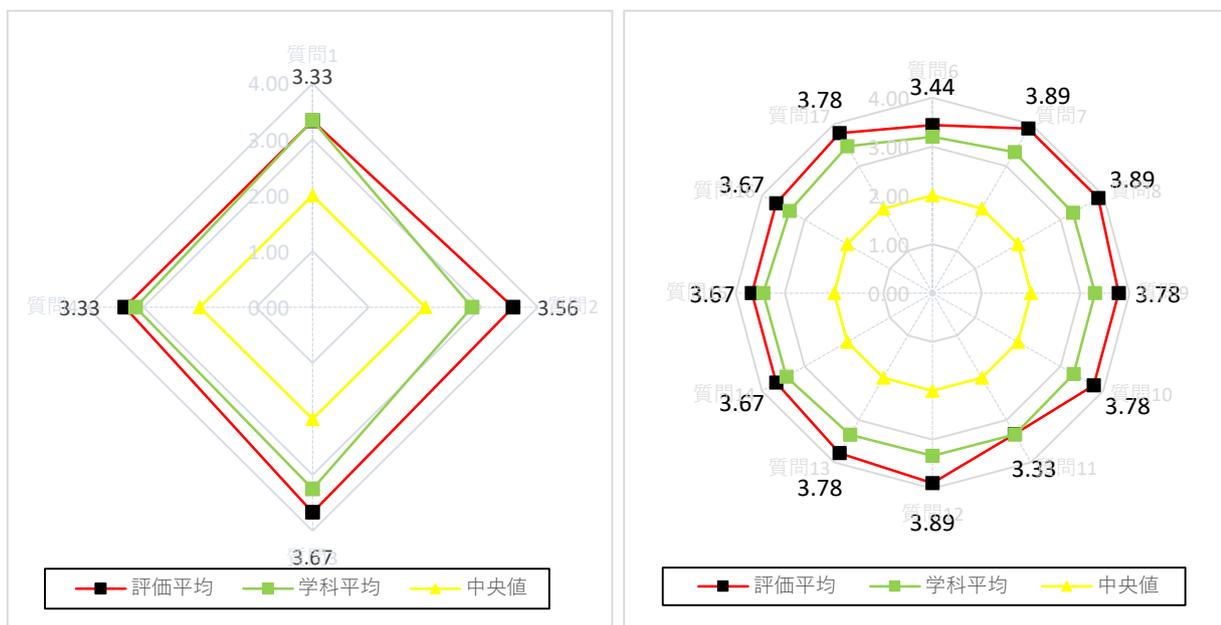
ほぼすべての項目で高評価である。今後もより改善をして高評価を目指したい。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き精進する

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		歌唱表現法	15名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

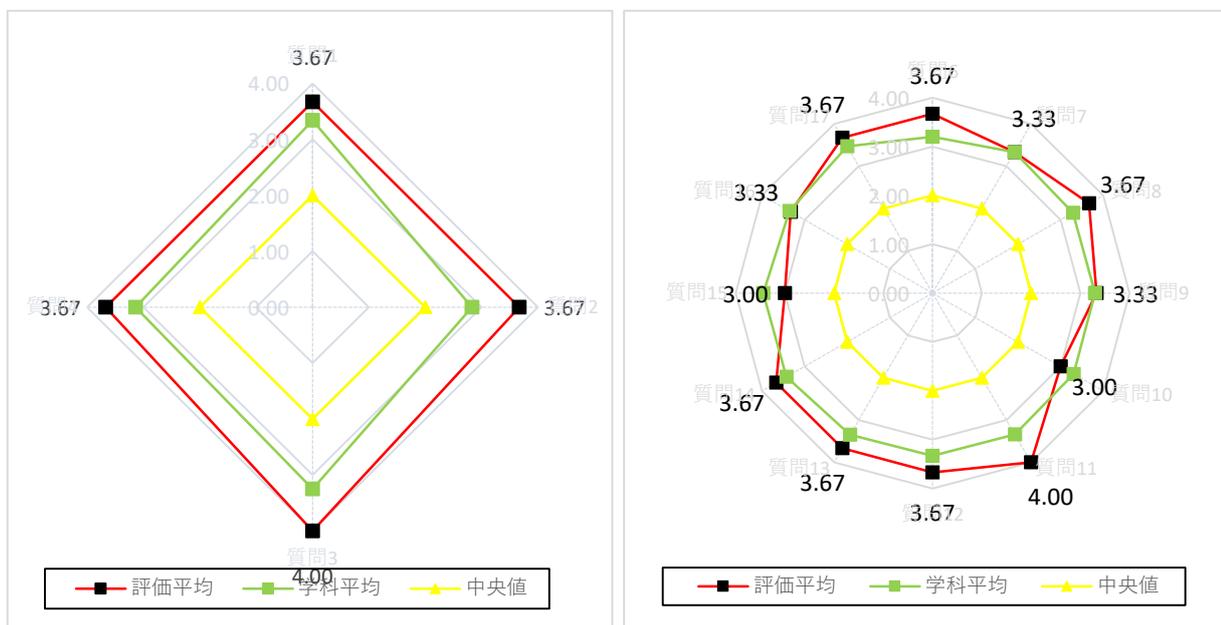
質問4「あなたはこの授業を理解するために自分で何か工夫をしましたか。」について平均的な値となっているが、受講者はグループ発表や技術の習得の練習について指導に従って工夫を行っていたとみている。質問11「教科書・配布資料等は役に立ちましたか。」について平均的な値になっているが、教科書に沿って授業を行っているので、授業に役立っているものと思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

概ね平均をやや上回る値となっており、評価はそれなりの水準に達しているものと思うが、新年度の受講者に合わせた指導内容となるように工夫し、改善を図っていきたいと考えている。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		ピアノ	42名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

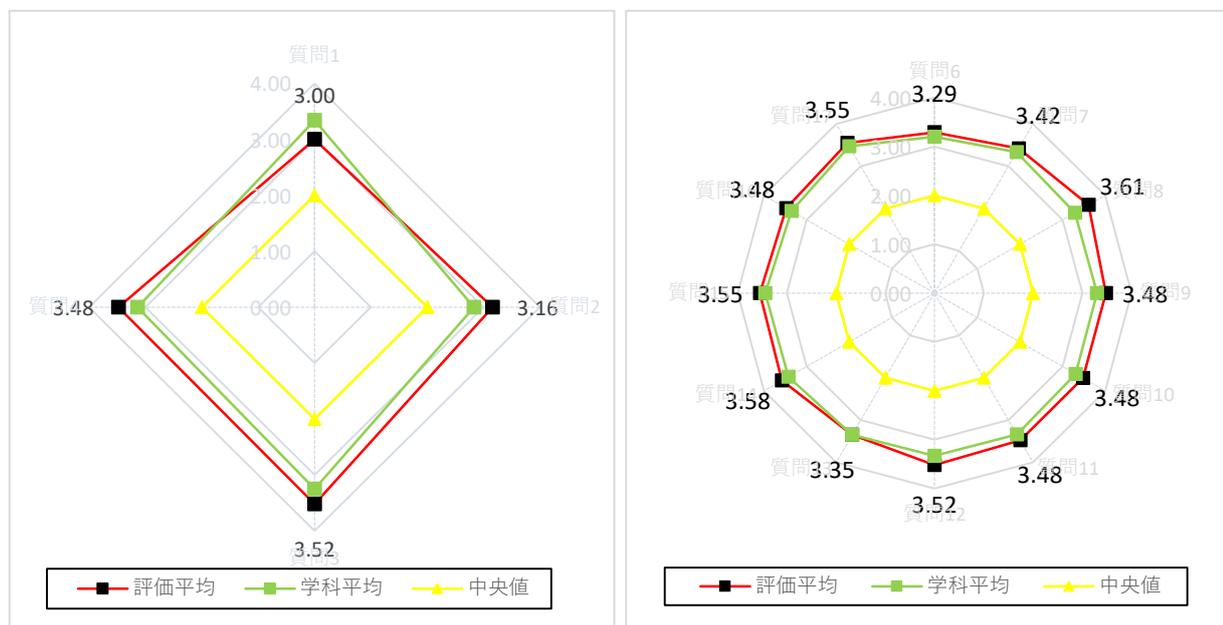
この授業は、ピアノ再履修者を対象に開講している。ピアノ実技に関しては課題が多い学生たちではあるが、読譜や理論的理解には何ら問題が無い学生も含まれている。分かってはいても、弾けないもどかしさを痛感している学生たちである。質問項目10と15は、他の項目よりも低い評価となっていた。この授業はML教室で行っており、板書は行わない。質問項目10の評価は、それを反映しているものと考えられる。また、個人レッスンでは、その時々々の学生に応じた指導を組み入れていく必要があるため、個々の学生に対する指導時間は、必ずしも均一ではない。日によって、増減が伴う。このことが、質問項目15の評価に?がついていると思われる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度は、レッスン時における個別指導に係る時間のかけ方を再検討したいと考えている。そのためには、非常勤講師の先生方との連携の強化を図り、毎時のレッスンでの情報共有を図っていくことが肝要であろう。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		リズム表現指導法	88名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

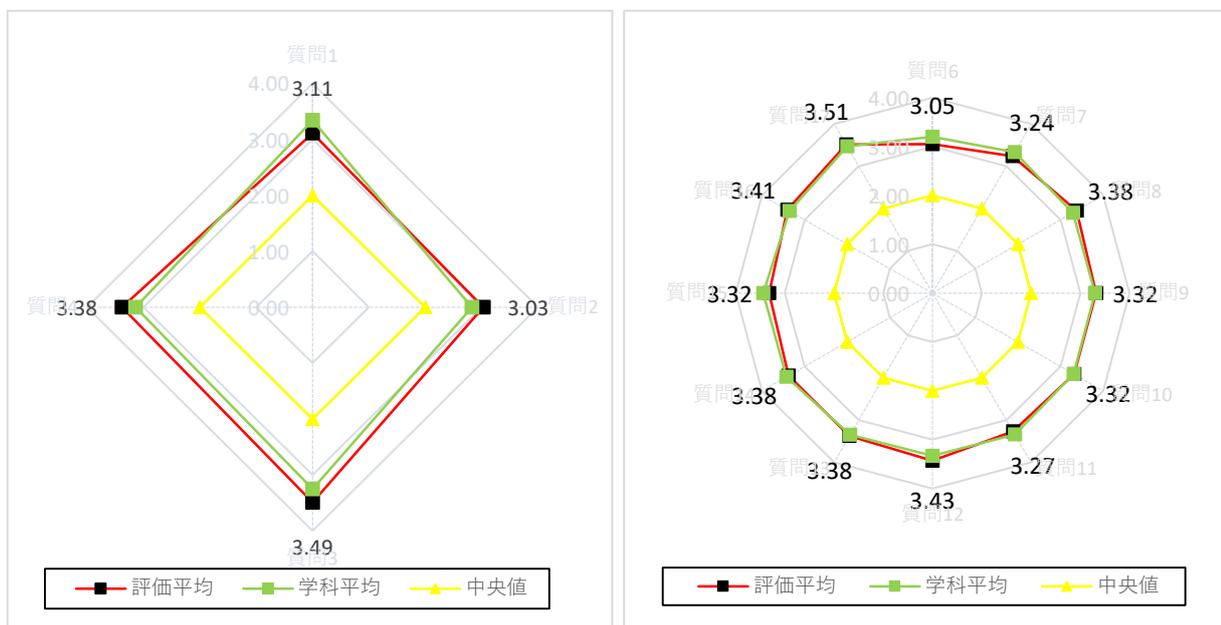
学科平均を若干上回る結果である。学生生活も半期を終了しているクラスなので全体的に和やかな雰囲気である。しかし、コミュニケーションに関わる遊びやダンスをしたことにより、より親密度が増したようである。評価結果を見ると授業に対して興味を持った学生が多かったが、人前で表現することを苦手とする学生が、短大部よりも多く感じた。半期を担当した後は、このような授業科目が3年間ないので、半期の中に授業内容を詰め込み過ぎた感はあるが、将来現場で活躍する学生になってほしいので、結果はこのまま受け止めたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

毎年シラバスの説明をしたことを一回目に念押ししていても、相変わらずシラバスの評価が低い。次年度も懲りずに説明をしたい。また、授業内容に関しては、学生が知識や技能を楽しく身につけられるよう授業研究を続ける。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		造形表現指導法	62名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

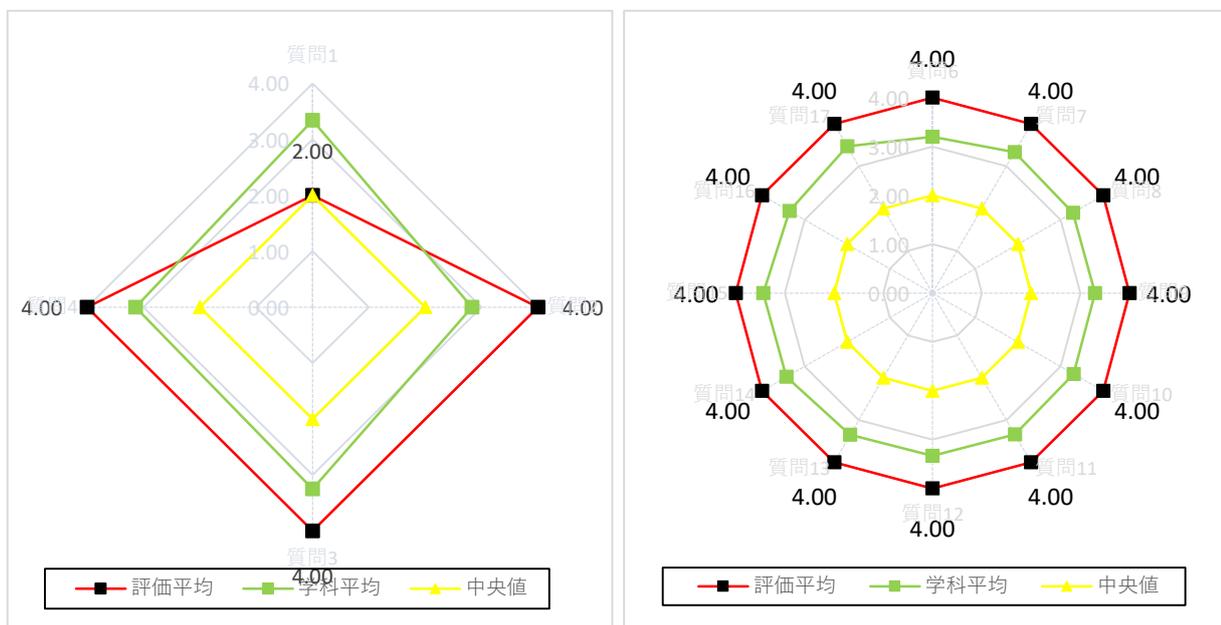
多少のシラバスとの相違が生じてしまった。おおむねの評価は得られたと考えられる。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度からは、一層の内容の充実に努めたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		国語科演習	17名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

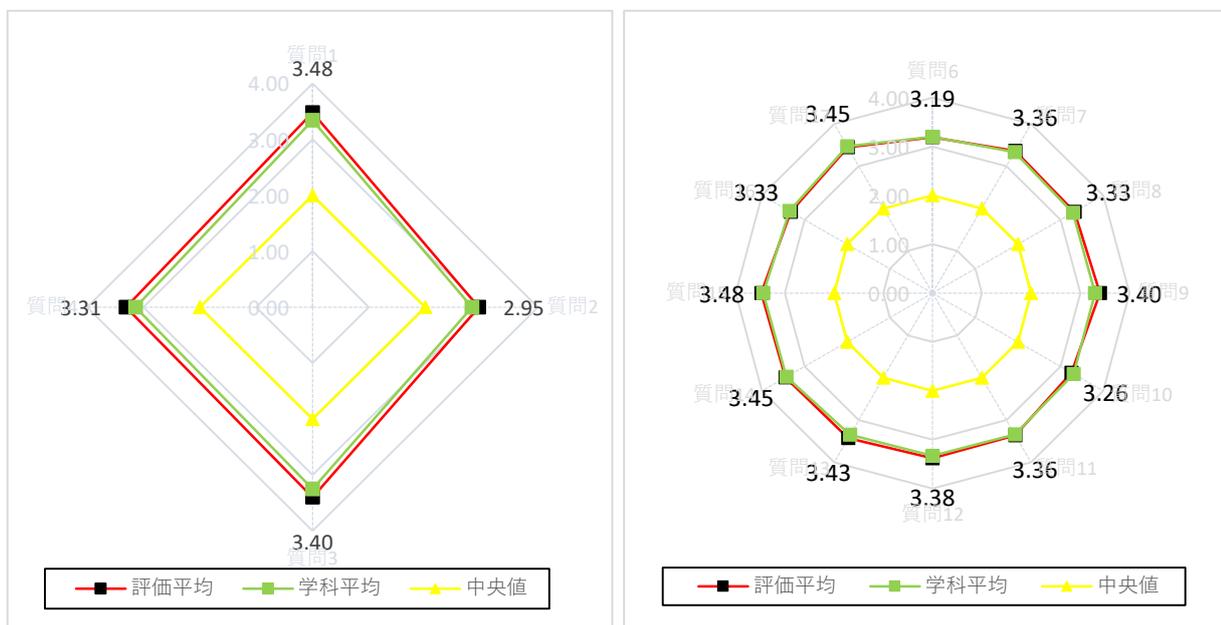
1年次開講の「国語」「文学と言語」「保育内容指導法（言葉）」、さらには、2年次開講の「国語科指導法」などの科目が基盤となって、「国語科演習」が展開されることを授業の中で繰り返し語り、学生の国語力の向上及び国語科指導法の充実に努めてきた。授業では、教材研究の仕方、発問・板書の仕方、学習指導案の書き方、評価の仕方など、学校現場に役立つ実践的な指導力を身に付けることをねらってきた。また、授業では毎時間、学生に学習を振り返らせたり、自分の課題や疑問を意識させたりしながら、「いかに授業をつくっていくか」を学生と一緒に考えてきた。結果、どの項目も平均を大きく上回ることができ、学生それぞれに達成感をもつことができたのではないかなと思う。

(3) 次年度に向けての取り組み

複数の教科等を指導する小学校教諭にとって、「国語」は大変重要な位置を占める。国語科授業の善し悪しが、学習指導はもとより、学級経営や生徒指導などにも大きな影響を及ぼす。次年度も学校現場に役立つ「実践的指導力」を身に付ける「国語科演習」の授業実践に努めていきたい。そのためには、「言葉が使われる実の場を意識した授業づくり」「児童の実態に応じた言語活動の工夫」「発問・板書などに代表される国語科における指導技術の錬磨」「教材研究の基本を身に付けること」などに一層力を入れていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		音楽表現指導法	73名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

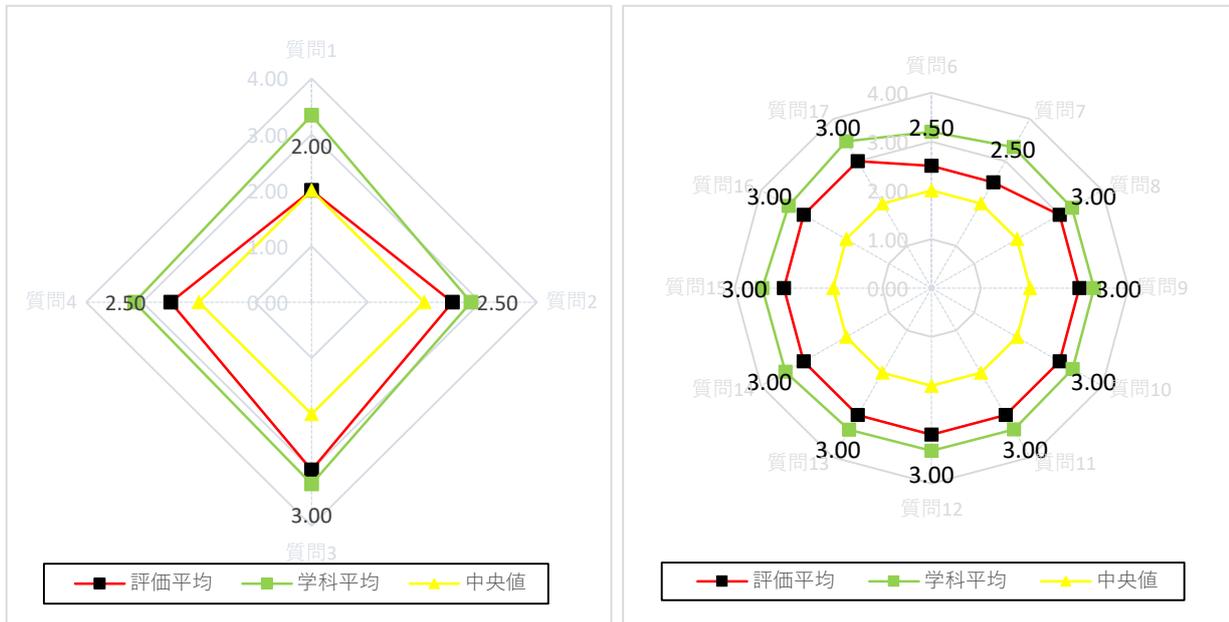
今年度の学生たちの出席率や授業への参加度等は良好であり、授業中に取組んだグループワークでは互いに意見を述べ合いながら熱心に取り組む姿が見られた。幼稚園や保育所での実習を想定しながら授業を行っている。特に、音楽表現の諸活動に対する子どもの姿を知ることや、保育者に求められる適切な援助をできるようにしていくためには、具体的な事例紹介を丁寧に行っていく必要があると考えている。学生が興味や関心を持ち、分かりやすい授業と成り得るよう、今後、さらに授業構成を再考し、授業内容の充実を図っていききたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

この授業ではCD、DVD、ピアノや打楽器等の楽器など、音源となるものを多用する。時には楽器を手に持ち、奏でながら模範を示すこともあるため、マイクを持つことができないことも多々ある。そのため、授業者の声が届きにくくなる場合も起こり得る。次年度以降も、分かりやすい授業を行うためには、常にこの点の配慮は欠かせないと思っている。また、保育現場における子どもの活動の姿を伝えるために、口頭での説明に加え、映像等の視覚的な資料の充実を図り、学生が興味や関心を持ち、保育者の援助技術の習得に関する理解の深化を図ることができるような授業内容の充実を図っていききたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		社会科演習	20名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

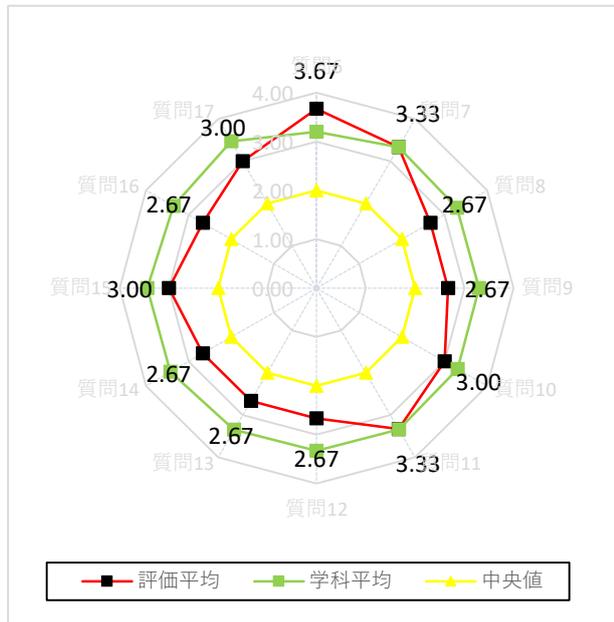
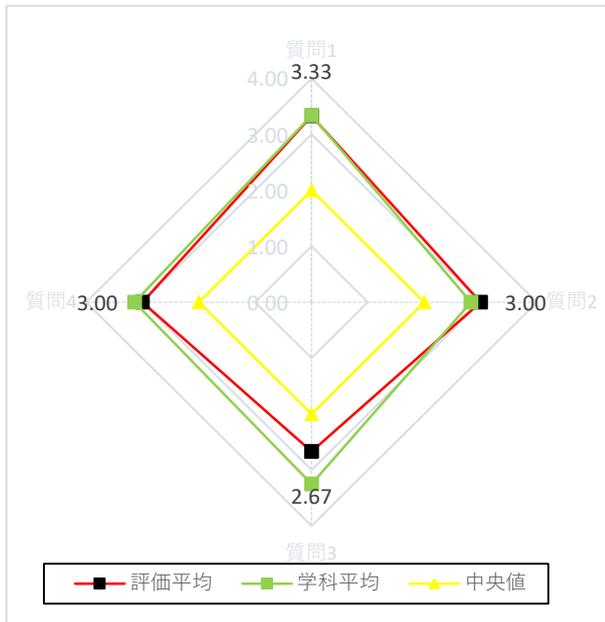
すべての問いの評価が学科平均を下回っていることを、真摯に受け止めたい。模擬授業を中心に社会科演習を行っているが、学習指導案作成、模擬授業実施が、学生の負担となり、評価全体に影響しているかもしれない。

(3) 次年度に向けての取り組み

「社会科演習」に対する学生の希望などを聴いて、授業に反映させることで、評価の改善を図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		理科演習	12名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

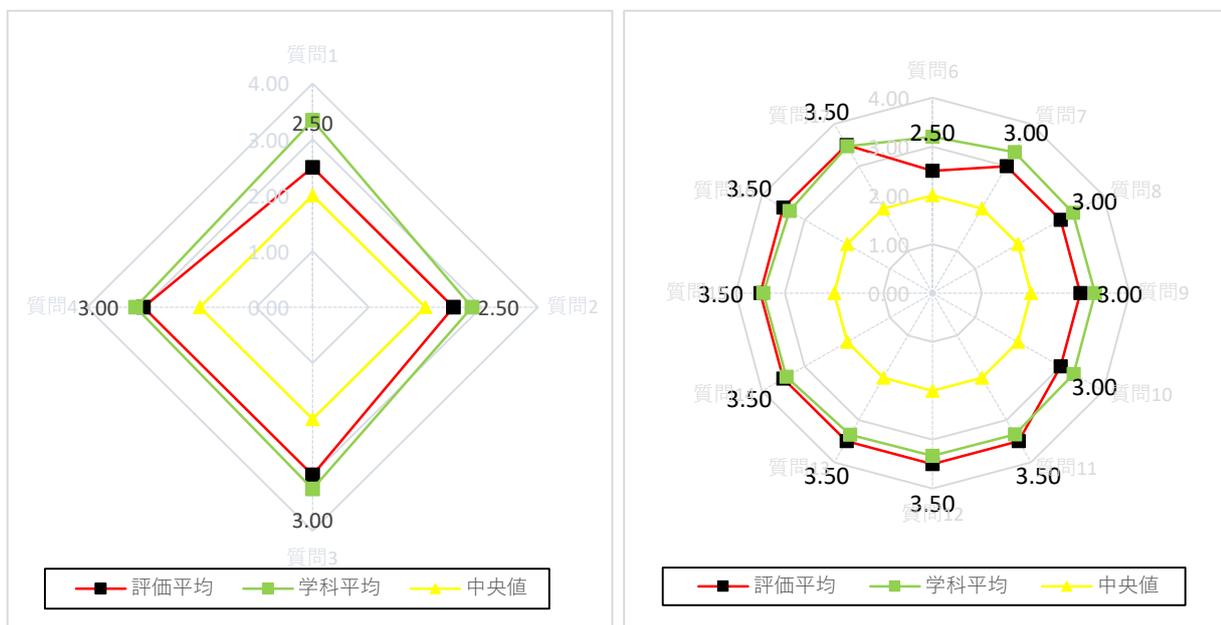
理科科目について興味を持たない学生が数人みられた。

(3) 次年度に向けての取り組み

理科科目について興味をもたせる資料の改善

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	10名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

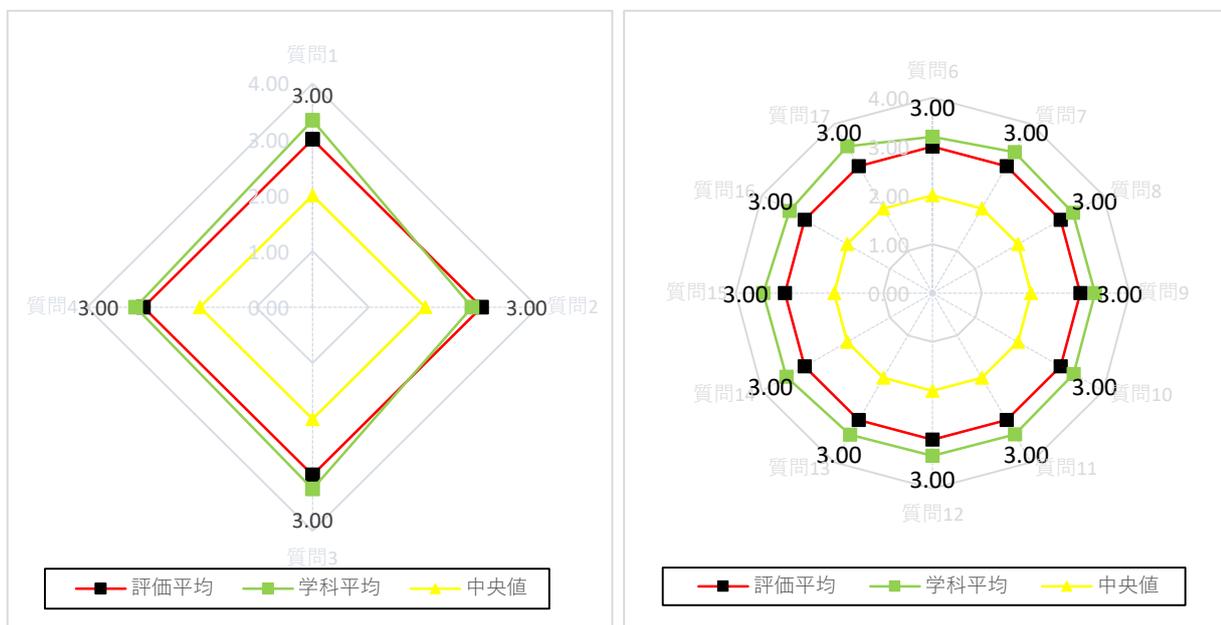
回答率をみると、10名中2名の回答で20%であることが大きな問題である。その上で、本授業への授業評価を行った学生について、①学生自身の参加態度の総合自己評価は3.00、②授業の総合評価は3.50であり、回答学生は概ね充実した学びとなったことが窺える。

(3) 次年度に向けての取り組み

受講生全員が授業評価を行うよう、あたためて、授業評価の意味、意義も伝え、学生の学びのモチベーションを高めていきたい。回答率の目標として100%を目指す。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

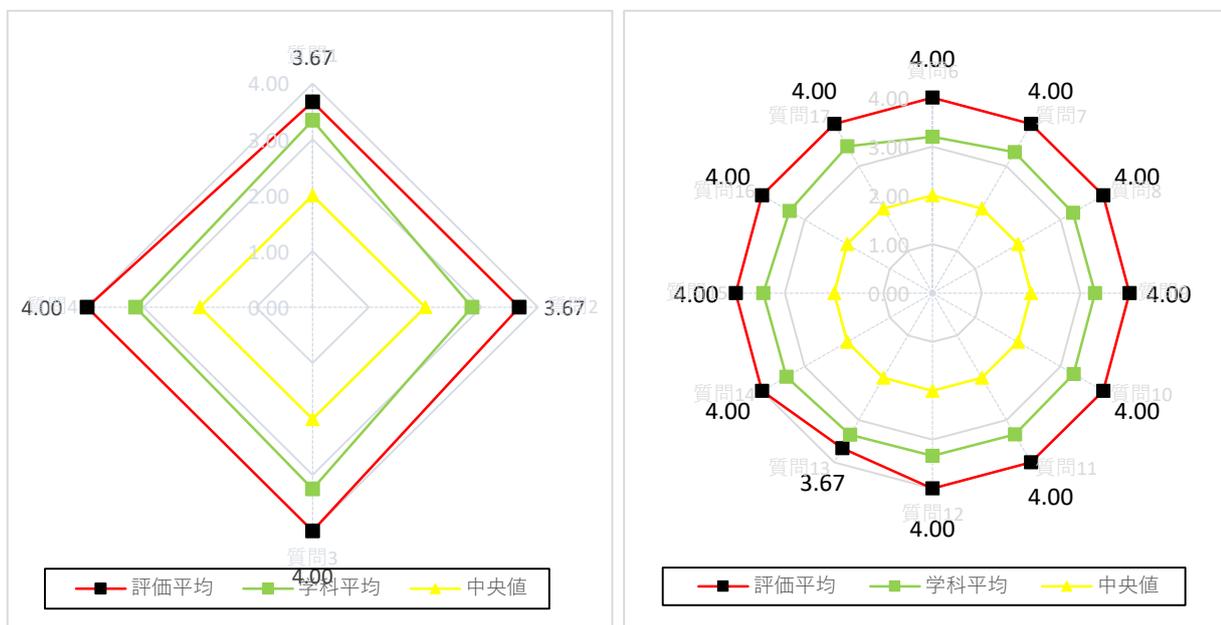
演習の授業は、学生の主体的な取り組みで成り立っている。まずまずの自己評価をしたことが分かる。しかし、子ども学演習は、子どもミュージアムという大きな取組と、実習が多いため、一貫した学習活動を組織しにくい状況がある。子どもミュージアムなどの取組についても再考すべきである。この評価は、演習科目には適さない。

(3) 次年度に向けての取り組み

学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、授業のやり方を工夫していく。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	7名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

すべての項目について、一定以上の高い評価を得ている。子ども学演習については、4年次の卒業研究の基礎になるものであり、論文作成に向けてさまざまな工夫をしているところである。現在は仮テーマを設定し、それに基づいた先行研究検索やその内容について検討しレジュメを作成して中間発表を行った段階である。学生にとっては、自分が興味ある分野において自らテーマを設定し文章を書くという経験があまりないため、かなり細かい部分まで指導する必要がある。

これらのことを踏まえると、一人ひとりの学生の個性や能力に応じた個別対応が不可欠であり、細やかな配慮が求められていると考える。

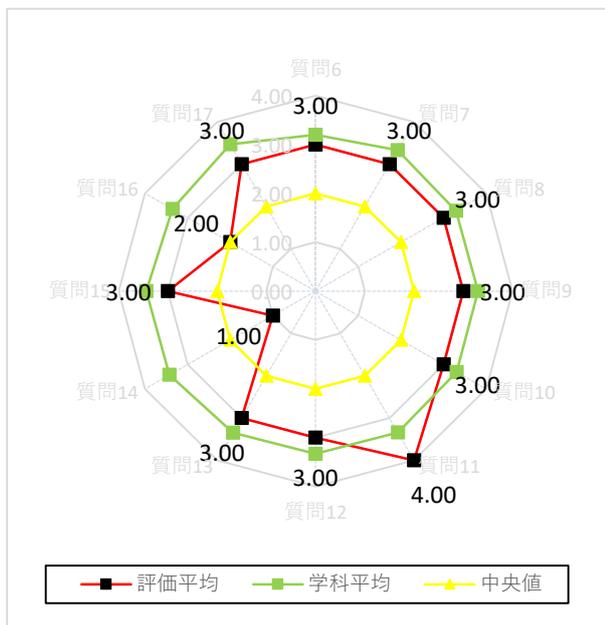
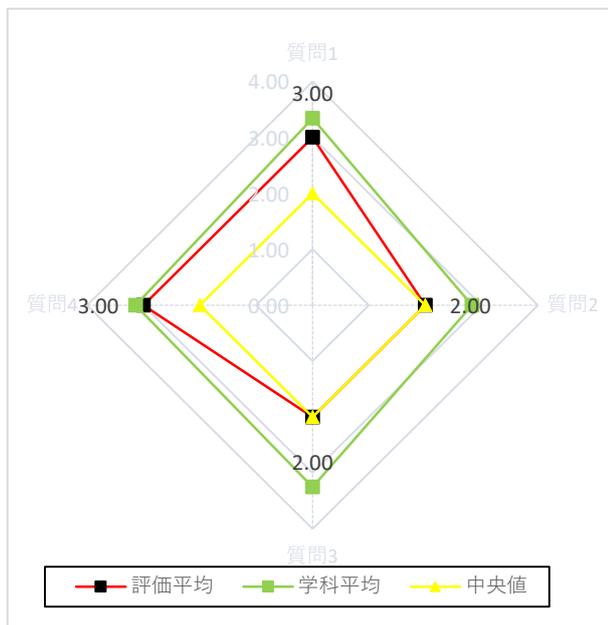
(3) 次年度に向けての取り組み

一人ひとりの学生の状況に応じた細やかな配慮を怠らず、学生が自分の考えをまとめて文章で表現したり、他人に対して自分の意見を発表するスキルを身に着け、4年次の卒業研究に進むことができるようしっかりと指導していきたい。

さらには、それぞれの考え方や研究成果をゼミの学生間で共有できるような時間を設けることも重要であるため、そのような機会をより多く経験させていきたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		子ども学演習	4名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

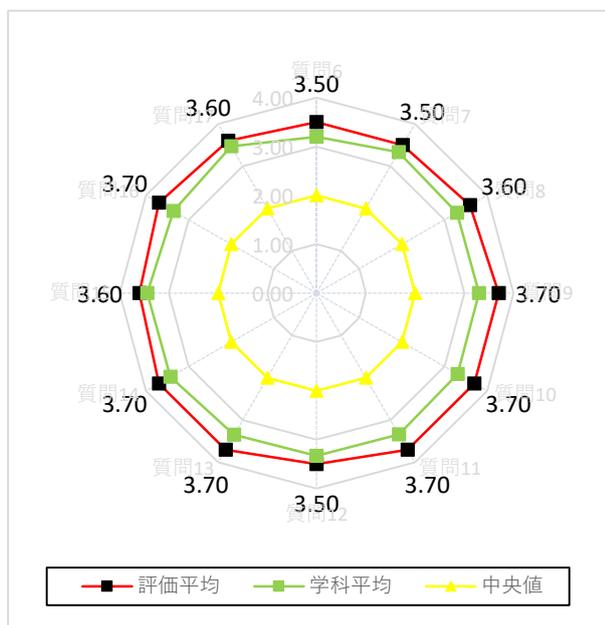
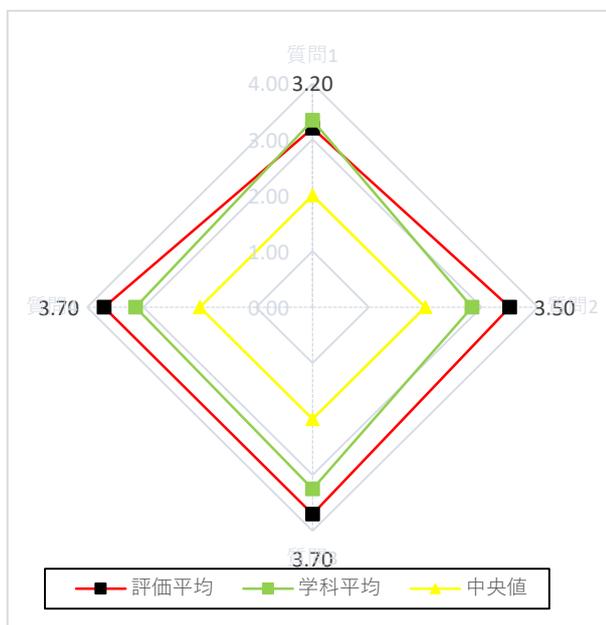
回答者1名のため、考察を省く。

(3) 次年度に向けての取り組み

回答者1名のため、記述を省く。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	22名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

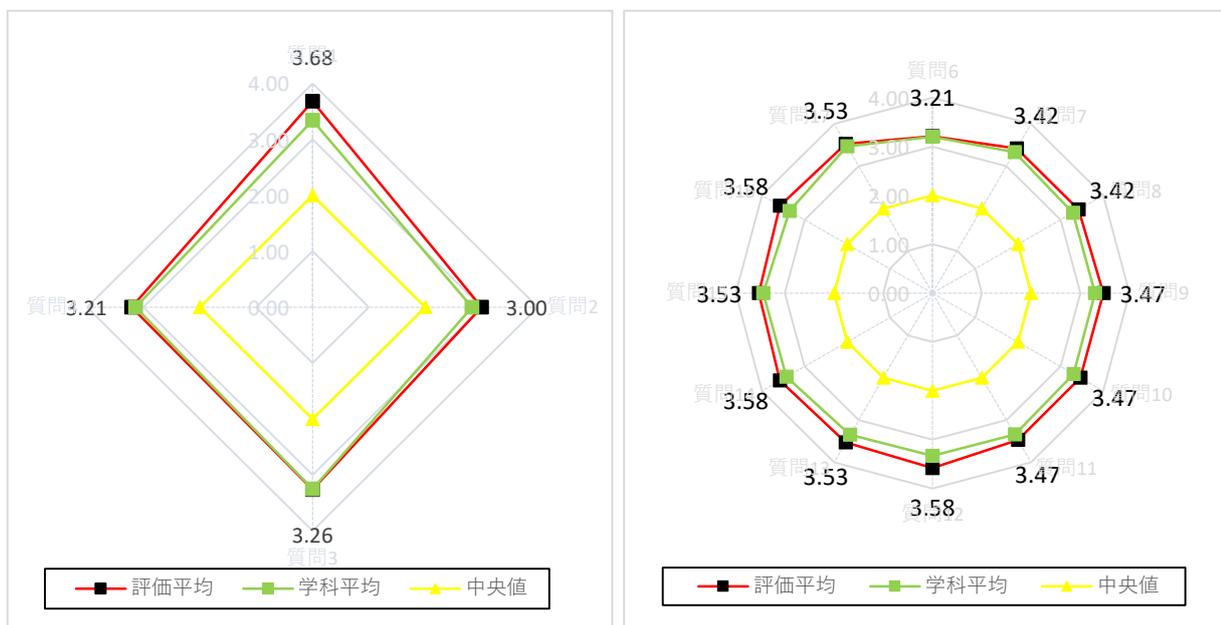
学生の主体的な参加度が高く、満足度が高いことを喜ばしく思った。学生主体の授業を展開したことがよい結果につながったようだ。

(3) 次年度に向けての取り組み

引き続き、学生の主体的な参加を中心に、学生と協力・協議しながら、授業のやり方を工夫・改善していくことが大切である。学生との話し合いを大切にしたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	25名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

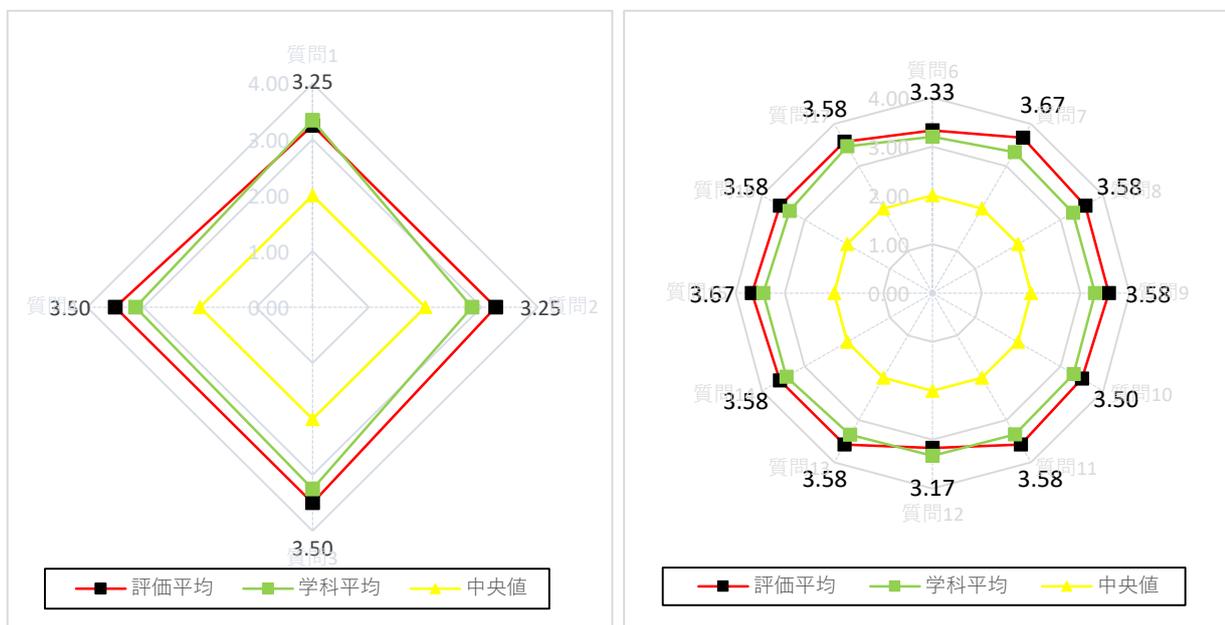
前年度は問6・13が学科平均より低かった。問13「授業の進む速さ」については、前年度の反省からレポート作成の指示をより明確に行ったことが、改善につながったと考える。問6については、年度初めにシラバスの説明を行ったので、学科平均まで改善することができたが、まだ十分ではないので、今後さらに丁寧に説明していきたい。

(3) 次年度に向けての取り組み

年度初めのシラバス説明、適切な課題提示やフィールドワークを取り入れた授業展開などをおして、学生の学習意欲を高め、授業評価の底上げを図りたい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

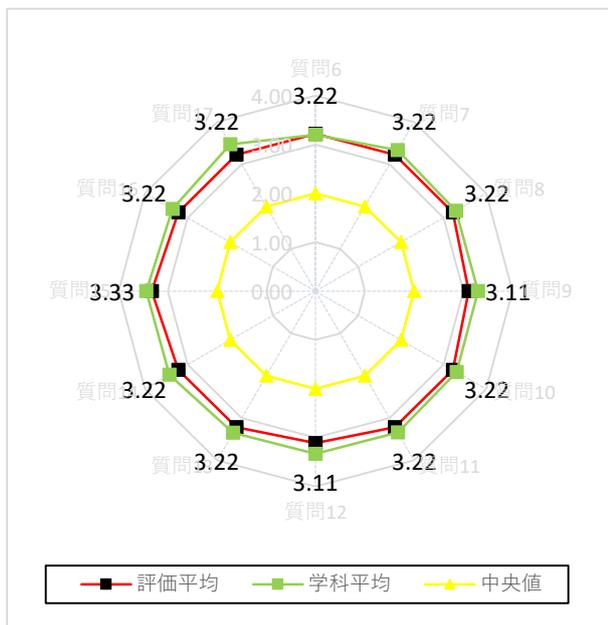
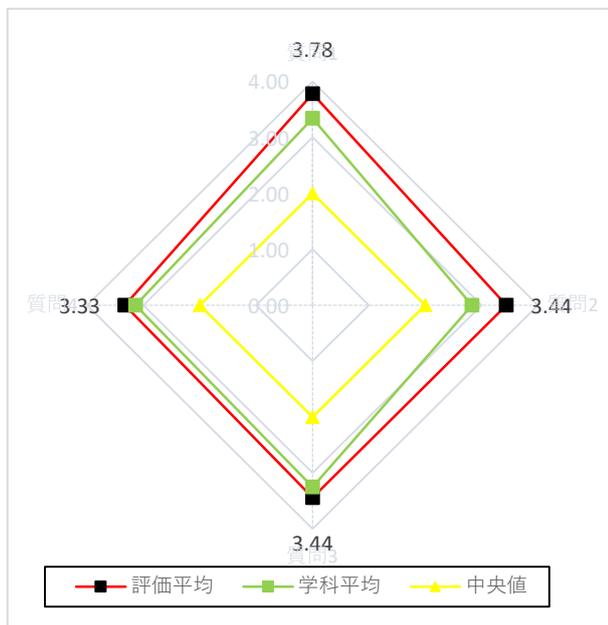
本科目の受講生は21名で、演習としては多目であって授業には工夫が必要であった。
 学生の授業態度に関する項目は、3.5または3.2で、学科平均値に近い。
 授業に対する評価は、ほぼすべての項目が学科平均を上回り、シラバス、授業目標、わかりやすくする工夫や学生への対応などの項目は3.58で高かった。
 学生が自分で調べ、討議し、発表するというゼミナール形式が効果を挙げている。

(3) 次年度に向けての取り組み

次年度以降も、少人数ゼミの特徴を活かし、ディープ・アクティブ・ラーニングが実現できるよう努力したい。

学部	学科	担当者	科目名	履修者数
子ども学部	子ども		総合演習	21名

(1) 学生による授業評価結果



(2) 結果の分析と評価

ほぼ「学科平均」と同様であった。

(3) 次年度に向けての取り組み

本年度を上回るように取り組みたい。